



* 0019486000 *

0019486-000

a 330-236

機械の経済学

戸田武雄・著

刀江書院

1936

ADB

DEEH
OH

中
西
支
生

户
田
武
雄

戸田武雄著

【社會哲學叢書】

機械の經濟學

刀江書院刊

330
236



461

はしがき

この書の成立事情その他本来この書の序文として述べらるべきであつたところは、跋として卷末に添へられた。

古典経済学の完成者としてのリカルドが、産業革命の進展につれて、彼の機械理論を一八二一年その主著の第三版を出すに當つて修正し、卒直に事實を事實として承認したことは周くひとの知るところであるが、その後凡そ百年にして謂はゆる世界恐慌の襲來は、傳統の経済學的思惟をゆり動かした。良心的な経済学者としてレーデラーに關して、嘗てリカルドについて行はれたと相似たことが行はれたのである。然し乍ら世紀の経過は、構成的失業軍といふ一つの範疇を経済學にもたらした。

黨派的の憎惡と愛好とによつて掻き亂され

彼が影像は歴史の中に搖いでゐる

1 まことに、経済學は政治経済學として、愛憎の坩堝の最中にある。そこでは資本とは何か、利子とは何か、と云ふやうな本格的な命題についてなほ定かでないのである。このとき、我々

のとるべき態度は忠實に歴史に學ぶといふことであらう。

この書は跋文にも述べたやうに、主觀的には私の社會學研究途上の一の産物であるが、經濟學の試金石である機械の問題を把へて、經濟學的思惟の歩みを描き出さうとしてゐる點で、學說史の役目をも果すであらう。とまれ、資本家社會に於て機械の採用が失業者を生まぬといふ補償説の論理とその歴史的位づけがこの書の目的とするところである。機械の經濟學はまたまづ第一に失業の經濟學である。人間は解決しうる問題をのみ解決すると云はれる。それはそれを解決しなければ歴史が一步も進まない問題である。構成的失業軍の問題に對して答へることの出来ない社會科學は、それが經濟學と呼ばれようと社會學と云はれやうと、文明學等々その他何と稱せられやうと最早時代の要求に答へることはできないであらう。

「機械の經濟學」はもとよりひとが如何なる政治的結論を描き出すべきかを暗示するものではない。たゞ歴史の論理と云ふものを忠實に傳へてゐれば幸ひである。

昭和十一年五月

著 者

「機械の經濟學」目次

一、序 説……………	三
二、機械とは何か……………	二
三、機械の經濟學の取扱ひ方……………	一七
四、重商主義よりアダム・スミスまで……………	二六
五、リカルド……………	三六
六、シモンド・ドゥ・シスモンディ……………	四〇
七、ロバート・オウエン……………	四三
八、アンドリュー・ユア……………	四八
九、ジェイムス・ミルよりジョン・ステュアート・ミルへ……………	五〇
一〇、ジェイ・エイ・ホブスン……………	五六
一一、レーデラーとブウニアチアン……………	五六
一二、現代獨逸經濟學の機械理論……………	一〇〇

機械の經濟學

一三、現代英國に於ける機械問題……………一六七
一四、アルフレート・ケーラーの業績……………一七四

目次終

§ 序 説

十六世紀から十八世紀にわたつて新大陸の發見以來、新航路の開發、原料地の獲得、販路の擴大、金銀の流入、新發見地の掠奪等によつて、歐羅巴の商人は著しい富を蓄積し、謂はゆる資本の原始的蓄積が行はれた。而してこれとともに商品生産乃至貨幣經濟の發展によつて、莊園やギルドの封建的關係は崩壊し、家臣や徒弟の解放となり、農村へは資本主義的生産方法の侵入の結果、多數の農民が土地を收奪され、プロレタリアの大軍を生じた。これ等の歴史的條件からしてマニファクチュアは、多數の労働者並びに多數の手工業者が一資本の支配のもとに、單一の場所、單一の部屋に結合されたことによつて成立したのであるが、その技術的基礎はなほ狭い手工業的基礎を越えなかつた。而も既に商品生産に必要な労働時間の短縮が意識された原則として現れて来て、機械の使用が此處彼處に始まる。然し機械はなほ分業の下役をなしてゐるにとどまり、著しい生産力の發展はなかつた。然し乍ら労働者の數が増すとともに、機械を生産するマニファクチュアが生じ、分業の發展につれて、マニファクチュアのうちに、マニファクチュアの經營を振り棄てる大工業の技術的基礎が出来る。機械が現れる。

機械を中心とする技術的進歩は、資本の發展期に於て主要な役割を演じた。然し乍ら、この技術的進歩はそれに対応する人間關係を有つてゐる。機械を問題とするにあつても、機械と勞働力との統一であるこの人間關係こそが問題なのである。即ち、勞働過程の組織はマニファクチュアの場合には、部分勞働者の結合に基き主觀的なものであつた。然るに大工業に於ける機械體系は純客觀的な物質的條件として完全に資本のものであり、資本は機械の導入により、自然力を以て人間力に代置し、自然科学の意識的・計劃的な應用を以て經驗の常規に代らしめ、技術過程の最大限の獨立性を確保することができた。かく資本の發展期に於ける近代工業の躍進的な技術的進歩は、勞働力そのものを土臺として、利潤によつて推進された。このことは謂はゆる資本の有機的構成の高級化となつて現れる。例へばジェイ・エイ・ホブソンは、「剩餘生産物の餘りに大なる部分が經濟組織の資本要因の改良と擴大の形態をとり、餘りに小なる部分が勞働要因の改良と擴大に向けられるア・プリオリの蓋然性がある」(J. A. Hobson, *Rationalisation and Employment*, 1930, P. 27.)なる表現を以てこの事實を述べてゐる。資本の獨占的段階に於ては、獨占は競争と絡み合つて諸々の新しい問題が提供される。生産力は絶對的に發展しても技術的進歩を人爲的に抑制する現象を生じ、資本蓄積のテンポと技術的進歩のテンポとが一致し

なくなる。「物理的科學は現在の社會制度を遙かに追ひ越して仕舞つた」(Scott, *Introduction to Technocracy*, 1933, P. 42.)といふテクノクラシーの思想が生じる。かくて構成的失業と計劃經濟とが現實の問題として成立する。

機械の經濟學は以上の問題と絡み合つて成立する。

云ふまでもなく、經濟學は、物そのものを研究するのではなく、物に媒介された人間の關係を研究するものであり、機械自體は本來經濟學の對象ではない。蓋し、經濟學は技術工學ではないのであるから。

「理論經濟學の根本思想に於ては、發達せる交易經濟の、而も我々の資本家的形態に於ける諸の事實が分析の對象をなすのである。」(E. Lederer, *Aufriss der ökonomischen Theorie*, Tübingen, 1931 S. 13.)

ところで、「欲望充足經濟における収益に對應するものは資本家的交易經濟においては、剩餘すなはち利得である。」(Lederer, S. 79.)こゝでは生産は剩餘を以て行はれるときのみ意味があるのであつて、如何にして經濟それ自體の循環が剩餘を以て繰返されるかを分析し、その合法性を示すことが理論經濟學の課題である。

「欲望充足經濟に於て生産手段は人間の手の補助者であるが、發達せる交易經濟にあつては生産の目標はできるだけ合目的な商品生産である。」(Vgl. Lederer, S. 73.)かくて資本家的交易經濟社會の至上命令は利潤の獲得である。こゝでは機械は人類の自然征服の手段として、はなはだしく利潤獲得の手段として存在する。「機械そのものは資本ではない。」「何が資本であるかは、事物の性質によつて定められるのではなく、一にその事物の立つ聯關によつて、決定せられるやある。」(Lederer, S. 75.)

機械はそれ自體として如何程生産物の分量を増加せしめるにせよ、何等新しい價值を生み出しはしない。レーデラーは、このことについて、「機械の應用による生産量の増加は利子の説明を與ふるものでない。資本の物理的生産力は、單に、一労働時間に對應する生産物の數量が増加を來たすといふことの條件をなすにすぎないであらう。生産高並に賣買高は高まるでもあらう。しかし生産者によつて實現される價值はさうではないであらう。まことに機械はなんらの利子をも生産しうるものでない。それは單に生産物を生産するにすぎない。なにゆゑに利子が生じるかは、機械的設備の技術的能力から説明せられべきものではなく、單に交易經濟の埒内においてのみ、經濟的に説明せられうるにすぎない。」(レーデラー『理論經濟學概説』有澤・大森

譯、一三九—一四〇頁、Vgl. Aufriß, S. 122.)ことを強調してゐる。このことが敢て労働價值説をまづまでもないことは、或は「素朴な」或は「motivieren」された「生産力説」に對するポエム・パウエルクの批評を知るものゝ肯定せざるをえないところであらう。(Vgl. F. Oppenheimer, Theorie der reinen und politischen Oekonomie. I. System der Soziologie. II. Jena. 1924. S. 683—689.)

原料は労働過程に於てその獨立の形態をなくしてゆくに對し、道具及び機械は労働過程に役立つ限りその形態をたもつ。而して機械は道具に比して、耐久性に富むこと、助成材の消費等に於て節約できること、生産の範圍が大であること、等によつて、本來の總價值とその生産物に移轉される價值部分との差が道具よりも大である。

さて、機械の生産性は、機械が人間労働力を節約する程度によつて秤られる。機械によつて節約された労働がその機械の生産に必要な労働に等しければ、この場合労働の生産性は増大しない。機械が道具に比し、その生産により大なる労働を必要とするのに、なほ労働の生産性を高めることに於て機械が道具にまさるのは、本來の總價值と生産物に移轉される價值部分の差が機械の方が大であるからである。然し乍ら、資本が機械を使用するのはそれが労働の生産性を増大するからではない。資本にとつては、節約される労働力の價值が、機械によつて移され

る價值、従つて機械の價值より大なる場合にのみ、即ち、労働力の節約ではなくて、機械の運轉に必要な労働力の價值の節約によつてのみ、機械採用の意義があるのである。現實の賃銀はある時は労働力の價值以上であり、ある時は労働力の價值以下であるから、結局、資本にとつての機械採用の限界は、機械の價格と節約される賃銀との差であると云へる*。

* 例へば「一九二五年の亞米利加の收穫を一八九六年時代の機械で處理したならば、労働賃銀に於て、三、八八九、二二二、九〇五弗だけ餘計に入用となる計算である。又、一九二五年の收穫物を屋内に運搬するためには、一、四三二、八六六、一三五日だけの日数を多く要する筈である。」(マネジメント調査部、産業合理化の諸現象、昭和五年 七一頁)

ウイルヘルム・レキシスも云ふ、「機械は單純にその労働價值によりて評價されず、其資本價值に従ひ貨幣に見積られる。従つて機械は労働の節約となるのみならず、其ための投資に對し相當の利得を生む場合にのみ應用される。機械の代償として投資せらるゝ資本が、同一の生産能力を有する手足労働を使用する爲め支拂ふ可き賃銀額より大なる場合、機械を使用し、手足労働に代はらしむることは經濟上不利である。又從來使用せられたる機械の代りに、技術的に一層完全なる、然し同時に高價なるものを用ふる可否も、同様の見地から判断される。」と。(レキシス『經濟原論』田邊忠男譯 八七一―八八頁參照。)なほオットー・パウエルの表式も同じことを示す。

Vgl. Otto Bauer, *Kapitalismus und Sozialismus nach dem Weltkrieg*. I. Band. Wien. 1931. S. 168ff u. S. 188ff.)

機械が折角發明されても労働力の安い國ではそれが採用されないことや、或る産業部門に於ける機械の採用が屢々他の産業部門に於ける機械の採用を妨げるといふ事實はこのことから説明される。ウイルブランドはこのことを例證して曰く、「労働を安く手にいれることができるなら、機械によつて代置しようといふ何の刺戟もない。實際、假令機械がより大なる労働の節約、恐らく國民經濟的に命ぜられたものであらうとも、労働はより安い・より利潤の見込みあるものとして存続する。斯かる理由から後れてゐたシュレジエンの亞麻産業は十九世紀に於てその歴史的例證を示すものである。最も安い・そして従順な労働力を持つ國々は長く手工労働にとどまる。そして遂に近代技術によつて凌駕されるに到ることは一般に妥當する」と。(Robert

Wilbrandt, *Die moderne Industriebearbeiterschaft*. Stuttgart. 1926. S. 189.)

* 同じことはまたフランツ・オットン・ハイマーの述ぶるところであるが、(Vgl. F. Oppenheimer, *Theorie der reinen und politischen Oekonomie*. II. System der Soziologie. Jena 1924. S. 1025.) このことに關する古典的説明は云ふまでもなくリカルドのものである。彼は『經濟學及課税之原理』

第一章・價值論・第五節に述べて曰く、

「今假りに一特定産業に使用せられて、一年間一百人分の仕事をなし得る機械があり、而してそれは僅に一年の使用に堪へるものと想像せよ。又假りに其機械は、五、〇〇〇磅の費用を要し而して一百人に年々支拂はるる賃銀額は、五、〇〇〇磅なるものとすれば、製造家に取つては、其機械を購入するも、労働者を雇ふも擇ぶ所なかるべきは明白である。然るに、假りに労働が騰貴し、其結果一百人の賃銀は五、五〇〇磅に上るものとすれば、製造家の最早躊躇せざるべきことは、賭易き道理であらう。機械を購入して五、〇〇〇磅を以て仕事を爲さしめるのが、彼れの利益とする所なのである。併し乍ら、機械の価格は果して騰貴せぬであらうか。労働騰貴の爲め、機械の價值も亦た五、五〇〇磅となりはせぬであらうか。若しも機械の建造には資本は使用せられず、其製造者には何等の利潤も支拂はれぬものとするれば、機械の価格は騰貴するであらう。假りに例へば、其機械は一人五〇磅の賃銀を以て一年間働く一百人の労働の製作物であり、従つて其価格は五、〇〇〇磅であつたものとすれば、若しも此賃銀が五五磅に騰貴すれば、其価格は五、五〇〇磅となるであらう。併し斯ういふ事はあり得ない。使用せられた労働者は一人以下である。若し然らずんば、五、〇〇〇磅の中からは、労働者を雇備した資本の利潤が支拂はれなければならないのであるから、機械は五、〇〇〇磅には賣れない筈なのである。其處で、僅に八十五人の労働者が各人五〇磅の費用を以て、即ち年總額四、二五〇磅を以て雇備せられ、機械の賣却によつて労働者に前拂ひした賃銀以上に生すべき七五〇磅は、機械製造者の資本利潤を構成するものであると假定せよ。賃銀が一分騰貴した場合には、彼れは更に四二五二五磅の追加資本を投ずることを餘儀なくせられ、従つて四、二五〇磅の代りに、四、六七五磅を投ずるであらう。而して此資本に對して、若し依然として其機械を五、〇〇〇磅に賣れば、彼れは僅に三二五磅の利潤を収めるのであらう。併しこれが正しく凡

ての製造家資本家に取つての事實であつて、賃銀の騰貴は、彼等の凡てに影響を與へるのである。故に、若しも機械の製造者が、賃銀騰貴の結果、機械の価格を引上げるならば、異常なる資本量が斯る機械の建造に投ぜられて、其價格が僅に普通利潤を提供するに過ぎぬところに至つて已むであらう。——(Ricardo は「我々は、新しい國が労働を使用し、古い國が絶えず機械の使用を、促される理由を、茲に認める云々」と註をいれてゐる)——併し乍ら、賃銀の一般的騰貴に際して、機械に依頼して其貨物の生産費増加を免れ得る製造家が、若しも其生産物に對して引續き以前と同一の價格を要求し得たならば、彼れは特殊の利益を享受すべき譯である。併し乍ら、彼れが其貨物價格の引下げを餘儀なくせらるべきことは、我々の既に學んだ通りであらう。若し然らずんば、資本は彼れの利潤が普通水準に下降する迄、彼れの職業に流入するであらう。斯くして社會公衆は機械に依て利益する。此の無言の作業者は、縱令其貨幣價値の等しい場合にでも、常にそれに依て排除せらるるものよりも遙に少き労働の所産たるものである。」(リカード「經濟學及課税之原理」小泉信三譯 岩波文庫 三五—三六頁、傍點は引用者)

§ 機械とは何か

機械とは何であるか。ナッソウ・ウイリアム・シイニオア(1790—1864)は機械のうちに動物を含め、ジョン・ラムゼー・マカロック(1789—1864)は人間そのものをも機械とみなした。(Verl. d. Ergang. Untersuchungen zum Maschinenproblem in der Volkswirtschaftslehre. 1911. Einleitung) か

る理解によつては機械の歴史性は見落されるであらう。或はまた機械とは複雑な道具であり、道具は簡単な機械であるといはれる。この見解を有つものは、たゞに「數學者や機械學者」のみならず、「英吉利の經濟學者中にもこれを真似てゐるものが此處彼處に見出される」とはカール・マルクス(1818—1883)の云ふところであるが、ジャン・バティスト・セイ(1767—1832)の如きもこれに他ならなかつた。(Vgl. *Ergang. op. cit. S. 54*)然し乍ら複雑とか簡單とかいふことは未だ機械と道具との原理的相違を示すものではない。例へば起重機と糸繰車とを比較すると、前者が後者より複雑だとは必ずしも云へないのである。またかゝる見解によるなら、螺旋、楔、鉋、槓杆の如き單純な機械力が機械と呼ばれることになり、それは未だ機械の特徴を示すには足りない。ところで、糸繰車は直接人間が動力を與へるが、起重機は蒸氣機關が動力を與へる。かくて道具に於ては原動力を與へるものが人間であるが、機械に於ては水、風、獸等の如き自然力であるといはれ、この點にその區別が求められること屢々であるが、若しさうであるなら、タイプライターやミシンは道具であり、水車や風車は機械であることにならう。そして發動機仕掛けのミシンの如きは道具であるのか機械であるのか不可解といふことになる。牛馬を動力として耕作を營むが如きは古來行はれて來たところであり、かくては機械生産は、奴隸經濟の時代にも存在したことになる。

機械生産は近代資本主義社會のものである。されば、「假令、機械は我々の全生活に對して著しくその意義を増し、ひとが現代をいみじくも機械時代と名づける程、近代に特徴を與へたにせよ、機械は一般的の意味では周知の如く近代の現象たるものではない。既に古代はそれが生産的なまでに機械的施設を知つてゐた」と云ふモンベルトも、これに續けて、「このものは、人間労働に對する關係に於て、それが今日あるとは、本質的に異なる性質を有つてゐた」ことを認めねばならなかつた。(Karl Diehl und Paul Mombert, *Arbeiter und Maschinen*, 1926. Einleitung) 本來の意味に於ける機械は十八世紀の終り頃に現れた。機械に對する理解は、機械自體の發展につれて成立する。かくて十九世紀の三十年代にケンブリッジの數學者チアールズ・バabbage(1791—1871)は、「各個の特殊な作業が、分業によつて夫々一つの簡單な用具の使用にまで約元された時、唯一つの發動機によつて運轉せしめらるゝところの之等凡ての用具の結合が即ち一つの機械となるのである」と述べて、機械が決して労働者それ自身のための労働の結合でないことのある可能性を示したのであつた。(Charles Babbage, *On the Economy of Machinery and*

スコットランドの自然科学者アンドリウ・ユーア(1778—1857)は機械を三つの部類にわかし、第一を「動力の生産に關する機械」、第二を「動力の傳達及び調整に關する機械」、第三を「種々なる形態の物を商品に變形するための、動力の應用に關する機械」としてゐる。(Andrew Ure, *The Philosophy of Manufactures*, 1835, p. 27.)マルクスはこれ等の見解を綜合して云ふ。

「總べて發達したる機械は、本質的に相異なる所の三部分から成る。發動機 *Bewegungsmaschine* と配力機 *Transmissionsmechanismus* と最後に道具機 *Werkzeugmaschine* 即ち作業機 *Arbeitsmaschine* とがそれである。發動機は全機構の動力として作用するものであつて、この中には蒸氣機關や、熱氣機關や、電磁機などの如く、それ自身の動力を造り出すものもあり、又は水車に對する落流、風車に對する風、その他の如く、既に與へられてゐる外部の自然力から刺戟を受けるものもある。配力機は節動輪や、動軸や、齒車や、滑車や、帶索や、綱や、調帶や、小齒車や、様々の聯動機などから成るものであつて、運動を調節し、必要な場合には、運動の形態を例へば垂直狀から圓狀に轉化せしめ、且つ、道具機の上に運動を配傳するものである。以上の兩機構部分は、道具機に運動を傳達して労働對象を捕捉せしめ、これを目的通りに變更せしめるためにのみ存在してゐるものである。十八世紀に於ける産業革命の出發點とな

つたものは、實にこの道具機といふ機械部分であつて、それは今日に於いても、手工業經營なり、マニファクチュア經營なりが、機械經營に推轉する處に在つては、絶えず斯かる出發點となつてゐるのである。」

この『資本論』第一卷・第一篇・第十三章に於ける説明は、今日に於ては機械を論ずる殆どあらゆる學者によつて認められてゐる。

高田保馬『經濟學新講』第一卷、昭和四年、一五五—一五八頁。大阪商大經濟研究所、『經濟學辭典』第二卷、昭和六年、五一七頁。高田保馬『經濟原論』昭和八年、三六一—三七頁。馬場敬治『技術と經濟』昭和八年、二〇六—二〇七頁。J. A. Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism*, 1st. ed. 1906. 1926. Chap. V. 邦譯、改造文庫、上卷 一一七頁。A. Baratt Brown, *The Machine and the Worker*. 1935, p. 12—14. 等参照。

さて、作業機は形態こそ變化してゐる場合が多いけれど、大體に於てそこには、手工業者乃至マニファクチュアの労働者が使用した装置や道具が再現してゐる。相違はたゞ人間の道具であつたものが、今は機械の道具になつてゐるといふことである。要するに、嚴密の意味の道具が人間の手から機構に移されたとき、こゝに單なる道具に代つて一の機械が現れて來るのであつて、その際動力が人間から來るか又はそれ自身さらに一の機械から來るかはどうでもよいこと

なのである。(Vgl. K. Diehl, Maschinenwesen. Wörterbuch der Volkswirtschaft. 4. Aufl. S. 911.)

こゝに機械の歴史性が明示される。即ち機械が道具と異なるところは、機械がまさに人間に代置したといふ性質を有つてゐるところにある。産業革命は、鋼鐵の機構が熟練労働者に代ることによつて行はれた。即ち産業革命に於ては機械が道具にとつて代つたのではない。熟練労働者がその道具を奪はれたのである。この革命の出発点となつた部分が作業機であつて、屢々人が考へるやうに動力機ではないといふ事情は、上述のことを證明する。十七世紀の末に既にその發明をみた蒸氣機關が何等現實に産業革命をひき起しえなかつたのは、歴史を動かすものが技術ではなくて、まさに人間であることを示す。紡績機、作業機が蒸氣機關の出現を必然ならしめ、産業革命の起點となつたのである。我が國の製絲業がなほマニファクチュアの段階にあることは、その作業機の部分についてみればわかると云はれてゐる。即ちここでは種々な機械的装置が利用されてゐるにも拘らず、労働對象に對する加工は、本質的には直接手によつて使用される道具に基いてゐる。

上述した、道具は人間を支持するに拘らず機械は人間労働の解放であるといふ機械の性質は、最近のゾムバルトも明かに認識してゐるところであり、彼は「技術的進歩による労働〔者〕解放

の焦眉の問題」を語つてゐる。(W. Sombart. Die Zähmung der Technik. 1935. S. 13. u. S. 34.)

§ 機械の經濟學の問題の取扱ひ方

さて我々は機械に關する學說史的叙述として既に次の如き著書を與へられてゐる。

まづ第一に、ハインリッヒ・マンシュテットの「機械の資本主義的應用」Heinrich Mannstaedt, Die kapitalistische Anwendung der Maschinerie. Jena 1905.である。この著者はハインリッヒ・ディーツェル(1857—1935)の教をうけた人であり、その序言には「マルクスの産業豫備軍の理論を否定する意圖からこの著作は成立した」と述べられてゐる。著者は同じ役割をもつたフランツ・オッペンハイマーの方法——即ち、マルクスは問題の證明のために演繹法によつた、だが、問題は演繹法によつては解かれず、統計のみが問題を決定する(Vgl. F. Oppenheimer, Das Grundgesetz der Marxschen Gesellschaftslehre, 1903.)——を引證し、自著に於ては、演繹的方法によつてマルクスはもとより、オッペンハイマーによつても論難された補償説 Kompensationstheorie の援助によつて、これを行はんとするものであるとその抱負を語つてゐる。従つてこの著書の構造はこの意圖にもとづいてをり、まづリカルド、マカロック、シニオア、J・S・ミルの機械論が

紹介されるのであるが、それは畢竟、「マルクスの主張と歸結、とりわけその産業豫備軍の理論を否定する材料」(カ)としてである。かくてマルクス説の紹介とその補償説による批評とがなされる。曰く、「機械の應用によつて労働の機會は狭められないこと、ある一つの生産部門から驅逐された労働者は他の部門に於ける産業の擴張と多様性によつて吸収されることが證明されるなら、同時に労働者の状態はよくなることを證明される。蓋し、あらゆる生産の進歩は商品の低廉となる。商品價格の低下は實質賃銀の向上と同じことである。我々の課題の解決は、従つて同時に、賃銀は上昇する生産性と共に上騰するといふ説を證明する。」(G. 213) 而してさらに機械の資本主義的應用を支持し、そのマルクス批判の企圖を完成するために、資本主義社會及び社會主義社會に於ける生産の比較がなされる。その結論は著書の最後に要約されてゐる。「社會主義生産形態は、労働者階級に何等特殊の利益を與へえない。賃銀争議は恐らくもつと激しい形態をとるだらう。剰餘労働の減少について何等の見込みもない。労働機會の推移と恐慌とは現在國家に於けるが如きと同じ困難を齎す。労働時間の急速な短縮に對して何等確實な保證は與へられない。だが技術の進歩、生産性の上昇が緩漫になるといふ危險が重大な思慮を惹き起させる。」(G. 103)

かくてこの著書は徹底した補償説の立場にある。かくる立場よりして、彼の意圖するところは果されないであらう。また我々は、マンシュエットが、資本主義社會、社會主義社會のもとに如何なる社會形態を理解してゐるのか、理解しえないのである。

第二には、カール・エルガングの「國民經濟學に於ける機械問題の研究」Carl Ergang, Untersuchungen zum Maschinenproblem in der Volkswirtschaftslehre. Rückblick und Ausblick. Eine dogmengeschichtliche Studie mit besonderer Berücksichtigung der klassischen Schule. 1911. がある。

これはカール・ディールとシュルツ・ゲバンニツとの編纂したるFreiburger Volkswirtschaftliche Abhandlungen の一つとして出版されたものである。この著書の内表紙には、「廉價なキャラコとそれが豊富にあるといふことは、よきことである。だが、穩當な労働時間、健全な雰圍氣、子供達のための自由と教育とは限りなくさらに重要である。」といふニコルソンの言葉を掲載してゐる。かくてこの著者は謂はゆる社會政策的立場にあり、それは次の如く要約される。「機械問題は早期重商主義に於ては王朝の財政問題であつたが、それから漸次輸出の問題が現れて來た。大工業の勃興と共に社會政策的要素が前面に出て來た。そして近代に於ては、機械問題の

核心は教育學的領域にある」。(S. 146. 傍點は原著者)

著者は「機械の社會的影響」を論じて云ふ、「機械の労働者階級の狀態に與へる影響を問題とし、盲目的な樂天主義を奉じないあらゆる著者達が、生産過程からの労働者の驅逐を以て機械の採用から起る最大の害悪と見做してゐるのを我々はみる。マルクスの言葉を以てするならばそれは産業豫備軍の創出である。だがマルクスとシスモンディとを除いて、すべての著者はこの不都合な影響をたゞ一時的にしか働かないものと云ひ、機械それ自身のうちにその反對手段をみてゐる。即ち彼等は補償が可能であると考へてゐる。我々も亦同じ立場に立つものであり、害悪にたゞ一時的な作用しか認めない」(S. 151. 傍點は引用者)と。かくてこの著者も亦補償説の立場にあり、マルクスが補償説を否定したことを問題とし、「此の點は詳細に……マンシュテットによつて取扱はれた。そこで彼はマルクス自身が自分によつて非難された理論の無意識的支持者としてみられねばならぬことを證明した。マンシュテットはこゝで詳細にマルクスの思惟過程を展開し、かちえられた成果に對し徹底的に批判的立場をとつてゐる。」(S. 152)と述べて、マンシュテットを支持してゐる。

さてこの書は次の如く構成のもとに、ひとわたり行き届いた敘述がなされてゐる。即ち、第

一章はアダム・スミス以前の國民經濟學の機械問題に對する態度を、重商主義と重農主義とに分ち紹介してゐる。第二章は「英吉利古典派國民經濟學に於ける機械問題」と題され、スミス、ロウダアデイル、ベンサム、リカルド、マルサス、セイについて述べ、その「亞流」としてマカロック、シイニオア、トレンズ、J.S.ミルにふれる。第三章は「機械問題についての英吉利の特殊文献」として、ユア、ベインズ、ウェイド、バクベイズ、ブローハム、ガスケル等の、經濟學そのものにとつては傍系的な・主として自然科学にかゝる人達の見解を紹介する。第四章は、シスモンディとマルクスとである。最後の第五章は、「回顧と展望」であり、こゝに著者の社會政策的立場が明かにされる。

第三にディール及びモムベルト編纂の『労働者と機械』 Arbeiter und Maschine, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Oekonomie. hrsg. von K. Diehl u. P. Mombert. Bd. 20. Karlsruhe. 1926. が挙げられる。これにはモンベルトが序文を書いてゐるが、編纂者の見解はこの著書の構成に具體化してゐると云へる。即ちこの書は三つの部分に大別されてゐるが、第一の部分は「機械及び機械時代」の名稱のもとにシュモラーの『國民經濟學原理』 G. Schmoller, Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. 1900—1904. の第一部

から「近代西歐及び亞米利加の機械時代」の個所を抜萃してきてゐる。次にマルクスの「資本論」の第一卷・第四篇・第十三章「機械及び大工業」から「機械の發展」のところが抜萃されてゐる。編纂者はこれによつて、機械發展の經濟史的知識を與へんとするものゝ如くである。この書の第二の部分は、「機械の勞働市場及び勞賃への影響」と題され、第一に「悲觀的傾向」のものとして、ゾンネンフェルス、リカルド、シスモンディ、ロバート・オウエンが紹介され、次に「樂觀的傾向」のものとしてユーアとマンゴルトとが挙げられる。而して「勞働組合の機械問題に對する態度」を問題としたものとしてウェブの「産業民主制論」(S. & B. Webb, Industrial Democracy. 1897. からの抜萃がこれに附加される。第三の部分は「人間と機械」の項目のもとに、ジェイ・エイ・ホブスン、ハインリッヒ・ヘルクナー、エイ・ジェイ・ペンティの説が紹介されてゐる。

「勞働者と機械」といふ問題は特に二つの側面を有つてゐる。一つは經濟學的なものであり一つは心理學的なものである。前者に於ては機械の勞働市場及び勞働賃銀に與へる影響が問題であり、後者に於ては人間としての勞働者への心理的作用が問題である。」とモムベルトがその序文を書き起してゐるところをみれば、「人間と機械」と題された第三の部分は、編纂者によつ

て「人間としての」心理學的な問題とみなされてゐるのであらう。そして經濟學的な問題に對しては、上述の如く悲觀的見解と樂觀的見解とが並列されてゐる。我々はこれらの見解の對立を有意義なものと考へるが、例へば、悲觀的傾向のものとして、重商主義者と古典派經濟學の完成者とその浪漫派的否定者と空想派社會主義者との四人を單に並列してよいかどうかは問題である。またこの編纂者達のやうに經濟學的な問題と心理學的な問題とを、切離しておけるかどうかも問題である。我々は何等かの仕方ですべてを統一しなければならぬであらう。かうした問題にも拘らず、ディールとモンベルトとの編纂にかゝるこの書はエルガングのものゝもに、資料を蒐集してゐるといふ意味で極めて便利である。

* イー・ハイデブロック、アー・ケーラー、ゲー・レッサーの著述(参考文献の部参照)については別に述べる機會をもつであらう。

さて、機械に關する經濟學說史的叙述、それは、從來の經濟學書の中から、機械に關聯したところを拾ひ集めて來るといつた方法でなされてはならないであらう。何故に機械の問題を問題としてとりあげねばならぬかと云ふ意味に於て學說史も亦とりあげられねばならない。上述の Ausgewählte Lesestücke zum Studium der Politischen Oekonomie. の第二十卷が、「勞働者と

機械」といふ形態をとつて現れねばならなかつたところに、問題は存するのである。

カール・エルガンは述べて曰く、「經濟的關係に於て我々は機械の影響を二つの觀點に分つことができる。一つは經濟的・生産的側面であり、他は社會的側面である。我々は機械問題の概念のうちに經濟生活へのその凡ての影響の總體を總括する。この研究に於ては次のことが示される。即ち、この問題は世紀の経過のうちに屢々變遷を閲した。だが科學的觀察に於ては主に社會的側面が前面に現れたのであり、それ故我々もまづ第一にそれを取扱ふものである。」(Ergang, op. cit. Einleitung 傍點は原著者)かくて彼によれば、「生産の觀點からすれば、つねに機械の完全な肯定がある。だがその社會的作用に關しては見解が分れてゐる。」機械的生産方法の價格低下的影響に關しては、たゞ一つの見解がありうるのみ。」(Ergang, op. cit. S. 123. S. 124. 傍點は原著者)といふことになるのである。

機械生産が生産を飛躍的に増大せしめたことに疑ひない。このことは、まさにカール・ディールがエルスターの國民經濟辭典の機械の項に於て、力説するが如くである。然し乍ら、資本家はその商品をその労働者に賣るために生産するのではない。機械生産は必ず商品の價格を低廉ならしめると一概に結論できない。例へば我々はカルテル、トラストの如き獨占體を知つて

ゐる。エルガンは、經濟學上の機械の問題を「經濟的問題たるよりは寧ろ社會的問題」(S. 124)たりとし、それを「如何なる仕方で、機械は分配過程に働きかけるかを検討する」(S. 124)とすることにありしてゐる。このとき著者は、かの生産は自然的・技術的であり、分配は社會的・歴史であるといふ見解から、全く社會的・歴史的性质を離れた機械を問題にしてゐるといふ批判を免れないであらう。蓋し、機械によつて社會的生産物が増加し、問題はその分配の如何にあるといふことになるなら、この分配は何等理論的分析の對象とはならないのである。

機械は經濟學に於て種々なる形態をもつて現れる。即ち、例へば、「資本論」第一卷・第三篇・第五章並に第六章や、レーダーの『經濟理論綱要』E. Lederer, *Aufriss der ökonomischen Theorie*. の第三章第四節に於ける如く、價值論乃至剩餘價值論との關係に於て、また、ジェイ・エイ・ホブソンの『近代資本主義發達史論』第十二章や、或はレーダーの『技術的進歩と失業』E. Lederer, *Technischer Fortschritt und Arbeitslosigkeit*. Tübingen. 1931. に於けるが如く、失業理論との關係に於て、また『資本論』第二卷・第二篇や『近代資本主義發達史論』第十一章に於けるが如く、景氣變動乃至恐慌理論との關係に於て、またその他、例へば『資本論』第三卷・第一篇・第五章に於けるが如き關聯に於て把へられる。それは或は資本蓄積論と機械といふやう

な形態で、或は労働者階級と機械といふやうな形態でとりあげることができる。後者は謂はゆる經濟社會學の問題たるものであらう。また重點を産業革命と機械といふやうなところにおいて——例へばホブソンの『近代資本主義發達史論』第四章——經濟史的に取扱ふこともできる。こゝではこれ等の機械に關するあらゆる經濟學的問題をみてゆかうと云ふのではない。我々は視點を機械による労働者の遊離といふ問題に限定しつゝ學說史的敘述を試みたいと思ふ。それは、ほゞデイル及びモムベルトに於ける問題に相當するわけであるが、こゝでは資本流通をひとまづ捨象し、あくまで生産過程の問題としてとりあげる。労働者と機械との抗争、労働組合と機械、その他現實的な問題に立ち入ることをしない。補償説なるものゝ性質を明かにすることができたら、この書の目的は足りるのである。

§ 重商主義よりアダム・スミスまで

資本主義生産方法の夜明けである。

十六世紀の半ばにかけて、歐羅巴に於ては産業資本家の温室的育成、生産様式の資本主義化が行はれた。新大陸、新航路の發見、販路の擴張、貿易の増大、商品生産及び貨幣經濟の發展

商業資本の發達、謂はゆる資本の原始的蓄積。かくて封建經濟は解體し、中世紀的なものが没落し國民經濟の成立を見、專制的統一國家が發生した。

謂はゆる重商主義の時代はこれである。國內に於てはマニファクチュアの監督と奨勵、國外に於ては商業戦争と植民地の争奪戦。

かゝる背景のもとに、機械は十八世紀に至つて漸く社會的意義を有つに到る。經濟を論ずるものが、機械の問題をとりあげるに到るのも亦この時代からである。然し乍ら、機械が社會的に如何なる影響をもつかについて、此の時代に於ける人々の經驗は極めて乏しい。機械の問題に關し、謂はゆる重商主義者の間に何等統一的な見解はなかつた。このことは謂はゆる重商主義自體の性質から来る。

例へばかのコルベール(1619—1683)をとつてみよう。王室の富の増加がその經濟政策の規準であつた。人口數を増加し、租稅負擔力を高めるといふ人口政策から云ふなら、機械は人間にとつて代るが故に、彼はその採用に反對した。だが、機械の採用によつて品質よき低廉なる商品が、外國貿易に於て王室のために富を齎すなら、それは彼にとつて歓迎さるべきものであつた。

(Vgl. Ergung. S. 4—5.)

プロイセンに於けるフリードリヒ大王(1721—1786)の地位は、ほゞ佛蘭西に於けるコルベールの地位にあたる。彼も亦それが人口政策に對立しない限りに於て、機械の採用を肯定した。輸出増加による貿易の利得のためにその生産物の低廉ならんことを欲したのである。一七八五年、彼が經濟的に使用しうる最初の蒸氣機關の建設を試みたことは周知のことである。

これ等の人々について述べたところは、大體に於て謂はゆる重商主義者全體にあてはまるのであつて、人口政策的見地が前面に出るとき、彼等は機械の採用に反對し、外國貿易による利益が前面に出るとき、彼等はその採用に賛成した。而して大まかに云ふなら、謂はゆる重商主義に於て前期のもの程、人口政策的見地が強く例へばヨハン・ヨアヒム・ベッヒャー(1723—1782)ウイルヘルム・ファン・シュレーダー(1640—1689)——後期に於ては顧慮するところなき機械の肯定が行はれ、それに關聯する小生産者驅逐の問題の如きは、その防止が爲政者の義務として要求されるのみで、現實的には問題にされなかつたものゝ如くである。例へば、ヨハン・ハイブリッヒ・ゴットロープ・ファン・ユステイ(1702—1771)ヨハン・ベーター・ジースミルヒ(1707—1767)ヨハン・ゲオルク・ブュッシ(1728—1800)。ユステイをみるに、彼は既にかの人口政策の一面性から解放されてをり、機械採用の熱心な辯護者であつた。彼によれば、産業の最もよい促進策は生産物の販

路の確保といふことであるが、彼はそのために三つの前提をおく。第一は、財貨の品質のよいことであり、それは特別の規定によつて保證されねばならぬ。第二は生産品の美麗といふことであり、購買欲を喚ぶために必要である。第三は財貨の低廉といふことであり、それは賃銀、原料の低廉、合理的な生産によつて條件づけられる。かゝる理由から、彼は機械の採用を支持した。彼はかゝる労働を節約する機械によつて多くの人間が驅逐されることに關する非難の存することを心得てゐた。彼はまた、機械のために人間の身體のある部分が衰退してゆくこと、そのために有用な機械が非難されることのあることも知つてゐた。然し、彼は「かくの如き非難を知ることゝ、それを嗤ふべき且つ合理的なことを考へることゝは、合理的洞察に於ては全く同じことである。」と一蹴し去ることができた。一國の人口が極めて稠密であつて、機械によつてその労働を奪はれた人間に、何等か他の労働機會を與へることが出来ないやうな場合のみが彼の顧慮に値する。而も、彼によればさうしたことは考へられぬことなのである。「人口の斯かる點にまで、國家は決して到達することはない。」(Vgl. *Ergang. op. cit.* S. 15—16.)

ヨゼフ・ファン・ゾンネンフェルス(1733—1817)は謂はゆる重商主義的人口政策支持の最後の型であると云はれてゐる。彼は *Grundsätze der Polizey, Handlung und Finanz*. 1787. の第11

部に於て商業科學 *Handlungswissenschaft* の原理を論じ、「一般福祉の促進の爲めになされるあらゆる政策を検討する規準は、即ちそれが人口にとつて利益であるか、損失であるかと云ふことである。」と述べて「人口の促進」を説いた。彼によれば、「機械は、それによつて労働が容易ならしめられ、乃至短縮せられるところのあらゆる生産物である。」マニファクチュア業者の技術的發明は機械の使用によつて労働人口を節約するといつた仕方、手工労働の價格を減する働きをする。その利益は労働人口の數乃至労働時間にあり、この利益を利用しうるマニファクチュアは確かにその販路を擴大することが出来る。「だが、全體との關聯に於て、機械の採用は必ずしもつねに推薦さるべきものではない。廉價といふことはマニファクチュア制の國家にとつては、一つの從屬的目的にとゞまるのであつて、仕事を増加するといふ主要目的にそれは對立することは許されぬ。仕事の途がまさに均衡のとれた人口で充されてゐて、その位置が機械によつて代表されるところの人口の部分が他の労働に用ひられぬやうな處では何處に於ても、機械の採用は有害であらう。而して見るべき外國貿易を有たぬ國家の位置はほゞかうである。同様なことが耕作についても云はれる。この場合には、機械の採用は農民階級を減少せしめる。そして國家にとつては、農民階級が可能な限り多數であるといふこと程望ましいことは

ない」といふのである。(Vgl. Diel u. Mombert. *Leesstücke*. Bd. 20. S. 59—60.)

英吉利に於てはジ・イムス・ステュアート(1713—1780)は既に重商主義から次の段階への過渡期にあつた。「部屋は埃をたてず掃除はできない。靴を汚さず路を歩くことはできない。そのやうに人間の労働を節約する機械を一度に大きなマニファクチュアに採用するならば、多くの人間を遊ばせないわけにゆかない。」「機械は流れを止める。水門の利益を受容するのが一般民衆であるなら、新しい水道をつくるのは國家の仕事である。余の述べたところは、機械の採用に對するあらゆる起り得べき異論への答を自づから示唆するものと考へる。」といふのがその態度であつた。即ち、彼は、機械を以て「それ以上の人間を養ふ費用なしに、勤勉な人間を増加せしめる方法。」と考へ、無條件的に之れを肯定したのである。機械が過剰人口をつくるといふが如きことは彼にとつては現實の問題ではなかつた。土地所有者、中小農民、手工業者に課税し、資本の蓄積と集積とを促進することによつて資本家的生産方法の確立の條件をつくりだすことが時代の任務であつたことを想ふなら、謂はゆる重商主義を通じて、剩餘價値の把握が流通過程に於てなされたことや、ゾンネンフェルスとステュアートの對立も自ら明かとなる。そしてステュアートに於て、剩餘價値は流通によつて生ずるものではあつたが、こゝではそれ

はもはや、富の積極的増大ではなかつたのである。もとより機械による過剰人口と云つても問題となるのは、機械の獨立生産者に對する場合と、既に資本家的生産方法が行はれてマニファクチュア制がとられてゐる場合とあり、重商主義の時代に於て前面に出るのは前者である。

剰餘労働の性質は農業生産に於て明かである。はじめ、この資本の生産過程に着眼したものととして、また、さらに固定資本、流動資本の區別を認識したものととして重農主義の體系を取落すことはできない。それは「封建制度を破つて生れ出ようとする時代の市民的社會に照應する」觀念形態であると云はれる。だが、それはその性質上、機械の問題に觸れることは極めて尠かつた。「彼等が機械の經濟生活への影響について語るとき、彼等は決して機械に對して敵對的ではない。その作用は重農主義者の見解によればたゞ利益があるのみで、重商主義的規定による機械の禁止に對しては、彼等はかゝる國家の干渉は、既に「爲さしめよ、行かしめよ」の概念に反するの故をもつて之れに賛成しえないのである」(p. 25)とエルガンは述べてゐる。

英吉利は、工業的に發展した先進資本主義國であり、マニファクチュアもこゝに最も早く發達して、次の機械制大工業の直接の技術的基礎を確立した。マニファクチュアの時代は、ほゞ十六世紀の半ばに始まり十八世紀の六十年代に終つてゐる。アダム・スミス(1723—1790)はい

のマニファクチュア時代の經濟學者である。従つて、彼は未だ機械制大工業を知らない。彼はワットの保護者だつた。然し彼の知つてゐたのはニューコメンの蒸氣機關であり、それは鑛業に用ゐられてゐたに過ぎなかつたと云はれてゐる。スミスは國富論・第一篇・第八章・賃銀論に於て云ふ、「労働の賃銀の増加は、商品價格の中に賃銀の分解される部分を増大し、爲めに必然に多くの商品の價格を引上げ且つそれだけ國內及び國外におけるその商品の消費を減少する傾向をもつてゐる。だが、労働の賃銀を引上げる原因、即ち資本の増加は、同時に労働の生産力を増加させ、一層少量の労働をして一層多量の生産をさせる傾向をもつてゐる。非常に多數の労働者を雇傭してゐる資本の持主は、必然に自己の利益のために、仕事の適當な分割と配分とを行ひ、労働者が出來得る限り多量の生産を爲し得るやうにしようと努力する。やはりそれと同じ理由で、雇主は自身又は労働者の考へ及ぶ最善の機械を労働者に提供しようと努力する。……したがつて機械の發明される機會が多くなる。かくてこれらの改良の結果、以前より遙かに尠い労働によつて多くの商品が生産されるやうになり、その所要労働の量の減少は、労働の價格の増加を償うて餘りあるほどである。」(Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, 1922, P. 88.)

彼はまた第二篇・第二章に於て、固定資本と流動資本を分ち、これに關して云ふ、「固定資本

の本来の目的は、労働の生産力を増加すること、換言すれば、同数の労働者をして遙かに多量の労働を遂行することを得しめるに在る。……同数の労働者をして、従来普通に用ゐられてきたものより一層低廉且つ一層簡單なる機械を使用して、以前と同量の作業を行ふことを得しめる所の機械學上の有らゆる改良が、常に總ての社會にとつて利益あるものと認められるのは、畢竟此理由に基くのである。一箇年、一、〇〇〇磅を彼の機械に費す大製造工場の企業家は、若し彼が此費用を五〇〇磅に減らすことが出来るとすれば、當然残りの五〇〇磅を更に労働者を増加して加工せらるべき増加材料を買ふ爲に使用するであらう。従つて作業遂行上一に彼の機械の必要な作業の數量は當然増加せられ、同時に其作業から社會が收め得る一切の利益と便益も亦増加されるであらう。(Adam Smith, op. cit. P. 270.)と。斯かる關聯に於て、スミスは機械を論じてゐる。然し乍ら、マニユファクチュア時代の經濟學者として、彼の當面の問題は分業であつて未だ機械ではなかつた。そして機械を論じた限りに於て彼はその絶對的肯定者だつたことは、上述のところからも窺はれる。彼が資本として賃労働として如何なるものを把握したかは次の引證によつて明かである。機械はたゞ生活資料の生産を増大するものとしてのみ把握されてゐる。「賃銀によつて生活する人々に對する需要は、必然に各國の收入及び資本の増加と

共に増加し、その増加なくしては決して増加し得ないのである。收入及び資本の増加は國民の富の増加である。であるから賃銀生活者に對する需要は、自然、國民の富の増加と共に増加しそれなくしては決して増加し得ないのである。」(Adam Smith, op. cit. P. 71.) また云ふ。「労働の報酬の豊かなのは、國民的富の増加しつゝある必然の結果であると共に、その自然的兆候である。」(P. 76.)

「労働の賃銀の豊かなことは、富の増加の結果であると同時に、人口の増加の原因である。それに不平を鳴らすことは、最大の公共的繁榮の必然の結果及び原因に對して、泣言を言ふことに外ならないのである。」(P. 83.) 「労働の報酬の豊かなことは、人口の繁殖を奨励すると同時に、庶民の勤勉を増進するものである。」(P. 83.)

機械の採用によつて失業問題を生じ、労働者階級の狀態を悪化せしめるといつたやうな問題は、スミスの知るところではなかつた。蓄積のための蓄積、生産のための生産、資本の發展期にあつた彼は何等の顧慮もなく生産力の増大を支持しえたのである。

§ リカルド

一七六〇年代から英吉利は産業革命の段階に入る。マニファクチュアの時代に準備されてきた技術的基礎は相つゞ機械の發明となつて現れた。今や生産力の發展の出發點は労働手段である。而して産業資本確立の條件として、それは衣料生産部門、特に木綿工業から始まつた。その出發點は作業機である。即ち、一七三三年、ケイの飛梭。一七六四年、ハーグリーブスのジェニ紡績機。一七六九年、アークライトの水杵機。一七七九年、クロムプトンの精紡機。一七八五年、カートライトの力織機等。而してかゝる作業機械の發明は、自づから之に對する新しい動力を要求し、従來の人力や風力や水力を以てしてはこの要求に應へえず、遂に蒸氣機關をして社會的なものたらしめ、これによつて動力機械は全く革命的發展を遂げ、作業機の能率も亦急激に向上した。かゝる機械及び動力の發明は必然的に鐵鋼業及び石炭業に變革を齎し、機械による機械の生産を可能にし、こゝに近世の大工業が成立した。——この經濟史的叙述については、例へばジェイ・エイ・ホブスン、『近代資本主義發達史論』第四章を参照、——産業資本確立過程としての産業革命は、生産手段を合理化する限度に於て、一面には生産手段そのもの、

社會化を促進するとともに、この社會化された生産手段をば、資本の形態に於て資本家の個人的所有に委ねた。

機械は手近かの結果として、資本のための利潤獲得の範圍を擴大した。即ち、それは労働の負擔を軽減する結果、婦人及び少年を工場労働者に轉化し、家内工業を工場の出張工場に轉化し、マニファクチュアを工場化し、手工業者を急速に没落せしめた。また機械は利潤獲得の程度を増大した。それは労働日を延長し、労働日の延長が法律によつて禁止されると労働を強化した。さらに機械は従來の成年男子労働者を著しく不用にした。このことはマルクスのみならず、ホブスンやウィルブランドなど、Vgl. R. Wilbrandt, Die moderne Industriearbeiterschaft, Stuttgart. 1926. S. 85-89. S. 109-111.) 産業革命を論ずる程のものゝひとしく認めるところである。それが如何なる結果を英吉利にもたらしたかは、一八四五年の若きエンゲルスの『英吉利に於ける労働者階級の狀態』に詳細である。彼は既にこゝで「産業豫備軍」について語つてゐる。『資本論』も結局亦これ等の事實の理論的表現に過ぎなかつた。これ等が一面的であると躊躇されるなら、醫師ガスケルの『英吉利の工業人口』Gaskell, The Manufacturing Population of England, London. 1833. を擧げることが出来る。或はトマス・カーライル(1795—1881)の『過

去と現在』Thomas Carlyle, Past and Present, 1843.がある。カーライルは云ふ、「餘りに多くのシャツだつて？いかにも。それは、この九億の裸ん坊をもつた汚れたこの世には珍物だ。」またガスケルは云ふ、「その身分が何であらうと、また彼等を集合せしめた原因が何であらうと、人間の大量があるところでは、到る處直ちにそのある部分の精神状態に頹敗をもたらすことは公理であると云つてよい。大都市と人口多き地域とは、あらゆる時代に於て、よし大ならずとするも、極めて多くの犯罪の生じる焦點であつたのである。……大國民のある部分の精神的及び社會的状态に今日まで起つた最も著しい變革の一つは、蒸氣が機械に應用されたことに基くものである。」と。その他後述する如く、シスモンディやオウエンは口を極めて機械生産の利潤獲得が道德的頹敗をもたらしたことを指摘してゐる。十八世紀から十九世紀にかけての英吉利には産業革命の進歩と戦争の結果もたらされた窮乏のために、労働者達によつて一七九一—二年には通信協會が興され、一八一二年及び一八二二年にはグラスゴウに於て總同盟罷業が起された。一八一一年ノッチングムに起つた機械破壊運動は、ランカシャー、ヨークシャーへと全國的に擴大した。この謂はゆるラダイトの運動はその後久しく續いたが、當時如何に機械が労働者達によつて憎惡の眼をもつてみられたかを物語るものである。而して一八二四年には遂に團結

禁止法が撤廢された。農村に於ては一七九五年、謂はゆる「家婦の暴動」と稱せられる食料一揆が発生し、一八一六年には再び農村に暴動が起つたといふ状態である。

かゝる社會的事實を前にして、經濟學者の理論も亦漸く分化して來る。一八〇四年、「公共の富の性質と起源に關する研究』An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth and into the Means and Causes of its Increase.なる著書をもつて現れたロウダアデイル卿(1759—1839)は既にスミスの如き分業の經濟學者ではなかつた。彼はスミスが分業を強調し、機械の發達をそれに歸したことを批評し、資本が労働にとつて代ることを強調する。「アダム・スミスが労働を以て富の主要な源泉とみようとするのに、ロウダアデイルは三つの生産要素、自然、労働及び資本の異なる影響を歴史的に別々に評價しようとする。」(Ergang, S. 35.)のことは既に近代階級が出現したことの表現である。彼にとつては既にスミスとは異り、公共の富と個人の富とは相異なるものであつた。

彼によれば、資本はスミスの説く如く、「労働の生産力を増加せしめるために使用される」ものではなく、「それなくば人間の手によつて爲されるであらう所の労働の一部分を代行する」、「人間の個人的努力によつては到底果し得ない所の労働の一部分を遂行する」ものであり、かくて

資本の蓄積は、最早、單純に富の増加と一致するものではなくなつた。曰く、「資本の蓄積は社會の一員より他の一員へ富を移轉せしむる一手段ではあらうが、併し、公共の富を増加する手段ではあり得ない。」

然らば機械は如何に取扱はれるであらうか。彼は一つの例をあげて説明してゐる。假りに一臺の靴下編機を所有する人が一日に三足の靴下を製造することが出来るとし、同じ時間に同じ仕事をするに手編工ならば六人を要するとする。消費者は、手編工五人分の勞賃を機械の所有者に支拂ふであらう。併し若し、一臺の編機が一足の靴下を製造するに三日を要するとせば、手織工一人を以て二日でできるのであり、機械の所有者は手織工に支拂はれる勞賃よりも一日分だけ餘分の勞賃を其の製造品の價格に加へなければならぬのであらうから、機械は無用なものとして抛棄されるだらうと云ふのである。

オープンハイマーは、この利潤理論について次の如く云つてゐる、「〔利潤に關する〕立證〔生産力〕説 *motivierten Lehre* の代表者として、ボエムはロウダアデル卿をあげてゐる。彼によれば、資本の價值創造力は、その賃銀がいまや機械の所有者のものとなる勞働者に代置することに基く。ひとは直ちにこゝではまづ第一に總利潤と純利潤とが混同されてゐることを認

識するだらう。機械の償却は賃銀を節約するより費用が尠いことを示すことが試みられてゐない。だが之に反して、この場合に機械は建設されないうといふ異論がたてられる。さらに企業家は動態 *Kinetik* に於てのみ、競争が同數の勞働者を節約する道具を提供しなかつた限り、機械の利益をうけるといふ異論がなほつねに残る。」と。(F. Openheimer, *Theorie der reinen und politischen Oekonomie*. I. S. 686—687. 傍點は原著者) この批評はオープンハイマーの動態が何を意味するかと云ふやうな點を別として當つてゐると云はねばならない。こゝでは機械は純技術的に扱はれてゐる。かくて資本蓄積の必然性はなく、「節約——即ち、消費財の生産より勞働の一部分を引去つて、之を勞働遂行のために有用なる物の生産に適用すること——は、若し、無分別の程度にまで推し進められるならば、一個人の富を實質的に減少する手段となるであらう。」「若し社會が節約によつて資本の形に於ける貯財を増加するならば、それは不可避免的に消費のために生産せられたる品物の形に於ける富を減少しなければならぬ。」と云ふことになる。(堀經夫、*經濟學史要論*、第二分冊、三〇一—三二二頁、参照)

彼ももとより機械を肯定した。然し乍ら、彼によれば上述の如く、機械の調達費はいはゞ賃銀基金から支拂はれるのであつて、従つてその採用は勞働者階級の利害に相反する可能性を認

めた。スコットランドの貴族として木綿王達に對してよくなかつたその政治的立場が、かゝる結論をひきだすに與つて力あつたのであらう。

ジェレミイ・ベンサム(1748—1832)は、「余はミルの精神上の父であつた。そしてミルはリカルドの精神上の父であつた。それ故リカルドは余の精神上の孫であつた。」(The Works of Jeremy Bentham. Edinburgh. 1843. Vol. X. P. 498.)と云つてゐるが、そのベンサムは、機械に「享樂を増加する手段」をみた。機械が採用されて、それに資本の増加が對應しないなら、それは勞働者の利益を害することになるが、彼によれば、それは「一時的な困難」に過ぎない。一般に保護立法の反對者として知られてゐるベンサムは、技術的進歩の肯定者として、發明者には特許を與へてこれを保護獎勵することを、竊盜に對する保護の如く、「絶対に必要」と考へたのであつた。(Vgl. Ergang, op. cit. S. 36—38.)

古典派經濟學の最後の偉大な代表者と云はれるリカルド(1772—1823)は産業革命の最只中に生れ、その主著「經濟學及び課税の原理」On the Principles of Political Economy and Taxation. 1st ed. 1817. 3rd ed. 1821. は一七九七年より一八一五年に亘る謂はゆる大産業の嵐と熱狂の時期をその背景として世に出た。彼はまさに機械制大工業の經濟學者であつた。その主著の序

文の第一行が示す如く、彼に於ては機械制生産と分配Ⅱ階級の對立がその根本問題であつた。

「機械問題は、經濟生活への機械の影響が全き規模に於て始まり、産業の大經營が成立したとき、はじめて發生する。」それ故、一八〇〇年以前に於ては、個々の著者がこの問題を取扱ふにとどまつたこと、アダム・スミスも亦單にこの問題に一瞥を與へただけだつたといふことは明かである。この問題を詳細に取扱つた最初のものはリカルドである。それ故、彼の態度は、この研究に於て立ち入つて取扱はれる。」(Einleitung.)とエルガンが述べてゐるのは尤もなことである。

リカルドは、一八二一年、その主著の第三版を出すに當つて、新にその第三十一章に「機械論」なる一章を設けた。彼はそこで次の如く云つてゐる。

「本章に於て、予は機械の社會諸階級の利害に及ぼす影響に就いての若干の研究に入るであらう。是は極めて重大の問題であつて、而して從來未だ曾て何等確實若しくは十分なる結果に導くやうな方法を以ては研究せられたことのないやうに見受けらるゝ所の問題である。予に於て愈々此問題に關する意見を言明するの責任があるのは、予の意見が更に考察を重ねた結果として、可なりの變易を關みしたからである。而して予は、機械に就いて、取消を要するやうな

意見を公表した覚えは一度もないとは云へ、而かも猶ほ、予は別の方法に於て、今日予の誤謬と信する學說に援助を與へたことがある。其故に、予の現在の見解と之を抱懐する理由とを吟味に附することは、予に於て義務となる所である。」(『經濟學及課税之原理』岩波文庫、三八二頁)

こゝでリカルドは、彼の從來の機械に關する見解を概括して次の如く述べてゐる。

「始めて經濟學上の問題に注意を向けた時以來、常に予の見解は、労働節約の効果あるが如き機械の何れかの生産部門に應用せらるることは、全體の利益となるものであつて、是に伴ふ所の不便は、大概の場合に於て、労働及び資本を一用途から他の用途に移すことに伴ふ所の不便に過ぎないものであると謂ふのであつた。予の目に映する所では、地主にして同額の貨幣地代を收むる限り、地主は、之を費して購ふべき貨物の中の何れかの價格が低減せらるゝことに由て利益を受くべく、而して此の價格低減は、機械使用の必然の結果であると思はれた。予の信する所に由れば、資本家も亦正しく同様に、結局利益を受くべきものであつた。勿論機械を發明せる者、若しくは之を最初に利用した者は、一時巨利を博することに由て附加的利益を享けるであらうけれども、機械の使用が普及するに連れて、生産せられた貨物の價格は、競争の結果、其生産費迄下降すべく、其曉には資本家は、以前と同じ貨幣利潤を收得し、僅に消費者

として、同額の貨幣收入を以て快適品及び享樂物の追加量を支配し得るやうにせられる事に依つて、一般の利益に参加するに止まるであらう。予は又、労働者階級も、同額の貨幣賃銀を以て一層多くの貨物を購買する力を有する筈であるから、機械の使用に由て、同じく利益するものであると考へた。予は又、資本家は以前と同量の労働を需要し、雇傭する力を有する筈であるから、彼れは其を新なる貨物か、或は少くも別種の貨物の生産に使用する必要は免れぬとしても、兎に角賃銀の引下は行はれぬであらうと考へた。假りに改良せられた機械に依つて、同一労働量を使用して、靴下の數量を四倍することが出来たならば、而して靴下に對する需要は僅に二倍したに過ぎなかつたならば、若干の労働者は必然靴下業から解雇せらるゝであらう。併し乍ら、彼等を雇傭した資本は依然として存在し、且つ之を有するものは、之を生産的に使用することを利益とするのであるから、此資本は社會に取つて有用であり、而して必ず需要があるに相違ない、何等かの別の貨物の生産に使用せらるゝであらうと考へられた。蓋し、予は昨日も今日もアダム・スミスが「食物の欲求は、何人にあつても、狭小なる人間の胃腑の能力に依つて制限せられてゐるけれども、家屋、衣服、車馬、家具の便宜と裝飾とに對する欲求には何等の制限又は確實なる限界なきものゝ如くである」といふ意見の眞實なる事を深く感銘し

てゐるものだからである。されば労働に對しては從來と同一の需要があり、而して賃銀は毫も下降せぬであらうと思はれたから、予は労働階級も、機械使用の結果たる諸貨物の一般的低廉の利益に、他の諸階級と同様に参加するであらうと考へたのである。

是が予の意見であつた。而して其は、地主と資本家とに關する限りに於ては、依然として變易して居らぬ。併し乍ら、予は、機械を人間労働に代用することは、労働者階級の利益に取つては屢々極めて有害なることを、納得するに至つたのである。」(同上、三八二—三八四頁、傍點は引用者)と。

即ち、リカルドは機械が労働力の節約をすること、即ち、機械の採用によつて解放される労働者数が機械の製造に必要な労働者数より大であることは、最初から認めてゐたところであるが、(本書、九—一〇頁、參照)スミス以來の古典派經濟學の根本思想によつて、技術の進歩は社會生産物の増大を來し、社會全體の福祉をもたらす。機械の採用は地主 \parallel 資本家 \parallel 労働者の社會諸階級の利益となるものと信じてゐたのであつた。然るに産業革命が描きだした諸情景は、「富の最中にある英吉利が示す光景ほど我々を愕然たらしむるものはない」(シスモンディ)——この經濟學者の科學的良心をゆり動かした。かくて彼は、「機械を人間労働に代用することは、労働

者階級の利益に取つては、屢々極めて有害なることを納得するに至つた。」のであつた。

然らば、リカルドの謂はゆる「予の現在の見解と之を抱懐する理由」とは如何なるものであつたか。彼は一つの例をあげてこれを説明してゐる。

「一人の資本家があつて、其價値二〇、〇〇〇磅の資本を使用して農業家と必需品製造家との業を兼營するものと假定しよう。更に此資本中の七、〇〇〇磅は固定資本、即ち建物道具其他に放下せられ、残る一三、〇〇〇磅は、労働扶持の爲め、流動資本として使用せらるゝものと假定しよう。又利潤は一割であり、従つて資本家の資本は年々其能率の原狀に復せられて、而して二、〇〇〇磅の利潤を生ずるものと假定しよう。

毎年資本家は、其占有に屬する其價値一三、〇〇〇磅の食物並に必需品を以て其作業を開始し、此の食物及び必需品は、悉く之を一年中に同額の貨幣に對して、自家雇傭の労働者に賣却し、又同じ期間中に、同額の貨幣を賃銀として労働者に支給する。年の終りに於て、労働者は一五、〇〇〇磅の價値ある食物及び必需品を資本家の手中に復歸せしめ、其中の二、〇〇〇磅は資本家自ら之を消費するか、或は其快樂と満足とに最も適する方法を以て之を處分する。是等の生産物に關する限りに於ては、此年の總収益は一五、〇〇〇磅、純収益は二、〇〇〇磅であ

る。今假りに、次年度に於て、資本家は、其労働者の一半を機械の建造に、残る半數を、例の如く、食物並に必需品の生産に使用するものとせよ。此年度中に彼れは一三、〇〇〇磅を賃銀として支給し、同額に達する食物並に必需品を其労働者に賣却すること、例の如くであらう。併し次の年には何うなるであらうか。

機械の製作中に獲得せらるゝ食物及び必需品の數量は、平常の一半に過ぎず、而してそれは僅に元と生産せられた數量の半分の價値を有するに過ぎぬであらう。機械は七、五〇〇磅の價値を有し、食物及び必需品は七、五〇〇磅の價値を有し、従つて資本家の資本の多寡は從來通りであらう。蓋し、資本家は、此の二個の價値額の外に猶ほ七、〇〇〇磅の價値ある固定資本を有して、其合計は二〇、〇〇〇磅の資本と二、〇〇〇磅の利潤とを成すであらう。此の後の金額を自家消費の爲め控除した後、資本家が有する流動資本を以て爾後の作業を營むに充つべきものは、五、五〇〇磅に過ぎぬであらう。故に此資本家の労働雇傭資力は、一三、〇〇〇磅に於ける五、五〇〇磅の割合を以て減少し、従つて從來七、五〇〇磅を以て雇傭せられて居つた労働は、悉く過剰となるであらう。

此の資本家が雇傭し得る、減少した労働量は、成程機械の援助を以て、而して修繕費を控除

した上に、七、五〇〇磅に等しい價値を産出しなければならず、流動資本と資本全額に對する二、〇〇〇磅の利潤とを共に併せて之を償はなければならぬのである。併し乍ら、若し此事が行はれさへするならば、若し純所得が減少しないならば、總所得の價値が三、〇〇〇磅たると一〇、〇〇〇磅たると、將た一五、〇〇〇磅たるとは、資本家に取つて果して何の意義を有するものであるか。

されば、此場合、純收益の價値は減少せぬに拘らず、その貨物を購買する力は、或は大に増進することもあるに拘らず、總收益の價値は、一五、〇〇〇磅から七、五〇〇磅に下落して居るであらう。而して人口を養ひ、労働を雇傭するの力は、一國の純收益に由らずして、常にその總收益に由て定まるものであるから、労働に對する需要は必ず減退し、人口は過剰となり、労働階級は窮迫貧困の境遇に陥るであらう。(同上、三八四—三八六頁)

即ち、リカルドによれば、最初には總收益一五、〇〇〇磅、純收益二、〇〇〇磅、従つて賃銀支拂のために一三、〇〇〇磅あつたのが、今や七、五〇〇磅の機械の出現のために總收益七、五〇〇磅、純收益二、〇〇〇磅、従つて賃銀は五、五〇〇磅となり、それだけ労働者は解雇されることになるといふのである。

これに關して彼は、「右に假想した所は、予の撰擇し得る最も單純なる場合である。併し機械が何れかの製造家の業務……に應用せられたものと假定しても、結果は少しも殊なる所があるまい。」「(三八七頁)と云つてゐる。即ち、「若しもそれが毛織物業者の業務ならば、機械採用後は從來よりも少なき羅紗が生産せらるゝであらう。何となれば、彼の多數労働者に對する賃銀支拂の爲めに處分せらるゝ數量の一部分が雇主によつて要せられぬものとなる筈だからである。」「併し乍ら、或は羅紗に對する需要の多寡は從來と同一なるべしと言ふものがあるかも知れず、又此供給の何處より來るかを問ふものがあるかも知れぬ。併し乍ら、羅紗を需要する者は、抑々何人であらうか。羅紗を取得するの手段として、必需品の生産に其資本を投じた、農業家及びその他の必需品生産者がそれである。彼等は穀物及び必需品を毛織物業者に與へて之を羅紗と交換し、後者は之を労働者に與へて、其労働が彼に提供した羅紗と交換したのである。」「(三八七頁)然るにいまや、「毛織物業者は、雇傭すべき人は、少なくなり、處分すべき羅紗も少なくなつたのであるから、食物及び衣服を求めぬであらう。」「(三八七頁)かくて、その結果は、農業家及びその他の必需品生産者の羅紗に對する需要はもとのまゝではありえない。結局、労働に對する需要は減退することになる。

然し乍ら、機械採用の結果たる諸商品の價格低落は、欲望を同一なるものとすれば、収入を貯蓄して資本を増加せしむる力を増加せしめねばならない。然るに資本の増加と共に、資本家は必ずより多くの労働者を雇傭すべく、従つてはじめ機械の採用によつて失業したのも、後に至つて一部分は雇傭せられることとなる。かくて、リカルドは、「若しも機械使用の結果たる生産の増加が、從來總収益の形に於て存在した丈けの食物及び必需品を純収益の形に於て提供するに足るものである場合には、全人口を雇傭する能力は同一なるものが存すべく、従つて必ずしも人口の過剰は起らぬであらう。予が證明せんと欲する所は、機械の發明及び使用は、總収益の減少に伴はるゝことあるべしといふに盡きる。」「(三八六—三八七頁)と述べてゐる。

第一版より第三版へのリカルドの見解の推移は、彼自らの次の論述に要約されてゐる。

「予の誤解は、一社會の純所得が増加する時は、其總所得も必ず増加するであらうとの認定から生じたものである。然るに、予は今、地主及び資本家が其収入を仰ぐ所の一方の基金は増加しながら、同時に今一つの基金、即ち労働階級が主として依頼する所の基金は、減少することがあり得ることを納得すべき、充分の理由を認める。故に、若し予の所見が正しければ、一國の純収入を増加せしめ得べき同じ原因が、同時に人口を過剰ならしめ、労働者の状態を劣悪

ならしめることがあるといふ結論を生ずるのである。(三八四頁)と。

既にリカルドがその主著第廿六章「總收入及び純收入論」に於て、「何れの國に於ても、其土地と労働との全生産物は、三個の部分に分たれる。此中の一部分は、賃銀、他の部分は利潤、爾餘の部分は地代に充てられる。」(三四一頁)と述べ、「其の純粹の實所得、即ち其地代及び利潤」(三四二頁)と云つてゐるところからみても、リカルドが云ふところの總所得とは、土地と労働との全生産物であつて賃銀及び利潤・地代の合計に相當し、その純所得とは純生産物であり、地代及び利潤の合計にあたることは明かである。従つて上述したリカルドの推論は、換言すれば地代及び利潤を増加せしめるまさにその原因が、人口を過剰ならしめ、労働者の状態を劣悪ならしめることありと云ふことになる。かくて彼は次の如き結論をひきだしたのである。

「第一、機械の發明及び其利用は、常に其國の純收益増加に導くものである。……」

第二、一國純收益の増加は、總收益の減少と兩立するものである。而して機械にして純收益を増加せしむる限り、假令總收益の數量と價值とは其爲めに減少することがあり、又屢々減少せざるを得ないとしても、機械使用の理由は、常に其使用を保證するに充分である。

第三、労働階級が懐ける、機械の使用は彼等の利益を傷けることが屢々であるといふ意見は

成心や誤謬に基づくものではなくて、經濟學の正しき原理に一致せるものである。

第四、機械使用の結果たる、生産手段の改良が一國の純收益をば總收益を減少せしめぬ程度に非常に増加せしむることがあつたならば(予の意味する所は常に貨物の數量であつて、價值ではない)其場合には、凡ての階級の境遇は改善せらるるであらう。」と。

リカルドは、機械の採用が労働者階級の利益に相反することあるを承認した。然し乍ら、彼は機械の採用に反對するといふことはなかつた。曰く、

「予は予の述べた説が、機械は之を獎勵すべからずとの推論に導くならんことを希望する。原理を明瞭ならしむる爲め、予は改良機械が突然發明せられ、且つ普及せらるるものと假想して來た。併し事實をいへば、是等の發明は、漸次に行はるるものであり、且つ資本を現在の用途より他に轉向せしむるよりは、寧ろ節約蓄積せられた資本の用途を決定する上に作用するものである。」(三九一頁)

「予は又、常に機械改良の結果たる、貨物を以て測れる純所得の増加は、新なる節約と蓄積とに導くであらうといふことを前に述べた。記憶しなければならぬことは、是等の貯蓄は年々行はれるものであつて、やがて間もなく、當初機械の發明に依つて失はれた總收入よりも遙

に大なる基金を造り出すに相違ないといふこと、而して其曉には、労働に對する需要は以前と同様となり、人民の境遇は、純收入増加が猶ほ彼等をして能くせしむべき其の貯蓄の増加に依つて、更に其以上改善せらるるであらうといふことは是である。(三九三頁)と。

斯くてリカルドは、機械の採用を止めるならば、資本は外國に輸出されて、労働に對する需要は全く消滅し、労働者階級に對してはさらに悪い影響を與へることになるといふことを以て機械採用の必然を擁護したのでつた。(『經濟學及課税之原理』岩波文庫、三九三—三九四頁)

要するにリカルドは、機械採用は總生産物従つて總收入の減少を來すときのみ労働者階級に不利益であり、若しも從來總生産物の形で存在したと同一量の食物及び必要品を純生産物の形で與へることができらるなら、さうしたことはないといふのである。このことは何を意味するであらうか。

「人口が生活資料に壓迫を加へてゐる處では、人口の減少か、或は更に急速なる資本の蓄積か、その何れか以外には救済方法はない。肥沃なる土地が既に悉く耕作せられて居る富有なる國々に於ては、後の方法は、之を過度に行へば、凡ての階級を等しく貧困ならしむるの結果を招くであらうから、甚だ實行し易いものでもなく、又甚だ望ましいものでもない。……………」

苟も人類を愛する者は、凡ての國々に於ける労働者が快適と享樂とに對する趣味を有し、又彼等の之を得んとする努力が有ゆる合法手段によつて奨励せられんことを、希はざるを得ぬ。(同上、八〇—八一頁)とリカルドはその賃銀論に於て云つてゐる。彼は既に市場賃が自然賃へ下落する傾向あることを認識し、労働者階級の生活程度の向上を説いたのであつたが、この新機械論によつて、その窮乏は絶對的自然の作用によるのみならず、さらに人爲的に生み出されることを説明したのであつた。*

*アモンは、その著『リカルド』A. Amann, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, 1921. に於て、この興味ある機械論の問題を見落してゐる。このことは謂はゆる理論的國民經濟學の資本概念にかゝはる問題であると思はれる。

然し乍らリカルドの如く、總生産物と労働の需要との間に必然的聯關を想定し、前者が増大すれば後者も亦増大するといふことは、畢竟、總生産物をもつて生活資料であるとなし、労働と生活資料とを對比し、生活資料の大小が即ち労働の需要の大小を決定すると推論することに他ならぬ。「予の誤解は、一社會の純所得が増加する時は、其總所得も必ず増加するであらうとの認定から生じたものである。」といふ新機械論も舊機械論とこの點については尠しも異るとこ

るはないのである。

かく生活資料と労働とを相對立せしめることはリカルドが資本を資本として、歴史的に把握しなかつたことの表明であり、このことは彼の賃銀論が物語るところである。蓋し、労働者に代置される機械は無償で手に入れることは出来ず、それは労働者節約の結果解放された資本によつて購入される。即ち、事實は、資本は解放されずに拘束されるのである。節約された労働者の生活資料は如何にも解放されるが、それは資本としてではなく労働で手に入れねばならぬ商品としてである。かくて社會の總生産物が増大することは決して單に生活資料の増大を意味せず、商品の増大を意味し、而もその大部分は機械及び原料としての資本部分に吸収されてゆかねばならないのである。

リカルドは上述したところに於て、機械がつねに資本家的生産方法Ⅱ機械生産の既に存在してゐる生産部門に持ち込まれるといふ前提から立論してゐる。然し乍ら、事實に於ては、最初は機械式の機械は先づ手織にとつて代るのであり、刈取機や打禾機や播種機等は農夫の手仕事にとつて代るのである。その場合には單に労働者が仕事から投げ出されるのみならず、彼の從來の生産用具も亦それと共に資本たることを止めて仕舞ふのであつて、かうした場合に、これ

までの「資本」が引き続き労働に對して從來通りの需要を與へるなどといふことは到底ありえないことである。其等の從來からの資本——生産手段は、最早役に立たないものとされる。リカルドはこの重要な問題を論じなかつた。

さらに、機械が既に資本家的生産方法Ⅱ機械生産の支配してゐる生産部門に持ち込まれた場合を考へてみるに、問題になるのは次の二つのことである。

一、機械を使用して労働者を節約せる資本家の基金。

二、この資本家の商品の消費者達の基金。

一の資本の一部分が労賃の代りに機械に轉化される場合の資本そのものを考察するに、生産される商品の總量とそのうちで労賃に轉化される部分との間には、何等一定した關係も、必然的な結びつきもないのである。

二の場合、もしこの商品が労働者階級の平均的消費の對象となるならば、リカルド自身認めてゐるやうに、一般に生活資料の低廉化となり、それはさらに實質賃銀の低下をもたらす。そして解放された収入の一部はその同じ商品の買入れに用ゐられるであらう。解放された収入の他の一部は、或は機械の採用された生産部門の擴大のために役立つかも知れないし、或はまた

他の何等かの商品の生産される新生産部門の建設や、或は既成の生産部門の擴大などに役立つかも知れない。ところがまた、解放された収入の一部分が外國の生産物と交換されたり、生産的に消費されたりすることもある。何れにせよ、解放された収入と収入から解放された労働者との間には必然的な結びつきはない。例へば、歴史上の事實として、倫敦の貨幣市場には、使ひ途を見出しえない資金がだぶついてをり、これに對してマンチスターではあり餘る労働力が雇傭の途を求めあぐんでゐる——といった状態が存在する。リカルドによるとこの二つのものは必ず結びつかなくてはならないのである。これは、彼が資本を資本として把握せず、單なる生活資料一般と労働者とを對立させてゐるからである。

然し乍ら、リカルドは資本を單に生活資料とみなして、資本主義生産の欲望充足經濟に對しても特色を見落すものではなかつた。されば、彼は、その機械論の中に於て、「資本と人口が増加する毎に、是と共に食物は、其生産が益々困難となる爲め、一般的に騰貴するであらう。食物騰貴の結果は賃銀の騰貴となり、賃銀の騰貴は、毎に貯蓄せられた資本を従来よりも大なる割合を以て機械の使用に投ぜしむる傾きがあるであらう。機械と労働とは絶えず相競争するものであつて、前者は屢々労働が騰貴する迄は、使用せられ得ないのである。……………」

労働を騰貴せしむる同じ原因は機械の價值を騰貴せしむるものではない。従つて資本の増加と共に必ず其のより、大なる割合が機械に投ぜられるのである。労働に對する需要は、資本の増加と共に引續き増進するであらう。併し乍ら、其は資本の増加には比例せぬ。増進の比率は必然的に遞減するであらう。〔三九一—三九二頁〕と云ひ、ジョン・バートンの「社會の労働者階級の狀態に影響する諸事情の考察」John Barton, Observations on the Circumstances which influence the Condition of the Labouring Classes of Society. 1817. が「技術が進歩し、文明が普及するに従つて、固定資本は流動資本に對して益々大なる割合を占める。……或事情の下に於て勤勉なる一國民の貯蓄年額全部が固定資本に加へらるることあるべきは、想像し易き所であつて、此場合には、貯蓄は、労働需要を増進せしむる上に、何等の影響を有せぬであらう。」と述べたのを引證し、「氏の論文には多大の價值ある報導が含まれて居る。〔三九三頁〕と云つてゐる。かくてリカルドはこゝでは、機械が賃銀のための流動資本を遊離するといふ本來の見解に對立して、それが固定資本化することを述べてゐる。リカルド及びバートンに於ける流動資本の固定資本化と云ふことは、後にマルクスに於て、可變資本の不變資本化、即ち、資本蓄積Ⅱ資本の有機的構成の高度化Ⅱ産業豫備軍の理論として展開されたことは周知のことからである。

リカルドは、彼の時代にとつて資本家的生産が生産一般の中で最も有利であると確信して、生産のための生産といふ立場を顧慮するところなく貫いた。彼が新機械論に於て機械の採用が労働者階級の状態に有害であるといふことを認めるに到つたのは、もとより單にジョン・バートンの影響ではない。産業革命の進展とともにたらされた労働者階級の状態を卒直に事實として認める科學的良心を有つてゐたからである。*

* リカルドの機械論については、既に次の如き好論文があり、本書も負ふところが多い。

小泉信三氏、「リカードの機械論」『三田學會雜誌』第十五卷第十二號（著書「リカード研究」昭和四年九月、鐵塔書院 四七七頁—五〇四頁）。

舞出長五郎氏、「リカルドの機械論」『經濟學論集』第五卷第三號、大正十五年十二月。

§ シモンド・ドウ・シスモンディ

リカルドは一八二五年の最初の本來的な資本主義的恐慌の襲來を見ることなく、一八二三年にこの世を去つた。彼がセイの取路の理論とその結果を同じくして一般的過剰生産を否定したにしても、彼はこの矛盾をみなかつたのだから仕方がない。これに對し、トマス・ロバート・マルサス（1766—1834）はその恐慌理論に於て過剰生産を認めることができたけれども、彼は不

生産的消費者の立場にあつた。

地代を神の豊かな賜物として合理化したマルサスは、不生産的消費者の存在の絶對的必要性を認めた。即ち、過剰生産を防ぐためには謂はゆる生産的消費を以てしては不十分であり、地主その他の不生産的消費者が存在しなくてはならぬといふのである。機械の問題もマルサスに於てはさうした視點からとりあげられた。機械生産が増大すれば、同量の農業生産物に對してより多くの工業生産物と交換されるといふのである。（Principles of Political Economy with a view to their application. 1820. 2nd ed. 1836.）機械が労働者階級の状態に悪い影響を與へねばならぬといふことをマルサスは何處に於ても云つたことはない。マルサスが下院の委員會から機械の産業状態に及ぼす影響を問はれたとき、機械の輸出禁止をとくことを力説したことは知られてゐる。労働に對する需要は、彼によれば、固定資本の額によるのでも流動資本の額によるのでもない。それは賃銀基金の増大による。「實際に労働の維持に使用されるところのものは、たゞこれ等の基金の分量と價値の増加の割合にのみ比例する。」（T. R. Malthus, op. cit. p. 234.）といふのである。固定資本の増大した使用が假に一時労働に對する需要の減少をもたらしたにしても、マルサスによれば、一般的にはなほ流動資本は増加しうるのであつて、同時に對應す

る販路の増大があるなら、一國の資本と所得とが増加するとともに、労働に對する需要も亦増大するのである。かくて機械は生産を低廉にし、國富を増進するものとしてあらゆる階級にとつて肯定さるべきものである。たゞ、彼は、機械のさうした好影響のための前提として、増大した生産に對して十分な販路のあることを要請した。ここには最早かの生産のための生産を説いて顧慮するところなく生産の發展を支持した態度はなくなつてゐる。マルサスは、一方に於ては労働者階級の貧困を必然なるものと論證すべく、他方には地主・僧侶・軍人等不生産的消費者の存在の必要不可缺を論證すべく、寧ろ矛盾を明かに肯定したのであつた。

我々はなほマルサスの機械論として謂はゆるマルサス派に屬する著者のマルサスの諸原理が詳述されてゐる一著述『政治經濟學概論』Outlines of Political Economy, being a plain and short view of laws relating to the production, distribution and consumption of wealth etc. London. 1832. を擧げることができる。これについてはマルクスの『剩餘價值學說史』第三卷・第一章がその機械論を取扱つてゐる。

さて、マルサスの『經濟學原理』が書かれるに當つて、その臺本であつたといはれるシスモンディ (1773—1842) の『經濟學新原理』Nouveaux principes d'économie politique ou de la

richesse dans ses rapports avec la population. 2 vols. 1819. について述べなければならぬ。

鋭利な理論的分析は缺如してゐたが、深い情操を以て英吉利古典學派の經濟學に對して最初の深刻な批判を投じたものはシスモンディであつた。彼の初期の著作『商業的財富論』De la richesse commerciale ou principe d'économie politique. 1803. はアダム・スミスの思想の解説にとどまつてゐたのであるが、一八一八年、英吉利に赴いてナポレオン戦争に續く、恐慌に襲はれた工業地方の實際と労働者階級の窮乏とを目前にみて、彼は資本主義制度とこれを代表した古典派經濟學の經濟的自由主義に懷疑を抱き、遂にその最初の批判者として現れるに到つたのである。このことは、一八一九年、彼が『經濟學新原理』の序文に於て『商業的財富論』の著述以來十五年以上もの間、私は經濟學の書物については、極めて僅かを讀んだに過ぎない。けれども私は事實を研究することは決してやめなかつた。これらの事實の或るものは、私のさきに採用した原理と矛盾するやうに思はれた。』と云つてゐることからも明かである。

シスモンディによれば、『經濟學は、すべての人々の福祉に關する理論を吾々に教ふべきものである。』かくて經濟學は、ひろく厚生の理論となる。而してその最後の結果に於て人々の幸福に關係を有しないすべてのものは、この科學に屬しない。』には最早、かの生産のための生産を

説き、單なる富の増進を以て經濟學の任務となした古典學派の態度はみられない。その「經濟學新原理」が新原理である所以は、それが「人口との關係に於ける富について」なる傍題をもつてゐる如く、富は單なる富としてではなく、人間との關係に於て取扱はれてゐるからなのである。この點に於てそれはジョン・ラスキン(1819—1900)の『この最後の者にも』J. Ruskin, *Unto this Last*. 1860. に相通じ、謂はゆる厚生經濟學に途をひらいた。「私は經濟學を一の新しい基礎の上においたと信じてゐる。それはすべての人の所得の決定によつてか、或はこの所得の分配に關する研究によつてかである。これが國民に最大の幸福を與ふるものであり、その故に、この科學の目的を最もよく達するものである。」と彼は云ふ。即ち厚生の教説としての新經濟學は、生産よりも分配を、何よりもその關心事とするものであつた。「年々の所得を生産と混同することは、この學問の全體を暗黒な幕でおほふものである。」といふその言葉に示される如く、彼は謂はゆる過少消費の事實を認め、セイ＝リカルドに對立して一般的過剰生産の存在を認識した。彼は矛盾の存在を認めた。然しそのこれを認むるや、上述の如く生産ではなくて何よりも所得に於てゝあつた。(谷口吉彦、シスモンチの所得不足説、改造社、經濟學全集、第四十卷、二〇三—二三五頁、參照)

シスモンディは、その主著第七章に於て、「機械の發明によつて過剰となつた人口について」論

じてゐる。即ち、それによれば、一國に於ける技術的進歩は、その國が近くに大市場を有つ限り、生産の勃興となり、福祉をもたらすものであり、最初にこの技術的進歩をなした國民に利益を與へる。だが、全文明世界が一市場を形成し、新顧客をたゞ新國民に於てのみ見出しうるやうなさういふ日がやがて到來する。全市場の需要は一定であり、ある生産者がより多く供給すれば、それは他の生産者の損害となる。かくて全體の販路は一般福祉の増進によつてのみ擴大される。即ち從來富者に限定されてゐた快適品が貧者にも及びうるやうになることによつてのみそれは擴大される。

商品の價格は直接労働に基くものではないが故に、一人で百人に代置する機械を使用したとき商品の價格は百分の一にはならない。進歩したマニファクチュアを考察するに、價格が算術級數的に減つてゐるに對し、手工労働は幾何級數的に不必要になつてゆく。技術及び産業、從つてまた富及び福祉の進歩は、労働のあらゆる成果を高めるための節約的方法の發見と労働のより少數の使用とに導く。動物が農業のあらゆる隅々で人間にとつて代る。また機械がマニファクチュアの殆どすべての労働にとつて代る。」

技術的進歩は商品の價格を低廉ならしめる。一定の所得を前提として、ある消費對象で節約

できるなら、それを他の消費対象に支出することにより、新しい支出が新しい労働を必要とするといはれるが、「この新しい需要は、この機會に驅逐された労働に對して決して同じ割合でない。」

機械の完成とそれによる労働の節約とは國民の間に於ける消費者の數を減少せしめる。蓋し驅逐された労働者は消費者たることをやめるのであるから。この制度の侵入によつて、英國の農村からは自らの労働により、不斷の欲望充足をかちえてゐた農民階級が没落して行つた。農村人口は著しく減退した。同様な變化が都市人口のうちにも行はれた機械の發明は、産業を少數富裕商人の手に歸せしめた。彼等は大資本、即ち高價な機械をもつて、從來、より大なる分量の労働を以て製造されてゐたものを提供する。彼等はその他一般の經營方法に於ても節約する。かくて小商人、小製造業者は没落し、其等の百人に代つて一人の大企業家が現れる。彼は以前の百人よりも富裕である。而も彼は以前の百人よりも悪しき消費者であり、その奢侈は百の家計の絶えざる需要に比して、遙かに僅かの刺戟を産業に與へるとゞまる。

「工場の三分の一は既に閉鎖してゐる。第二の三分の一も間もなくそれに續かねばならぬ。すべての倉庫は充滿してゐる。あらゆる方面から、商品はその生産費の半分を償ふかどうかと

いふ價格で提供されてゐる。」

發明に對して授けられる獨占の結果として、發明者は消費者の犠牲に於て利得する。そして他の生産者はそれによつて損害を受け、その労働者達は饑餓に陥る。この發明に基づく災害を他國の市場におしやるなら、新生産者は其處で多くの利益を獲得しようが、その土地の消費者がうるところは乏しく、その土地の生産者はそのことによつて損害を蒙り、その労働者は没落する。科學の進歩によつて昨日の發明は今日は追ひ越され、我々が發明の成果を享受せぬうちに、その發明は模倣され利用されて仕舞ふ。かくて他に加へる損害はまた已れ自身に返つて來るのである。若し發明に對する獨占の利益をなくすなら、さうした發明に對する熱心は消え去り、それを以て顧客を奪ひとる手段とは見做さなくなるであらう。

かくてシスモンディはまさにペンサムとは正反對のところを到達した。技術的進歩はこゝではその利益を懷疑させたのである。「私の反對するのは機械に對してゞなく、發明に對してゞなく、社會の近世的組織に對してゞある。……今日の弊害は、發明にあるのではなく、その發明の結果について、人々のなす不公正の分配にある。」「私は、マニファクチュアの財産が多數の中位の資本家の間に分割されて、數百萬人の上になつた主人たるたゞ一人の人間に結合されない

やうに希望する。」といふのがシスモンディの結論であつた。(Diehl u. Mombert, Lesestücke, Bd. 20, S. 73—87.)

「シスモンディは、リカルドとの直接的な論争のうちで、交換価値を創造する労働の特殊的に社会的な性質を力説し、且つ、価値の大きさを必要労働時間に、すなはち「全社会の需要とこの需要を充たすために充分な労働量との間の比率に」還元することを、「吾々の経済的進歩の特質」と呼んでゐる。シスモンディはもはや交換価値を創造する労働が貨幣によつて偽造されるといふポアギューールの思想に囚はれてゐないが、ポアギューールが貨幣を非難したやうに、大工業資本を非難してゐる。リカルドに於て、政治経済學がまつしぐらに最後の歸結に到達し、かくして終りを告げたものとすれば、シスモンディは、経済學の自分自身に對する疑を述べることにより、この終結を補完したのである。」とマルクスは「経済學批判」に於てシスモンディについて述べてゐるが、シスモンディを特徴づけるものはまことにその倫理的色彩であり、この故に、彼は屢々社会政策學派乃至講壇社会主義の始祖——「保守的社会政策の古典家」(モムベルト、序文)——と稱せられるのである。然し乍ら、單なる倫理的色彩のみを以てして問題は解決されないであらう。倫理的色彩は精確な事實の分析と結びつかねばならない。

彼はマニファクチュアの財産が多数の中位の資本家の間に分割されることを希望する。然しながら、これは「發達した交易經濟」を「單純なる交易經濟」に還元しようとするものではないか。而してこのことが歴史の歩みを見無視するものであることは云ふまでもない。

シスモンディは、一般的過剰生産を認めた。然し乍ら、彼によれば、それは所得が生産におひつかないことに基因するのであるが、多くの人から指摘されてゐるやうに、かくては恐慌は不斷に存在することになり、その週期性の問題は答へられない。然し、恐慌理論を問題とするのではないこゝではそこに立ち入る必要はないが、この過剰消費説は、リカルドに於けるが如く、資本を資本として把握せずこれを單に生活資料として理解してゐることにかゝはるやうに思はれる。シスモンディの機械論は彼の主著の第四篇・第七章及び第八章に詳細であるが、理論的には要するにリカルドに於ける流動資本の固定化といふことに盡きるのである。シスモンディに於ける如く、分配關係についてのみ歴史性社会性を認めて、生産關係についてこれを認めない見解は、資本主義生産に於ける生産手段の役割を見落すものであり、それは結局に於て社会的生産を技術的生産と同一視し、發達せる資本家的交易經濟を欲望充足經濟と化するものと思はれる。而してシスモンディに於ける斯かる見解の背景として、佛蘭西に於て當時なほ農民が

人口の過半を占め、小生産が支配してゐたといふ事情が指摘さるべきではないか。我々がこのことを指摘するのは單なる歴史的興味からではない。等しく倫理的色彩を帯びてはゐたが機械制大工業を地盤としたロバート・オウエンの思想は、進歩的なものとして歴史とその歩みを共にした。然るに大工業が小生産を打破する歴史的必然を認識することができず、小生産を地盤とした、ギルド的・家長的・小農民的な構想を描いたシスモンディは、その後凡そ七十年にして露西亞に於て、ナロードニキの新しい衣をつけて登場し、露西亞の特殊性の故に資本主義はこゝに發展せすと稱して、歴史の歩みを無視したことは、今や周く人の知るところである。だが問題は、かゝる過去の露西亞のことのみとゞまらない。その後百年を経た今日シスモンディは種々な形態をとつて現れてゐる。*

* 例へば經濟雜誌「ダイヤモンド」(第二十一卷・第三十九號、昭和八年十二月二十一日、一五〇—五一頁)には「機械と人力との調和」を説く次の如き記事がある。

「この間、久しぶりで郊外散策に出掛けたら、とある森蔭の普請場で杉だか檜だか、馬の胴ほどもある太い原木を立てかけて、半白の木挽が、丹念にそれを挽き割つてゐた。廓落たる武蔵野の晩秋に、折からの斜陽を浴びて、一推一挽、投影長く影法師を引く悠揚緩々たる姿は、何とも言はれぬ情景だ。吾輩がしきりに感じ入つてゐると、連れの一人が變なことを言ひ出した。曰く製材機械の發

達した今日、時代錯誤も甚しいものだ。……吾輩の詩興は、それで一遍でふつ飛んで了ふた。……この男なども、度し難い西洋かぶれの片割れだ。彼は機械の萬能を盲信して、人間の力を知らぬ。……製材機械が發達して何が一番都合を來したかといふと、總べての木材が薄べらになつたことだ。……天物を暴殄した上に、重ねて木挽きといふ職業を驅逐する。……吾輩が斯やうに、事を分けて説明しても、彼の新歸朝は……曰く、足下は天道だとか何だとか、いやに道學めいた講釋をやるが、人間は元來淺墓なものだ。その淺墓な人間が、便利のために工夫したのが機械である。天道がどうであらうと、錨珠を争ふ經濟社會に、そんな講釋は通用しない。……吾輩更に答へて曰く、人間は淺墓といふが、西洋人と日本人と、同じ淺墓でも行き方が違ふ。無關と高賃銀を食はるアメリカあたりの人足を雇へといふなら、或はお説の通りか知らぬが、彼の半白の老夫は日本人だ。……腰の粘ばりの強いのは、世界に誇る日本人の特質だ。然かも彼の半白老は、日本人なるが故に、よく低賃銀に甘んじ、またよく難苦に堪へる。機械などで挽き割るよりはあの方が却つて經濟的に仕上がるのだ。日本人は、天を恐れるけれども、さりとて曾呂盤の桁を外すやうな、そんな迂遠な人種ではないのだ。機械は重寶には相違ないが機械だけでは何事も出来ない。機械と人力と、何處かそこに相補ふ調和點がなければならぬ。それは、國により、國民の得手勝手によつて、自ら限界に相違がなければならぬ。……木挽のモーションがのろくさいといふなら、幾人かの木挽を雇へばいい。世に共存共榮といふが、共榮は少々怪しいけれども、尠なくとも、斯くして共存の理想に進んで行く。食乏ながら、共に働いて喰つてゆけるのだ。機械ばかりを重用して、同胞を排斥する。そして自分一人、ポロイ儲けをしようといふ西洋個人主義の社會と、悠々たる木挽の存在に意義ある日本の社會と、それは到底お話しにならぬ。さればこそ、一は資本主義の中毒とかで足腰が立たぬ、

一は不景氣に遭ふていよいよ底力を發揮する。時代錯誤と見える木挽の恰好こそ、實は日本人本來の姿なのだ。……こゝまで来てはじめて彼の新歸朝者は、物質文明の外形に陶醉して各々の國民性、その相違といふことを究めなかつた迂遠を悟つた。……自壞作用まで行きつまつた西洋資本主義の血脈昂進は、人間がロボットで機械のために驅逐される、天理に悖つた非道な仕組みに淵源してゐることも判つた。……永遠の繁榮を期するには、機械と人力とともにその短を補ふ、木挽の如きまで起用する共存日本のやうな社會でなければならぬといふことを悟つた。」云々

「各々の國民性、その相違といふことを究めなかつた迂遠を悟つた」のは尤も乍ら、經濟理論的にこの論文(?)は、機械と道具の混同をしてゐるし、何よりもそれがシスモンディの再生であることを指摘せねばならない。興味あることは補償説の誤謬が端的に認められてゐることである。最近ウオイチンスキーは『失業の三つの源泉』と題して、人口の變化、技術的進歩、經濟的發展の三つのモメントが失業に如何に働いたかについて世界各國に關する詳細な統計を發表してゐる。その日本に關する部分に次の如き表を掲載してゐるが、それは何を物語るものであらうか。(W. Woytinsky, Three Sources of Unemployment, International Labour Office, Studies and Reports, Series C, No. 20, Geneva, 1935, P. 194)

日本に於ける工業生産の發展 (一九二九—二〇〇)

年	號	勞働者數	生 産	個人あたり生産高
一九二六年(昭和元年)		一〇九・八	七七・九	七一
一九二七年(昭和二年)		一〇四・一	八三・〇	八〇
一九二八年(昭和三年)		九九・二	八九・四	九〇
一九二九年(昭和四年)		一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇
一九三〇年(昭和五年)		九〇・〇	九四・六	一〇五
一九三一年(昭和六年)		八一・七	九七・二	一一九
一九三二年(昭和七年)		八二・〇	一〇三・一	一二六
一九三三年(昭和八年)		八九・九	一一九・〇	一三二
一九三四年(昭和九年)		一〇〇・一	一二九・七	一三〇

§ ロバート・オウエン

古典派經濟學がリカルドによつて完成されつゝあつたその同じ時代に、既にその批判者は歴史の舞臺に登場する。英吉利の産業革命と佛蘭西の大革命とを背景にするサン・シモン(1760—1835)と、ロバート・オウエン(1771—1858)フリーヒ(1772—1837)の空想的社會主義がこれである。當時、機械制大工業は漸く英吉利に誕生したばかりであり、階級對立はもとより未だ發展して

あなかつた。

ロバート・オウエンは、弱冠の身を以てランカシャー一の紡績工場の支配人の位置につき、五百名の職工を雇傭し、最新式の機械を運轉しつゝ、早くも彼自らの言葉によれば、「生なき機械に大なる注意が向けられ、生ける機械は輕んぜられ、無視されてゐる事實」に注意し、よき環境を與へる必要を悟つたのであつた。今こゝでは、彼の工場施設の革新や、その主著 *A New View of Society, Essays on the Formation of Character*. 1813. にたゞいる必要はない。ラダイトの運動が、規模に於て、成功に於て、恐るべき程度に達した一八一五年、模範工場主は、一個の工場法運動者として、「外から、上から」労働者階級の救済に乗り出した。

「オウエンはその一八一五年の最初の小論文『工業制度の影響に關する考察』及び一八一八年の『労働者階級のための二つの追憶』に於て、とりわけ過剰生産を力説した。一方に於て機械は生産物を無限に増大する、他方に於てそれは労働者を解放する、それによつて失業者は殆ど全く消費から脱落し、なほ職にあるものの賃銀をおしきげると云つてゐるが、この學說の基礎は支持できない。何故なら、機械は労働者を解放しないから。」とオッペンハイマーは述べてゐる。(F. Oppenheimer, op. cit. S. 1010—1011.)

オッペンハイマーの補償説は暫く別とし、オウエンの説くところをきかう。

オウエンは『工業制度の影響に關する考察』*Observations on the Effect of the Manufacturing System*. 1815. (A. New View of Society and Other Writings. Everyman's Library. No. 799. P. 120—129.) に於て、三十年程前までは、英吉利は農業國であり、貿易、製造業、商業等に従事してゐるものは、その知識、富、權力乃至人口の極く一部分しか占めてゐなかつた。だが爾來英吉利の内外に於ける商工業の發展は著しく、その結果としてこの國の富、産業、人口、政治的權力の急速な増大をみた。而してこの變化は木綿工業に於ける機械の發明と、亞米利加に於ける綿花の栽培に基因するものであると述べ、「この變化は今なほ急速に進行しつゝあり、比較的幸福的な農民の單純さが全く我々のところから消えてゆくのもさまで先きのことではない。既に、現在、貿易、製造業及び商業から現れた慣習を幾分なりと有つてゐないものは殆ど見出しえないのである。」「從來、爲政者達は、製造業を、たゞ國富の源泉といふ觀點のもとにのみ觀て來たやうに思はれる。自然的進行に委ねられたとき、擴大された製造業によつて起る他の驚くべき歸結は、未だ當局者によつて何等の注意を拂はれてゐない。而も我々が言及した政治的及び道德的歸結なるものは、最も偉大な、而して最も賢明な政治家が全力を以て取り掛

るに値するものなのである。」(傍點は原著者)と云ふ。「高價な機械の一般的採用以來、人間の性質はその平均強度を遙かに越えることを強制されてゐる。而して多くの、極めて多くの個人の悲惨と一般の弊害とがその歸結なのである。それは國民的見地に於て、事實、過去幾世紀の中に起つた他の如何なる事件よりもさらに慨かましい。それは人民大衆の家庭的慣習を顛へした。それは彼等から教育を修得し合理的な娛樂を享受する時間を奪ひ去つた。それは彼等からその物質的利益を奪ひ、かつ彼等に料理屋や酒場の慣習をつけることによつて、あらゆる社會的な快適さを毒したのである。」

かくてオウエンは、その性格形成論を展開し、利得獲得の觀念が、それなくては自他を幸福ならしめぬ誠實なるものを破壊しつゝ、取引にかゝるあらゆる階級を通じて精神的墮落を招來しつゝあるを説き、「嚴密に云ふなら、この性格の缺陷は、それをもつ個人の責に歸せらるべきではなく、そのもとに彼等が慣らされて來たところの制度の壓倒的な結果である。」と述べてゐる。

斯くして、彼は、無制限な利潤追及によつて労働者階級にもたらされた結果は最も慨かましいものがあると稱し、製造業が如何に彼等の健康と道德とを破壊したか、七、八歳の兒童が午

前六時頃から夜八時頃まで工場の生活を送らねばならぬかを述べ、かくて傭主は労働者を單なる権利の手段としてしか見ず、労働者は自づから兇暴性を帯び、その増大を防止するため賢明な立法的手段が計劃され、この階級の狀態を改良するに非ざれば、早晚恐るべき危険狀態にこの國を陥し入れるであらうことを警告する。かくてオウエンは、「かゝる改良を實現し、危険を轉化する」ために「唯一の方法」として、「無視せられた幾百萬の貧乏な、そして無智な者の名に於いて」、「英吉利政府と英吉利國民とに呼びかけ、協力して何等かのよき又は有用なる目的のために教へられず導かれざる者を教導する制度をつくることを要求」し、次の如き法案を提出した。

それは、第一、機械を使用する工場の規則的労働時間を一日十二時間に制限し、これに一時間乃至一時間半の食事時間を含ませしめること、第二、機械を使用する工場で十歳以下の子供を使用せざること、乃至十二歳に達するまでは労働時間を一日六時間以上にしないこと、第三、男女の子供は、読み書き算盤が出来るやうになり、女の子なら日常の針仕事が出来るやうになるまでは、工場に採用することを禁止することであつた。而して彼は「これ等の手段は、ひとが黨派の感情、乃至狹隘な誤れる直接的利益の考へ方によつて影響されず、専ら國民的見地に

於て考へるなら、それは、子供にも両親にも傭主にも、また國家にも利益があることがわかるだらう」と云ふのである。

オウエンはさらに一八一七年英吉利下院に於ける貧民救助法委員會へ提出の報告書 Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor. To the Committee of the Associations for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, referred to the Committee of the House of Commons on the Poor Laws. March. 1817. (Everyman's Library. No. 799. P. 156-169.) に於て「現在の苦難の直接原因は、人間労働の價格下落である。このことは、歐羅巴及び亞米利加とりわけ英吉利の製造業に一般に機械がもたらされたことに基くのであり、變化は英吉利ではアークライト及びワットの發明によつて著しく促進された。」と述べ、機械が生産物の價格の低廉をもたらし、多くの人間を雇傭したこと、それにも拘らず、今や戦争の終結とともに市場は停滞し、失業者が充満したことを指摘してゐる。彼は機械が失業の原因たることを云ふのであるが、そして彼はこの報告に於て、彼の提案が、「何等かおきにいりの經濟學の理論の影響のもとにあるもの」(Everyman's Library. No. 799. P. 161.) に反對されるかも知れないといふやうな表現をさへしてゐるのであるが、經濟理論的に彼がシスモンディ以上のものを有

つてゐたとは考へられない。後年彼によつて發展させられた金屬貨幣廢止の試み、労働交換銀行の構想が、投下労働量の抽象的尺度の問題に行き悩んだことは、このことを示すものであり、オウエンの意義は、彼の工場法提案により、機械生産の發展を促進したことにあるのである。

機械制大工業の成立とともに、従來の手工業及びマニファクチュアの労働者は、工場に於けるよりもさらに悲惨な境遇に轉落せしめられた。機械制大工業の發達は、まづ大工業が工場労働者に課する苦痛及び缺乏を二倍にも三倍にもして、マニファクチュア及び手工業労働者を苦しめた。まづ婦人及び兒童がマニファクチュア労働者として工場労働に於けるが如く、大きな役割を演じ始めた。次に、謂はゆる家内工業に於て、廉價にして未成熟な労働力の使用がマニファクチュアに於けるより尙ほ一層猛烈となつた。機械によつて大工業から驅逐された労働者は、マニファクチュア及び家内工業にその身を投じて、大工業のための産業豫備軍を形成するとともに、彼等自身の間にも激烈な競争を喚起し、労働賃銀の恐るべき低下その他が悲惨状態をもたらしした。マニファクチュア及び家内工業は、機械制生産による低廉優秀な商品と競争するために、賃銀は工場労働者に比して遙かに低く、而も労働時間は法外に長かつたのみならず、其の他の労働諸條件、殊に衛生状態は著しく劣悪であつた。かくて労働時間を制限し、幼年工

の使役を限定し、衛生上一定の条件を設けることを要求した工場立法は、マニファクチュア及び手工業にとつては致命的な打撃たるものであり、これらの後れた生産部門は没落してゆくよりほかなかつた。マニファクチュア及び家内工業から、機械制大工業への歴史的推移は、工場立法によつて促進されたのである。

工場立法の歴史的意義として、次に普通教育の實施といふことがあげられる。即ち、工場法の教育に關する條項は必ず普通教育を労働の強制条件としてゐるのであつて、これによつて教育と筋肉労働との緊密な結合の可能性が明かにされた。この教育上の改革に關聯して、工藝教育の問題がある。マニファクチュアに於て分業の進歩が著しかつたとはいへ、その技術的基礎は保守的であり、ひとはその全身を終生一定の部分作業に縛られてゐた。一の手工業と他の手工業の間に、また一つの手工業に於ても専門化された熟練労働者と無教育な不熟練労働者との間には絶對的な區別があつた。かゝる技術的基礎に經濟關係に於ては、工藝教育乃至生産の一般原理の研究はありえず、又あつても一般化しえなかつた。然るに機械制大工業の技術的基礎は進歩的である。機械は絶えず生産条件を變革し、労働者を一の生産部門から他の生産部門へと投げ込む。機械は労働者を終生一定の部分作業に縛りつけることを不可能にし、彼は最早

一定の生産的活動をなす資格をうるために長年月の修練を必要としなくなつた。彼は生産方法の進行についての科學的理解と實際的熟練とを必要とするのであつて、これは機械制生産の十分な進展とともに労働者階級に工藝教育が與へられることを豫測せしめる。

なほ機械制大工業に工場立法による古き家族關係の解體の事實が指摘せられねばならない。工場立法が工場やマニファクチュア等の労働を取締るにとゞまる限り、それは資本に對する干渉として現れるに過ぎないのであるが、家内労働の取締りは父權乃至親權に對する直接の干渉とみなされる。舊來の家族制度とそれに固有の家族労働の經濟的基礎とが大工業のために分解される結果、舊來の家族事情そのものも亦分解されてくる。即ち、婦人及び兒童の社會的生產への参加によつて、男子及び兩親の權力はその經濟的基礎を失つた。それ自體としては婦人及び兒童の解放について何等考へることのなかつた工場立法は、彼等の労働を特別の保護のもとにおくことにより、特定の經濟關係の制約のもとに彼等を解放したのである。なほ、機械生産の進展の農村に對する影響もみのがすことはできない。

要するに、工場立法に機械生産の一般化によつて資本主義は正常に發展せしめられ、これによつて本來の労働者階級も然るものとして成立して來たのである。ひとはシスモンディとオウ

エンとの對立をこゝにみなくてはならない。

§ アンドリュー・ユーア

我々は以上に於て、進歩的要素としての機械をみた。そして單なる否定的側面をしか機械に發見しえない見解と對比したのであつた。然るにまた機械のうちに單なる肯定的側面をしか見ない見解が存在する。例へば、上述したアンドリュー・ユーアの如きはこれである。この英吉利の自然科學の教授は、徹底的資本の支持者であつた。ジョン・ウェイドの「中産階級及び勞働階級史」John Wade, *History of the Middle and Working Classes*. 2. ed. London. 1834. 亦アンドリュー・ユーアに於けるが如き、徹底的・一面的な技術的進歩の肯定を以て特徴づけられる。かゝる考へ方の例證として、ユーアの見解を紹介しよう。その著述は、工場制度の發達が比較的幼稚であつた一八三五年に出版されたものとはいへ、「工場精神の典型的表章」であると云はれてゐる。

ユーアは次の如く述べてゐる。

「物理的・機械的科學が社會にもたらした恩恵と、それが人類の運命の改良のために今なほ有

つところの手段とは、今日に到るまで關説されること餘りにも尠い。而も他方に於て、それは富裕な資本家をして貧乏人を抑壓し、勞働者から強化された仕事を抽出する手段を與へたとて非難されてゐる。例へば蒸氣機關は力織機を極めて急速に運轉せしめるために、そこに勞働してゐる織工が同じ早い速度で勞働せねばならぬこととなつた。然るにかゝる不休の動因に從屬してゐない織工は、その意のままに梭を動か……することができると云はれてゐる。然し乍ら、この二つの場合には次のやうな差別がある。即ち、工場に於ては織機の各部分は、整然と整へられてゐるので、動力はそれについてゐるものをして殆ど何事をもなさしめない。確かに如何なる肉體的疲勞をも受けることはない。一方それは彼によき不斷の賃銀と、加ふるに無料で健全な仕事場とを與へる。然るに工場によらない織工は、あらゆることを筋肉勞働によつて成就せねばならぬから、勞働を厄介に感じ、従つて無數の小休みをする。それは一つ一つ切り離すなら何でもないけれど、全體としては大きなものである。従つて比較的低い賃銀しか受けとらぬ一方に於て、貧弱な食事と小屋の濕氣によつて健康を失ふ。マンチェスターのカブット博士は云ふ、「手織工は主として小農民であるといふ數日前のロバート・ピール卿の言葉に關して云ふなら、それより以上の誤りはない。彼等は最も悲惨な仕方、街の穴倉や屋根裏で、雀の泪

ほどのものために、十六時間、十八時間働き乍ら生活してゐる、或は寧ろやつと生活を支へてゐるのである。』

工場に於ける科學的改良の不斷の目的と効果とは博愛的なものである。蓋し、それは職工をして、彼の精神を消耗しその眼を疲勞せしむるやうな、さういふ小さい對象から免れしめ、或は彼の身體を不具にし、弱めるやうな、さういふ惨しい努力を反覆することを免れさせず傾向を有つてゐる。この書の中に述べられる製造工程の各段階毎に科學の人情は明白である。この眞理の例證は殆ど毎日現れてゐる。その中の著しいものが一つあたかも余の知るところとなつた。羊毛織物業に於て、羊毛を梳り、紡ぐその中間に粗紡と云ふ行程がある。……ところで、梳ることと紡ぐことは自動的科學の領分であるが、粗紡は手の作用であつて、それを行ふものの熟練に基づく。そして彼の不正確さがそれに加はるのである。もし彼が着實な節度ある人間であるなら、……彼の若い助手を惱ますことなく、その仕事を規則的に果すであらう。だがもし彼が酒に溺れ癪癪持たない人間であるなら、所有主の恩恵深き規則に背いて、若い助手に對して恐るべき專制を振ふことになる。これ等の人達は、もとより工場の中で働いてゐるものであるけれど、適當に云へば本來工場労働者ではない。蓋し、彼等は動力に依存せず、木綿工場その他の

工場に惜しみなく投げ掛けられた罵言の主要源泉だつたのである。其等の工場にはかゝる氣紛れな行動や殘忍行爲は存在しない。羊毛を粗紡する者は、仕事の休みにピヤホールに行つた後その仕事を暴力的に始める。そして助手がついてゆくことができないやうな速度で機械を運轉する。そして若しも彼等がすこしでも缺けるところがあると、彼は躊躇なく粗紡枠から長い木製の鞭を振り上げて彼等を無慈悲に打擲する。余は、科學が手工的氣紛れから仕事の斯うした部分を救ひ出し、他のものゝやうに自動機構の保護のもとにおくに到る望みあることを發見して欣快とするものである。』(Andrew Ure, *The Philosophy of Manufacture*. London, 1835. P. 7-9.)

「工業地方を貫く數ヶ月の最近の旅行に於て、余は幾百萬の老若男女が、その多くは何等か從來の仕事では日々のパンを得る力もない程のものであるが、たゞ一滴の汗水をも滴らすことなく、而も夏の太陽と冬の霜とから保護されて、わが立法を行ふ又は流行の貴族達が集まる主都のそれよりも、さらに風通しのよいそして健康に恵まれた部屋にゐながら、十分な食物、衣服、家庭的設備を得るのを見た。これ等の廣いホールのうちに、蒸氣の恩恵的な力は、その周圍に一群の従者を集め、その各々に、彼等の側の苦痛な筋肉的努力に代置するところの、規則的な仕事、彼自らの巨腕のエネルギーを割り當て、その代りにたゞ偶々その工場に起る僅かな

錯誤を訂正する注意と腕前とを要求するにとゞまるのである。この動力の柔しい従順さは、最も鋭い眼に導かれた如何に熟練した手も眞似できない精確さと速度とを有つレース機械の小さい絲巻を推進する。従つてその監督のもとに、數に於て、價値に於て、有用さに於て、構造の巧みさに於て、亞細亞、埃及、羅馬の專制主義が誇りとする紀念碑を後目にかけて、その市民の状態を改良すると共に、如何なるところまで資本、勤勉及び科學が國の資源を増大し得るかを示しつゝ、素晴らしい建物が僅々五十年のうちにこの王國の中に聳立するに到つた。斯くの如きが、機械學と政治經濟學との驚異に充ちた工場制度なのである。(P. 17-18.)

「人間性の弱點として、労働者がより熟練になればなる程、彼はより多く我儘となり、制馭し難くなる。その結果、彼はより多く機械的經營に相應しからざるものとなる。即ち、彼の變り易き出來心がかゝる全經營に對して一の重大なる障礙を與へ得ることになるからである。

即ち、現代工場主の重大なる問題は、科學と資本とを結合することによつて、彼れの使用する労働者達の擔當を彼等の注意と彼等の器用——それをある單一の對象の上に固定するならば、幼少のうちに尙よく完成し得べき能力——の行使に還元することである。(P. 20.)

「労働の等級制度に於ては、ある種の機械的力技を十分遂行し得る迄に眼や手が熟練するの

には、若干年の間の徒弟奉公をなすことが必要であつた。併し乍ら、一の作業過程を分解してそれを構成する處の諸要素に還元せしめ、その一切の部分を一の自動的機械の作用に從屬せしむる處の制度に從へば、これ等の要素的部分を、短期間の實習を経たる普通の才能の所有者に委ねることが出来る。また緊急の場合には、彼をして一の機械から他の機械へと工場主の命のまゝに移らしむることさへ可能である。斯くの如き人員の更迭は、労働を分つて、甲には専らピンの頭を作ることを業とせしめ、乙にはその尖端を研ぐことを業とせしめ、かくてその労働の單調にして退屈なることにより、彼等をして萎靡衰耗せしむるが如き、往昔の方法とは全然相反するものである。……即ち、平等化の原則若しくは動力による經營に從へば、職工の能力は一の快適なる労働に從はしめらるゝに過ぎない。……彼れの役目は、規則正しき機械の運轉を監視することなのであるから、彼は之を僅少の時間を以て習得することが出来る。且つまた、彼は一の機械から他の機械への彼の部署を變更することによつて、彼れの仕事を變化せしめ、彼れの労働並びに彼れの同僚の労働から結果する全體的組合せを考察することによつて、彼れの思想を發展せしむるに至る。故にかの能力を束縛し、思想を狹隘ならしめ、肉體の自由なる發達を阻害する——道徳的な著者が之を分業の所爲に歸するは必ずしも理由なきこ

とではない——が如きは、普通の事情の下に於ては、労働の平等なる分配の制度に於ては、起り得ざるところである。」(P. 21—23.)

「凡そ機械の改良の恒常的目的とその傾向とは、實際に於て、人間の労働を全然不必要ならしむるか、或は成年労働者の労働に代ふるに婦人ならびに小兒のそれを以てし、若しくは熟練せる職人の労働に代ふるに不熟練労働者のそれを以てすることによつて、人間の労働の價格を低下せしむるかに存する。……長き経験を有する職人の代りに、生き生きした眼としなやかな指とを有する小兒のみを使用すると云ふかゝる傾向は、かの熟練の程度の相違による分業を説くところのスコラステイックな信條が、我が開明の工場主達によつて、遂に拒否され終つたことを示すものである。」(P. 23.)

ジュイ・エイ・ホブスンによれば、「初期の工場立法に對抗する徹底的工場擁護者が、あつかましくも、時として『高率賃銀の經濟』を主張し、それが初期の工場主の態度を支配してゐたと主張した事は眞實である。ユニア博士もさうであつた。」ユニア博士が、農業賃銀の三倍と見積つて居る紡績工場の高率賃銀に關する記述が、博士自身の著書の附録にある統計と一致して居ない。……男子紡績工のみが、彼の所謂『高率賃銀』を受取つて居た。そして彼等は、其中か

ら、彼等の補助者として傭はれた助手の労働に對して支拂つた。」かくてホブスンは、「ユニア博士も、その主たる議論として、高率賃銀は最善の質の仕事を誘起し、又労働者を常に満足させる状態に置き得るといふ二つの理由より、『高率賃銀の經濟』を唱導するに至つたにも拘はらず、次の如き明かな矛盾に陥らざるを得なかつた」と述べて、ユニアの著書から次のところを引證してゐる。「高率賃銀は、労働者に感謝の念を起さしめ人心を改善せずして、却つて労働者を増長せしめる。又工場主達を奴隸の地位に墮す目的を以つて、ランカシャー諸地方を通じて次から次へと無茶苦茶に傳播した同盟罷業の我儘な精神を助長する基金を供給した。かうした例が餘りに多い。」(J. A. Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism*. 1926 P. 353—354.)

ホブスンが指摘する矛盾は、畢竟ユニアが代表するところのものゝ矛盾に他ならない。マルクスは、畢するにユニアの全著述は無制限労働日の讚美であり、彼は一方に於て無制限労働日を支持するとともに、他方に於て、工場労働者達には機械によつて彼等のためにつくられたところの、不滅の利益を考想すべき閑暇を感謝せよと勸告するものであることを指摘してゐる。(マルクス『資本論』第一卷、改造社版四二一—四二二頁)これ等の批評は當つてゐると云はねばならない。

§ ジェイムス・ミルよりジョン・ステュアート・ミルへ

さて、リカルド經濟學が労働價值説の修正、即ち直接労働と蓄積労働との交換の問題、即ち利潤の問題でその解決に悩んだことは、周ねくひとの知る如くであり、既に同じ時代には謂はゆる空想的社會主義が誕生しつゝあつたことは上述の如くである。斯くて彼を以て古典學派の最後の偉大な代表者として經濟學はそれ以後、一八二〇年代に於て相對立する二つの學派にわかれて行つた。即ち、一方に於けるリカルド學派の解體であり、他方に於けるリカルド派社會主義の成立である。リカルド派社會主義はオウエンの影響のもとにあり、勞賃、貨幣等に關する見解に於て兩者はほゞ同じ傾向にあつたが、單にリカルドの水準にとゞまらず、その労働價值説を以て剩餘價值の解明に寄與したことは歴史的事實である。我々はこゝでは直ちにリカルド學派の解體の問題に進みたい。資本主義のもとに於て機械は失業者をつくらぬといふ、かの補償説なるものは、こゝに甫めて成立したのである。

リカルドに於て示唆されたが、リカルド經濟學の構造それ自體の制約によつて、十分とりあげられなかつたところの、固定資本と流動資本の組成と労働價值説との關係の問題をとりあげ

資本の總量が同一であつても流動資本がより大なる部分を占める資本は、固定資本がより大なる部分を占める資本より、より多くの直接労働を使用することを指摘したのは、ロバート・トレンズ(1780—1864)であると云はれてゐる。然し乍らトレンズは、資本の發端を野蠻人の石や棒切れに見出し、利潤を交換から引き出した。斯くて彼は、マルサスと同じく謂はゆる生産費説をとつて労働價值説を批判し、リカルド學派の解體に寄與した。機械論に於ても、トレンズは全體として技術的進歩の單なる肯定者であつた。彼によれば、機械は賃銀基金から支拂はれるのではなく、従つてその採用は労働者階級の損害とはならず、總生産物及び純所得は同じ割合で増大する。唯一の例外として、彼は機械の労働が手の代りに牽獸によつて行はれる場合を認め、そのときは一時的に労働者階級の利益に相反するといふのであつた。彼はマカロックと同じくリカルドに對立するものであつたが、マカロックの如く機械使用のあらゆる弊害を否定するものでもなく、またシイニオアの如くに機械使用の悪影響を存在しても、本質的なものでない一蹴して仕舞ふものでもなかつた。このことは、トレンズ自らがこの弊害のために議會の立法的手段に訴へてゐることからも明かである。エルガンダは、この故に、然る限り、彼は英國經濟學者達の間で特殊な位置にあると述べて、(C. Erganda, op. cit. S. 75—76.) 彼が單なる自由放任論者

ではなくて、社會政策家であつたことを強調してゐるけれども、既に、一八一九年、リカルド自身ロンドンに於て、オウエンの失業救済政策實現のための資金募集の委員會に参加してゐる事實や、また、工場立法の歴史的必然性をも併せ想ふなら、トレンズが英吉利經濟學者として別に特殊の位置を占めてゐるものとは云へないであらう。彼は、その生産費説と利潤の流通過程發生論によつて、リカルド學派の解體に寄與したのである。もとより、彼が利潤をきつぱりと生産費からおひだしたのは特徴ではあらうけれど、然しながら生産費を規律するものが單に蓄積労働に資本であるなら、機械採用の必然性は否定せられる。

嚴密な意味に於てリカルド學派の解體はジェイムス・ミル(1776—1836)に始まるものと云はれてゐる。謂はゆる補償説もこゝに始まつたのである。彼はリカルドを無條件絶對的に信奉し、英吉利ではじめての經濟學の教科書をつくりだした。彼も資本主義的機械ではなくて機械一般を論じ資本家的交易經濟を欲望充足經濟に還元した。ミルは、「利潤は労働に對する報酬である。然し乍ら問題たる商品に直接に用ひられた労働に對するそれではなく、労働の生産物たる他の商品の媒介によつて用ひられた労働に對する報酬である。例へばひとが一〇〇日の労働の産物である一つの機械を有するとせよ。所有者がそれを用ひることは、明かに労働を用ひるのであ

る。もつとも労働の媒介なくしては存しなかつたであらうものを用ひるといふ第二次的の意味に於いてあるが。ところでこの機械が正確に十年間存続すると計算されたとせよ。然るときは一〇〇日労働の産物の十分の一が毎年用ひられるのである。このことは費用及び價値の見地からすれば一〇日の労働が用ひられたといふのと同じである。所有者は、この機械が彼に費へるところの一〇〇日の労働に對して、毎年如上の率で支拂を受くべきである。」と、その著『經濟學綱要』Elements of Political Economy. 1821. 3rd ed. 1826. に於て述べらる。

即ちジェイムス・ミルによれば、利潤は資本、即ち蓄積労働にふくまれてゐる勞賃の一部なのであつて、資本家が利潤を獲得するのは最初に投じた資本價値を償却してゐるに他ならず、これを機械に即してみるなら、資本蓄積といふことが行はれないわけであるから、機械採用の必然性もなく、資本家の所有する機械も労働者の勞働力と等しく労働するといふことなのである。斯かる見解は、直接労働と間接労働とを同一視し、利潤が資本家の労働によつて成立したものであることを説くに他ならない。

ジェイムス・ミルとは同じことが、佛蘭西に於てはJ・B・セイ(1767—1832)によつて行はれてゐた。セイは『經濟學』に於て、アダム・スミスが「獨り人間の労働にのみ價値産出の力を歸

する」ことを誤謬であるとして、「一層正しき分析は、價值が勞働の行爲、或は寧ろ、人間の勤勉と、自然の提供する諸働因の作用及び資本の作用との結合から生ずるものなることを示して居る。此原理を知らぬ爲めに、彼れは富の生産上に於ける機械の影響に關する合正の理論を確立することを妨げられた。」と云つてゐるのであるが、リカルドはこれに對し、その「經濟學及び租稅之原理」第二十章に於て、價值と富との差別の問題を論じ、「アダム・ミスの意見とは反對に、セイ氏は……自然的働因に依つて貨物に價值が與へられることを論じてゐる。併し乍ら、是等の自然的働因はその使用上の價值を増加せしむること大なるに拘らず、決して貨物にセイ氏が論じて居る交換價值を加へるものではない。」「アダム・ミスは、機械と自然的働因とが一國の富を増加せしむること極めて多大なるべきことは之を容認したのであらうけれども、それが些かたりとも此等の富の價值を増加せしめるといふことは認めなかつた筈である。」と云つてゐる。〔經濟學及課稅之原理〕岩波文庫、二七九—二八一頁）即ち、リカルドは勞働を人間勞働として把握し、機械は財の使用價值を増加させてもその交換價值を増加することはできぬこと、反對に機械が使用されるなら、それだけ人間勞働が節約されることによつてその交換價值を下落せしめることを理解してゐたのである。エルガンが、「生産物の價值へ及ぼす機械の影

響について、セイは何等述べるところはない。彼が客觀主義價值論者でなくて主觀主義價值論者である限りに於て、この點で彼は古典學派とは異つてゐる。價值は彼によれば、財貨の效用の評價による。〕(Ergang, op. cit. S. 55.)と述べてゐるのは正しい。

セイの機械論は、恐慌の原因に關してマルサスと交した、その第四の書翰 (Say, Lettres à M. Malthus sur différens sujets d'Économie Politique, notamment sur les causes de la Stagnation générale. Paris, 1820.) に詳細であり、そこで「機械の使用より……起る利益」を述べてゐる。(Vgl. Ergang, S. 56ff.) 彼によれば、所得の推移と職業の移動とが、機械使用の唯一の思はしくない影響であり、それは技術的進歩がもたらす産業の繁榮によつて間もなく打消されて仕舞ふと云ふのである。然し乍ら、機械の採用による技術的進歩は、それがもたらす過剩人口によつて社會の購買力が極端に低下し、最早生産を制限せねばならぬそのときまで行はれるのであるから、一時的の影響といふのは、實は永久的な存在であると云はれよう。ジョイ・エイ・ホブスンも云ふ、「我々は市場が生産方法の改善と同一歩調で擴張されてゆくであらうといふことを確めることができぬ限り、機械に於ける改良は、雇傭の不安に關する正常的な原因であるとして考へねばならぬことは明らかである。雇傭の損害は、單に「一時的」であるに過

ぎぬかもしれないが、しかし、労働者の生命が同様に一時的であるから、かゝる損害は、労働生活に對する攪亂的な要素として餘程の重要性を持つと云ふことができる。」(J. A. Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism*. P. 328.)

* セイの如き「理論」は今日普通の「常識」である。例へばマネジメント社調査部、産業合理化の諸現象、産業合理化研究資料、第壹輯、昭和五年一二〇頁、参照)

マカロック(1789—1864)はリカルド經濟學を通俗化したもの、リカルドのみならずジェイムス・ミルをも俗流化したものとして評價されてゐる。彼は、謂はゆるリカルド學派の解體を完成した。これは彼の労働概念の明かに示すところである。

ジェイムス・ミルは同一量の労働が投ぜられた商品にしても、市場に出る迄により長い時間を必要とするときには、然らざるものに比しより大なる價值を有つことを證明しようとして、時間を労働に還元した。マカロックは「經濟學原理」Mc Culloch, *The Principles of Political Economy*. 1825. 5th ed. 1864. に於て、「このミルの見解に基き、労働概念の全き變改を完成した。彼は云ふ、「労働は正當に一種の行動或は作用と云ふことができる。その行動或は作用は、それが人間によつて爲されるものであらうと、又一定の結果を齎すに努力する下等動物、機械

或は自然力によつて爲されやうと同じである」(P. 75)と。即ち、彼れによれば、價值をつくる労働は必ずしも人間労働たるを要せず、機械も亦労働者なのである。斯くてその結果は、「労働なる言葉は、……價值についての凡ての研究に於いて……或は人間の直接的労働を、或は人間によつて生産された資本の労働を、或は、その兩者を意味する。」(P. 84)「資本の利潤は蓄積労働に對する勞賃の別名に他ならぬ。」(P. 291)かくて利潤は機械を所有する労働の報酬なのであり、こゝに所有の勞賃なる範疇ができあがる。マルサスは「經濟學に於ける定義」の中で云ふ、「マカロック氏は彼の當然の使命たるリカルド氏の訂正をなす代りに貨物中に含まれる人間労働の外に通常其の價值に影響を及ぼすものと考へられたる或る他の要素を挙げ、さうしてそれを労働といふ名稱で呼ぶことによつて、彼は好んでリカルド氏の言葉を保存したが、併し其の意味を全く變更する結果となつた」と。エルガンがマカロックを以てリカルドに對比し、機械の問題を別とし、「その他の點については彼の最も忠實な門下」(Ergang, op. cit. S. 59.)と評價してゐるのは、理論のもつ性格を看過するとき、如何に正しい解釋ができないかの證明であるといへる。

リカルドは一八二一年七月九日、マルサス宛ての手紙に於て、「マカロックは私の機械論の章

に對して特別にかつ猛烈に異論を唱へた。私が公表した見解とそれを公表した仕方とによつて私はそれを認めることによつて私の著書を打ち壊し、また學問に對して重大な害惡をもたらしたと彼れは考へてゐるのである。二三の手紙がこのことについて我々の間に取り交はされた。最後に、彼は機械使用の結果は總生産物の年々の量及び價值を減らすことのあるのを承認したやうに思はれる。これを認めて彼は問題を放棄した。蓋し、總生産物の減少した分量で同じだけの労働雇傭手段があると主張することは不可能だからである。この問題に關して私の説くところの眞理は私には絶對的に證明し得るものと思はれる。〔Letters of Ricardo to Malthus, ed. by J. Bonar, 1867, P. 184.〕と述べてゐるのであるが、(リカルドとマカロックとの論争については、小泉信三、リカアドオ研究、四八七—四九〇頁、参照) そのマカロックは上述の一八二五年の『經濟學原理』に於て、その第二篇・第四章を特に機械論のために充當してゐる。

マカロックによれば、機械の改良は、その效果に於て労働の熟練の改良に於けると等しく、同一時間内により多量の生産を可能ならしめるものであるが、機械の改良によつて同一分量の商品を生産するのに従來の資本の十分の一で事足りるならば、起るべき結果は、彼によれば、次の何れかである。

一 十分の九の資本が依然として同一商品の生産に使用される。蓋し、生産費の低下とともに價格は下落し、價格の下落は需要の増進をもたらし、その商品の生産は増大しなければならぬ。そして彼によれば、今日迄のところ労働及び費用を節約する新發明に基く市場の擴張がより多くの労働者を吸収したことは疑ひないことであり、また將來起るべき改良の結果が今日までのそれと全然異なるだらうことを結論する理由はすこしもないのである。

二 次に考へられるのは、上述の場合に於けるが如く、その商品の需要の増進しない場合である。そのときは、従來その商品の生産に使用された資本及び労働の十分の九は解放される。然しそれと共にその割合で、他の種類の生産物に對する需要が増大する。従つて特定の生産部門から解放された資本及び労働は、新しく需要をもつ他の生産部門に使用されることになる。何れにせよ、マカロックによれば、機械の使用は、一時的の影響は別として、労働者階級の不利益となることはないのである。かくて彼はリカルド批評を始める。

リカルドは、機械が使用されるのは、商品の生産費を減少するためではなく、労働を使用することによつて獲得すると同一又はより大なる利潤のためであると考へてゐるが、さうであるなら、機械使用の直接の結果が労働者にとつて有害であることは疑ひない。然し乍ら機械を使

用するのは利潤獲得のためではなく、よつて以て商品の生産費を減少し、より多くの分量を供給するためである。かくて、リカルドの原理によるなら、機械を新に使用する毎に貨物の供給の減少となり、従つて價格の騰貴をもたらさねばならぬであらうが、事實は、今日に到るまでそれと全く反對の結果を生じてゐるやうに、將來に於ても機械生産は商品價格を低下せしめるであらう。リカルドによつて假定された場合は、單なる想定にとゞまると云ふのである。かくてマカロックに於ては、機械は生産物を増大するために採用されるのであり、現在あるところの需要をより廉價で満足せしめようとするものである。従つて労働者に對してすこしも有害なものではなく、却つて極めて恩惠的なものである。マカロックの生産費は、勞賃に平均利潤を加へたものを初めからふくむのであつて、彼はリカルド労働價值説の修正の問題を問題としなかつた。これは彼の労働觀念の變改にもとづくものである。

我々はこゝに典型的な補償説をみる。既に彼の利潤論から推論できるやうに、彼は資本家的生産方法を然るものとして把握せず、之を單なる欲望充足經濟に還元し、以て機械生産は生産物を増大するが故に、萬人に福祉をもたらすものであると論じてゐるのである。

英吉利古典經濟學はリカルドに到つて階級對立に直面し、一八二〇年から一八三〇年に互る

間に於て、その學派の解體が行はれたのであつたが、その間勞資の對立は未だ必ずしも表面に現れてはゐなかつた。然るに一八三〇年に到つて事態は變化した。英佛に於て資本は完全にその地位をえた。かくて一八三一年リヨンに於ける最初の労働者騷擾事件、一八三八年から一八四二年にかけての英吉利に於ける最初の全國的労働運動等が擧げられる。これらの事實は經濟學に如何に影響したであらうか。

我々はオックスフォードのシイニオア教授(1790—1864)を擧げることができる。

シイニオアもその著『經濟學概論』Senior, An Outline of the Science of Political Economy. London. 1836. に於て、補償説を採用し、機械の採用が労働者にとつて有利なことを辯護した。然し乍ら、彼は次の二つの例外を認めた。

一、本來労働者の消費に充てられるべき商品を生産した労働者の中の若干が機械の建造に使用されるとき、——これはリカルドの例證の承認にはかならない。

二、機械そのものが然らずんば労働者の消費すべき商品を消費するとき、——これもリカルドが馬を以て説明したところを、機械に代置しただけであつて、いづれも資本のうち賃銀にむけられる部分が、機械の採用によりそれだけ機械の方に向けられて、賃銀に向けられる部分が

減つてゆく場合に他ならない。

リカルドはその機械論のなかで、この第二の場合に關し次の如く述べてゐる。

「一國の純収入のみならず、其總収入額も増加しながら、猶且つ勞働に對する需要の減少し得べきことに就いては、更に一の場合の注目すべきものがある。馬匹の勞働が人間の勞働に代用せらるゝ場合が即ち其である。假りに予が我農場に一百人の人を使用したものとすれば、而して若しも此中の五十人に給せられた食物は、之を馬の飼養に轉用し得べく、而して馬匹購入の爲め吸収せらるべき資本の利子を計算しても、猶ほ予に一層多額の原生産物收穫が提供せらるゝことを發見したならば、予に取つては、馬を人間に代用することが有利たるべく、従つて予は其通りにするであらう。併し乍ら、此事は勞働者の利益とならぬものであつて、予の收得する所得が予をして能く人馬を共に使用せしむる程に爾かく増大するにあらざる限り、人口は過剰となり、勞働者の状態は一般的に沈降することが明白である。〔經濟學及課税之原理〕岩波文庫、三九一頁」

シイニオアの認めた例外は、かくて既にリカルドによつて認められてゐるところであり、リカルドはこれ等の事情によつて起るべき勞働者階級の不利益を明白に認め、それを現實的なも

のと考へて、身自らオウエンの失業救済のための資金募集の委員會に参加したのであつたが、その後十五年にしてシイニオアはなほ其等の不利益を以て全く非本質的なものであり、實際的影響はなきものと説いたのであつた。即ち、機械の生産する商品が直接にも間接にも勞働者の消費に屬しないものなら賃銀は不變であり、勞働者の消費に關するものであるなら賃銀は騰貴すると云ふのである。

ひともし知る如くシイニオア經濟學の中心はかの節慾説にある。彼は利潤をたゞに資本家の「勞働」に引直すにとゞまらず、之を節慾といふ「美德」に還元した。この利潤は「節慾の報酬」であると云ふ思想は驚くべき大きな影響を今日に到るまで經濟學史上もつものであり、これを簡單にかたづけられることはできないが、利潤は云ふまでもなく、節約された資金が生産的に消費されて生れてくることは忘れられてならないであらう。然らざれば資本はまた單なる生活資料に解消される。而して興味あるのはシイニオア自身後に到り工場立法の實踐に身を投じたことである。このことは、彼自身その補償説を否定したことにならないであらうか。

經濟學は次第に無視しえざるまでに發達して來た勞働者階級の要求と一致しようとするに到つた。その代表者としてジョン・ステュアート・ミル(1806—1873)を擧げることができる。

ジョン・ステュアート・ミルは、彼の『經濟學原理』Principles of Political Economy, with some of their Applications to Social Philosophy. 1848. 第一篇・第六章に於て、固定資本及び流動資本について説明し、「固定資本のすべての増大は、それが流動資本を犠牲にして行はれるときは、尠くとも一時的には労働者の利益にとつて有害でなくてはならぬ。このことは常に機械にあてはまるのみでなく、よつてもつて資本が投ぜられてゐるすべての改良にあてはまる。即ち、資本は、それによつて労働の維持と報酬に向けられることが永久的に不可能にされる。」(Book I. Chap. VI. §2) と述べてリカルドと全く同様な例證をしてゐる。

ところでミルは次のやうな問題設定をする。農業資本家がより大なる收穫をうるために、技術的進歩にも拘らず従來通りの労働者を使用するものとするなら、その勞賃は何處から支拂はれることになるであらうか。農業資本家は、従來の賃銀にひけられたる額——例へば一、〇〇〇クォーター——を補充するためには借りるか何かしなくてはならない。「だが、この一、〇〇〇クォーターは既に等量の労働の維持のために向けられてゐるか乃至そのために規定されてゐる。それは新しい創造ではない。その使命は一の生産部門から他の生産部門へとたゞ變動したに過ぎない。假令、農業家はその不足を自づからの流動資本を以つて補ふにせよ、全體社會

の流動資本の缺如は依然償はれない。」(Book I. Chap. VI. §2)

ミルはかくて機械使用は労働者にとつて有害でないことと賛成しかねる旨を述べ、さうした教説は、生産物が低廉となればそれは増大した需要をその歸結としてもち、その生産部門に於て従來よりもより多量の労働を必要とするに到ると假定するものであり、斯かる事は事實ありうることはあるけれど、屢々反対作用によつて打消されるものであることを指摘する。例へば木綿工業には機械の發明によつて多くの固定資本が投ぜられ、それとともに流動資本も亦増大した。だが、この資本が他の仕事から抽出されたのなら、また高價な機械に投ぜられた資本に代つた基金が、改良の結果の追加的貯蓄によつて供給されたのでなくて全體社會の一般資本からもたらされたものであつたなら、移動のために労働階級にどれほどのよいことが生ずるのであるか。「一の全體としての労働者階級が、機械の採用乃至永久的改良への資本投下によつて、一時的に惱まされることのありえざることを明かにしようとするあらゆる試みは、必然的に誤謬であると考へる。」(Book I. Chap. VI. §2) と云ふのである。

かくてミルによれば、如何にも消費者は節約によつて他の商品に對する需要を増大するかも知れない。だが商品への需要は、労働への需要とは全く異つたことである。如何にも今や消費

者は他の商品を購入する追加的手段を有つであらう。然し乍ら、其等の他の商品を生産する資本が存在しない限り、このものは他の商品を造りださない。而して改良は、假令それが他の生産部門から若干の資本を吸収しなかつたにせよ、何等かの資本を解放するものではない。かくて他の生産部門に於ては想像されたやうな生産の増加、労働雇傭の増大は起らない。そして若干の消費者の側の増大した需要は、他方に於て、改良によつて過剰ならしめられた労働者の側の需要の中止によつて均衡をとられてしまふと云ふのである。(Book I. Chap. V. §2)

然し乍ら、ミルもリカルドに於ける如く生産に於ける改良が、全體としての労働者階級にとつて有害であると信ずるものではない。若しも技術的改良が大規模に急激に行はれるならば、或はさういふことがあるかもしれないが、——蓋し、この場合には既存の流動資本の固定資本化が必然的だから、——實際に於ては、改良はつねに極めて徐々にしか行はれず、かつ流動資本を實際の生産にむけることは殆どなく、流動資本は年々の増大から支拂はれるのである。「固定資本が非常に増大した場合に、その時その時で同様に流動資本が急速に増大しないといふやうなことは、假令あるにしても極めて稀である。」「固定資本がその流動資本との正しい割合をこえて増加するやうな國は恐らくないだらう。」(Book I. Chap. V. §3)

かくてミルによれば、技術的進歩に基く資本の移動に當つて、ある種の困難がないではないが、改良が一時的に全収益と全體社會の流動資本を小さくするときでも、それは永久的には兩者を増大せしめる方向に作用するのであり、利益は資本家により大なる利得としてか、又は消費者により低廉なる價格としてか、いづれかの仕方で流れ込む。何れにせよ、改良は増大した基金をつくり蓄積が起りうる。それ故に改良が普通行はれるやうに緩慢なテンポであるなら、改良が窮極に於て吸収する資本の大部分は増大した利潤とそれ自身がよびだした増大した貯蓄からひきだされる。(Book I. Chap. V. §3) のである。

即ち、ジョン・ミルの到達したところは、結局は補償説にはかならなかつた。彼が「固定資本がその流動資本との正しい割合をこえて増加するやうな國は恐らくないだらう」と云ふとき、彼は、「此等の二種の資本の割合が、有ゆる時代有ゆる國々に於て同一であるといふことが事實であつたならば、洵に其場合には、當然雇傭せらるる労働者の數は、國家の富に比例するであらう。併し乍ら斯る状態は、起りさうには見受けられぬ。」(リカード「經濟學及課税之原理」岩波文庫、三九二頁、参照)と云ふバートンと眞正面に對立する。問題が何故機械が採用されるのかといふことにまで溯るとき、我々はこゝでもミルの生産費＝利潤の概念を考へないわけにはゆ

かない。

ミルは云ふ、「假りに一物品Aが、一、〇〇〇磅に値する直接労働によつて生産されるとする。けれどもBが五〇〇磅に値する直接労働と五〇〇磅に値する機械とによつて作られる代りに、五〇〇磅に値する直接労働がこれも同じく他の五〇〇磅に値する直接労働によつて生産されたところの機械を用ひてCを作るとせよ。そしてその機械は製作に一ヶ年を要し、一ヶ年の使用で消耗し盡し、利潤は前と同様に二〇%であるとする。AとCとは等しき労働量によつて作られ等しき率で支拂はれたものである。即ちAには一、〇〇〇磅に値する直接労働が費へてをり、Cには直接労働は五〇〇磅だけ費へてゐるに過ぎぬが、然し機械の製作に費されたる労働によつて一、〇〇〇磅の値にせられてゐる。若しも労働が或はその報酬が生産費の唯一の構成部分であるならば、これ等の二物は相互に交換されるであらう。けれども事實果してさうであらうか。確かにさうではない。機械は一年間に五〇〇磅の出費によつて作られ、そして利潤が二〇%であるからその機械の自然価格は六〇〇磅である。即ち、一〇〇磅が追加されてをり、そしてこれはCの製造業者によつて彼のその他の経費以外に前拂され、且つ彼に二〇%の利潤を以て再拂せられねばならぬものである。それ故に商品Aは一、二〇〇磅で賣れるが、Cは永久に

一、三二〇磅以下で賣れることばなし。(Book. II. Chap. VI. §6)

彼は、かくリカルドの労働價值説の修正を踏襲して投下労働量が商品價值の規制者ではないことを説くとともに、獲得さるべき利潤が生産費の構成部分であることを認めてゐる。

リカルドは利潤の根源をそれは投下労働量によつて決定される商品價值から出てくるものと規定しながら、而も利潤量の大小が資本回収の速度の遅速によつて決定されるものと考へたために、投下労働量による労働價值説を貫くことができなかつた。平均利潤の法則と労働價值法則とは矛盾することになつた。ジョン・ステュアート・ミルに到るまで、マルサスもジェイムス・ミルもみなこの問題を解決できなかつた。リカルドに於て、生産費は一つには直接労働と蓄積労働とよりなり、他方には平均利潤をふくむものであつた。リカルドは、直接労働が造りだす價值が利潤と賃銀とに分割されると考へたが、このとき生産費にふくまれる利潤は個別利潤でなくてはならぬ。かくて彼は直接労働を賃銀におきかへ、賃銀と蓄積労働との和が生産費であり、資本の大小に應じて分配される剰餘は自然價格にふくまれるが費用にはいらぬと説いた。これによつて賃銀と労働量との區別は打消される。このことによつてスミスからリカルドへ、支配労働説から投下労働説への進歩は否定される。マルサスははじめから利潤を生産費にいれ、これ

によつて謂はゆる生産費説の循環論を生じた。彼に於ては、時間に基く利潤の大小ははじめから與へられたものであり、利潤の成立は不等價交換に委ねられた。J・S・ミルによれば生産費は主として勞賃であるが、彼は利潤をも亦生産費にふくめる。而して利潤は、交換の偶然事からではなく勞働の生産力から發生するものであり、それは勞働の費用によつてきまるものであつた。勞働の費用は、需給の法則に基く勞働の價值、勞働生産力による勞働の能率、勞働量に還元される生活資料の生産費の三者の函數であつた。我々はこゝに、直接勞働を賃銀とし、生産費説をとるミルをみるのであるが、而も、その「勞働價值説の僅か一步手前に佇立してゐる」(波多野鼎、價值學説史、第一卷、三一六頁)のを見する。蓋し、勞働の費用を現定する三者のうち、勞働の價值は不變であり、勞働者の生活資料の數量が一定である以上、生活資料の生産費は、勞働の生産力或は勞働の能率によつて規定される。結局、勞働の費用、従つて利潤は、勞働生産力による勞働の能率、即ち勞働者の勤勉と技術の状態によつて規定されるのである。

リカルドからミルに到るまでの躓きの石であつた「勞働の價值」を闡明して勞働價值説を以て剩餘勞働の性質をはじめて明かにし、可變資本と不變資本の概念を經濟學にもたらしたのはカール・マルクス(1818—1883)であつた。J・S・ミルの「經濟學原理」の出版された一八四八年には

マルクス主義は、それによつて基準的な文献を既に相ついで世に送りつゝあつた。即ち「哲學の貧困」は一八四七年に出版され、フリードリッヒ・エンゲルス(1820—1895)は既に一八四四年、「經濟學批判大綱」を「獨佛年誌」に寄稿して社會主義經濟學の基礎を築きつゝあつた。彼の「英吉利に於ける勞働階級の狀態」一八四五年が、「産業豫備軍」について語つたことは上述の如くである。「資本論」はトルソとして残され、「黨派的の惡憎と愛好とによつて掻き亂され、彼が影像は歴史の中に搖いでゐる」けれど、勞働價值説を論理的に展開して謂はゆる資本主義社會の運動法則を明かにした功績は何人と雖も承認せざるをえないところであらう。今、先きを急ぐ我々はこの派の機械論についてはマルクスの「剩餘價值學説史」第二卷のリカルド批評とエンゲルスの「反デューリング論」(改造社、マルクス・エンゲルス全集第十二卷、四四二—四四三、五七〇—五七二頁)或は「空想より科學へ」(岩波文庫、七三—七四頁)等に於ける叙述を指摘するにとどめる。「資本論」第一卷・第四篇・第十三章の叙述は餘りにも知られてゐる。

ゲルハルト・ハウプトマンが一八九二年に書いた戯曲「織匠」Die Weberが一八四四年、シムレジエンのオイレンゲベルグに起つた織匠達の一揆事件に題材をとつたものであることは周知のことである。この事件は上述したリヨンに於ける織物工の騷擾の獨逸的表現であつて、これ

についてはウ・ルフや、チムメルマンやメーリング等の考證の存することは、小泉氏の教へられるが如くであり、これについて「藝術家の洞察の歴史家として鋭かつた一例である」と評されてゐる。(小泉信三「師・友・書籍」昭和八年、二一〇頁)而も獨逸の經濟學者達はハウプトマンに遠く及ばなかつた。例へばヘルマン・ファン・マンゴルト或はウイールヘルム・ロッシュ、グスタフ・シモラー達の教説についてみるがよい。(Hermann von Mangoldt, Die Elemente der Produktivität der Arbeit. 8 Kapitel in "Volkswirtschaftslehre." 1868. Wilhelm Roscher, Über die volkswirtschaftlichen Bedeutung der Maschinenindustrie. in "Ansichten der Volkswirtschaft vom geschichtlichen Standpunkt." 3Aufl. 1878. G. Schmoller, Die Arbeiterfrage. Preussischer Jahrbücher. Bd. 14. 1864.)彼等はたゞ機械の「恩恵」のみを一面的に強調して補償説を支持したのである。

ところで、概言するならば、爾來獨逸を始めとする一般國民經濟學界に於ては、機械論なるものを正面から展開しなかつたか、——これは生産手段の價値の問題であり、利潤論にかゝはる、——乃至問題とするとすれば、それは謂はゆる産業豫備軍の理論の批評といふ形態をとつて現れた。例へばウ・ルフ對ゾムバルトの論争。(Wolf, System der Sozialpolitik. 1892. S. 258—259. Bonbart, Brauns Archiv. Bd. V—VI.)この論争は、上述せるマンシュタットの著書にも紹介されてゐるが、そ

の水準は極めて低いと云はねばならぬ。(Vgl. Manuwaedt, op. cit. S. 77—79.)例へばゾムバルトが、利潤量は結局に於て、勞賃に向けられる資本部分の絶對的大きによつて決定されるのだから、勞賃に向けられる資本部分の増大が「資本家的生産の目的にある」と述べてゐるが如き。

産業豫備軍の理論に關してはコンラード・シュミットの説がある。(C. Schmidt, Zur Theorie der industriellen Reservearmee. Sozialistische Monatshefte. 1904. Bd. 1.)シュミットは資本と人口とを切り離して問題を扱つてゐる。彼の説の特徴は、マルクスに於ける謂はゆる可變資本の不變化資本化の問題が直接的生産行程の問題であり、資本の流通行程については、これを滞りなくゆるものと同前提しておいて差支へないことを、否必要であることを理解してゐなかつたことである。フランツ・オッペンハイマーの産業豫備軍の理論に對する批評は有名である。彼は云つてゐる、「補償説の根據づけに對して畏るべき辛辣さを以てマルクスがなした致命的抗論に對して、市民的經濟學の補償説の主張者達を辯護しようなどといふことは、私には實際思ひもよらぬところである。……だが、根據づけの否定は未だその主張の否定ではない。而して完全な補償が起るといふことをミル、マカロック、トレンズ等が證明できなかつたと同様に、マルクスは、部分的な補償が起るのみだと云ふことを證明できなかつた。この證明のためには、兩黨派によつ

て用ゐられた演繹的方法では足りない。」と。(F. Oppenheimer, Das Grundgesetz Marx'schen Gesellschaftslehre. Darstellung und Kritik. S. 66.)

然らばオッペンハイマーは如何にして補償説を否定したであらうか。彼は大地所有による農民離村といふことを以て都市の過剰人口を説明した。この説明は、然し乍らリカルドに於けると同じく單に二人の労働者が一人の資本家を追ひかけるところに、資本關係を認めてゐるのであつて、このことはオッペンハイマー自身生活資料と労働者とを對立させてゐることを物語るものであり、未だ補償説の批評ではない、さきにオウエンについて述べたやうに彼は補償説をはつきりと肯定するのである。而して、資本の種々なる成分の生ける労働力に對する直接の關係を取扱つてゐる際、人口を農業と工業とに配分する問題を、突如としてこゝに持ち込むことは、まさに *sewaling* を問題の取扱ひ方である。

ヘンリーク・グロスマンは、その資本蓄積論に於て、「茲に論ずるところの、豫備軍の成立、即ち労働者の遊離は、機械による労働者の遊離とは、嚴重に區別されなければならぬ。マルクスが『資本論』第一卷の實證的部分に於いて、(第十三章、機械と大工業) 記述するところの、機械による労働者の遊離は、*Prä*(生産手段)の*A*(労働力)に比しての増大によつて惹き起された一

つの技術的事實であり、この事實はかゝるものとしては何ら資本主義の特殊なる現象を表はしてゐない。如何なる技術的進歩も、労働がより生産的となること、それゆゑ一定の生産物に比して労働が節約され遊離されることに基く。機械は労働を驅逐するといふことは争ふべからざる事實であつて、それは何ら特別の「證明」を要しない。蓋し、労働の節約をする生産手段としての機械の概念からして、この事實は當然生ずるところであるからである。かゝる労働の遊離は、如何なる生産方法にあつても、社會主義的計劃經濟にあつても、また、この經濟が技術の進歩を利用するかぎり行はれるであらう。この實狀からして、資本家的生産方法の崩壊をこの「自然的」事實から誘導することは、マルクスにとつて不可能であつたことがわかる。」(グロスマン、資本の蓄積並に崩壊の理論、有澤・森谷譯、一六二頁—一六三頁)

然し乍ら、機械は如何なる社會形態のもとに於ても労働者の遊離と必然的に結びつくといふ推論は、問題を全く技術的に提出してゐるものである。『資本論』第一卷・第四篇・第十三章はグロスマンの云ふ如く、單なる「實證的部分」ではなく、資本制生産方法の崩壊を論じた資本制蓄積の一般法則の章と結合して理解されねばならず、この意味に於てグロスマンは、彼が據るところの『資本論』の方法論を十分心得てゐないやうに思はれる。

§ ジェイ・エイ・ホブスン

英吉利に於ては、その後何と云つてもアルフレッド・マーシャル(1842—1924)の「經濟學原理」Principles of Economics, 1890. 8th ed. 1920. が基準的であり、その第四篇・第九章は機械に關説してゐる。彼はそこで分業と機械發達の關係につき、機械は純然たる手工熟練に代り、かくて分業の利益を若干減するが、その範圍を擴大すること、複雑な機械は判斷と一般知性を高めること、機械は人間筋肉の緊張を救ひ、これによつて作業の單調が生活の單調を伴ふのを防ぐこと、等、機械に關する樂觀的見解を述べてゐる。(Cf. A. Marshall, Economics of Industry, BK. IV. Chap. IX.)

マーシャルの後を繼ぐものにシドニー・チャップマンがある。彼は「労働に對して機械を代位せしむる效果」を論じ、機械の自然征服の作用を述べ、その労働の正確速度についての優秀性を指摘し、「何の生産にしても、夫が労働を節約する機械の採用に依つて容易にされる場合には節約される労働は、從來凡ての働く人が當時獲得に成功してゐた物を生産するのに忙殺されてゐたから手に入れる事が出来なかつた他の財を供給するのに代用され得るし、現に使用されて

ゐる。」「從來より生産的な方法が採用されると、殊に急激に採用されると、職工に依つてはしばらく職を失ふ者もあるかもしれない。然し新發明は、いつもさうとは限らぬが、原則としては徐々に採用される。」と云つてゐる。(チャップマン、經濟學原論、犬丸秀雄譯、第五章、參照)かくてこゝにはジョン・ミル以來の傳統依然たる補償説が支配してゐる。

ウェット夫妻の「産業民主制論」Industrial Democracy. London. 1897. もその第二篇第八章「新工程及び機械」に於て、機械と労働組合との關係につき、新機械の採用に對し、労働組合が最初否定的であつたのが、次第に肯定的になつてきた次第を詳述してゐる。ウェットの論述は、理論的に明確と云へないが、この間の事實をよく述べてゐる。

我々は、英吉利に於ける機械論として、ジェイ・エイ・ホブスンの「近代資本主義發達史論」J. A. Hobson, The Evolution, of Modern Capitalism. London. 1st ed. 1894 1926. Rev. ed. を逸することはできない。ひともし知る如く、ホブソンは終始消費の觀點に立つてをり、そこには理論的に種々な問題が発生しうるが、上述した如く、機械に關するあらゆる問題が殆ど剩すところなく述べられてゐる。而も彼のえた結論は殆ど事實を裏切つてゐない。

ホブソンは機械の一般的効果は、能率の個人的差異を増加するよりは寧ろ減少せしめるにあ

ることを述べ、「婦人や小兒の弱い筋力や智能に對する機械の適應性」「男子労働を婦人労働に依つて驅逐せんとする機械工業の傾向」(J. A. Hobson, op. cit. P. 349—350)を指摘する。

労働日の延長、労働の強化については、次の如く述べてゐる。「若し我々が、近代産業社會下に於ける機械生産の全領域を考察の下に置かならば、工場制度の一般的結果は、労働日の平均的長さを増す事であつた事には論議の餘地がない。この事は、そのほんの一部が、労働者が以前と同一量の日々の肉體力の支出を賣るやうに誘惑せられ得るといふ事實に歸し得られる。然るに多くの場合、労働者の體力の支出の爲に、ヨリ長い時間が要求されるのである。同じ力を及ぼした今一の誘導原因は、労働者がヨリ長時間働く事によつて實現される機械の經濟である。平均労働日を延長せしめたのは、是等二つの力の合同作用である。然し乍ら、若干の附隨的誘導原因、就中、安價な燈火が用ひられるに至つたことも亦注意に値する。……今や自然の休息、即ち夜の一部分も労働日に附加へられるに至つた。勿論、労働日節減の爲に作用する有力な社會的諸勢力はある。そして是等の勢力は、多數の産業に於て、間接ではあるが有力な援助を機械から受けてゐる。機械が労働日の長さに關して、この對立する傾向を發展せしめたと云つて差支へないと思ふ。機械の最も直接な經濟的影響は、労働時間の延長を助長することであ

る。何故なら、疲勞する事を知らず、労働者の怠惰によつて動力を浪費する機械は、連續的労働を促進するからである。然し高度に組織された機械の速度と複雑の増大が、人間の精力に課するひどりが益々加はり、増加した人間の努力を一定時間内に壓縮するに至るや、個人の爲に労働日を制限する事が眞に有利であるといふ事ははじめて明らかになり出した。」(J. A. Hobson, op. cit. P. 340—341)

斯くてホブソンは、「時間賃銀の向上は、必らずしも、努力の條件を以て測定される労働價格が引上げられた事を意味するものではない。ヨリ短い時間に負はされる、ヨリ緊張した労働は、時間單位につきヨリ高い貨幣賃銀を取得するであらう。が併し、一努力單位についての價格はヨリ低いであらう。機械の最近の進化の一般的傾向は、労働を壓縮し、強度化する事であつた事は認められた。」(P. 369)と述べ、「労働時間の短縮と機械の改良は、その結果として労働時間一單位當りの勞役の増加を伴つた。」(P. 339)といふ結論を例證する。

而して、ホブソンは労働及び消費の愉快及び個性を極めて尊重するものであり、これに對する機械の影響を次の如く述べてゐる。「労働者に對する機械の君臨は、急速に仕事を反覆し得るといふ單なる能力にプレミアムを附して、諸種の労働者達をして以て同一の方法で同一の仕

事をする事を強要し、労働に於ける個性を破壊しつゝあるが、それと同じ方法を以て、消費者に就ても、機械生産物は、消費に共通な性質を押しつけ、以て消費者の個性を蹂躪する傾向がある。」(P. 425)

然し乍ら、彼は、ギルド社會主義の一派——例へばアーサー・ペンティ、(Aus dem Wege zu einer christlichen Soziologie. übersetzt von O. Feinert.) スターリング・テイラーの如き、謂はゆる中世派のもの——とは異り、機械生産に對する感傷的なる藝術的否定を敢てしなかつた。即ち、「労働に強度と單調を添へ、室内坐業に従事する労働者の數を殖やし、絶へず増大する労働人口をして、人口稠密で非衛生な都市に生活せざるを得ざらしめる機械の影響に留意する時、機械が労働階級に與へる眞正の恩恵は疑はしいものとはなるが、労働者慰樂の客觀的測定を以てすれば、機械の發達は機械労働者間の物質的慰樂標準の改善を伴つた事は明かである。」「増大した労働強度の影響及び機械の間接的影響を割引して考へても、數多の例證の明示する處では、機械操作者は、彼等が其地位を奪つた手工労働者に比して、食物、衣服、住居も良くなり、機械の能率及び複雑性の増進は、すべて労働者の實質賃銀の向上を伴つた。最良の機械は、それが經濟的に使用されるためには、その機械で共に労働する労働者間の相當の生活標準を要求

する。そして我々は、各産業に於ける機械が將來發達するにつれ、この生活標準の向上を豫想して然るべからざる。」(P. 373—374)云々。

然し乍ら、ホブソンは、「若し機械發達の傾向が、作業のヨリ大なる割合を吸収することであるならば、労働者階級將來の大きな希望を、機械産業に於けるこの高給賃銀獲得運動の上にかける事は不可能な話である。」(P. 375)と述べて、過剰人口の存在は、折角の高率賃銀をも引下げて仕舞ふべきことを推論する。

ホブソンは、「近代資本主義發達史論」第十二章に於て、補償説を取扱つてゐる。彼は、機械の採用は「それが若し十人から労働を奪つたとするならば、却つて千人のために労働を備へる」といふレオネ・レヴィの説を紹介し、(P. 319)「經濟學的理論がこの先驗的樂觀主義に對して、どこまでも反對するといふことを觀察せねばならぬ」(P. 319)と云ひ、「英吉利に於ける大多數の織維工場、木綿織物、毛織物、大麻その他に於ける近代の改良は、雇傭の絶對的減少といふ事實を齎した」(P. 323)と述べる。然し乍ら、「もし生産額が増大したならば、採取産業、運輸、その他種々な分配過程に於ける雇傭は財貨及び機械の製造の際に於ける雇傭の減少を補償するかも知れない。」(P. 323)而して彼は、「植字及び印刷に於ける新式の労働機械の採用は、増大せる労働

者を雇入れる程、それ程大なる事業の擴張を齎した」(P. 323)事實を指摘してゐる。(Cf. J. A. Hobson, *The Science of Wealth*, 1911, P. 132-133)かくて、彼のえた結論は、「社會に於ける成員の數が増加する限り、個々人が彼等の現在の欲望を益々完全に満足させようと欲し、且つ絶えず新らしき欲望を發展させ、ヨリ高度の、更らに複雑なる消費の標準を形成してゆく限り、機械が假令「製造業」産業に於いて雇傭の割合を減少せしめる傾向があると云へ、勞働に對する需要に對し、純粹の減少を惹き起こすやうな結果になる、といふ結論を正當化すべき何らの證據はない。然し、そこには雇傭をヨリ益々不安定にし、所有權をヨリ以上に不確かなものにし、そして市場價値をヨリ不規則に變動せしむる傾向があるといふことを信すべき確乎たる理由がある。」(J. A. Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism*, P. 334.)といふにあつた。

然し乍ら問題は資本主義社會を前提としてゐる。社會に於ける成員の増加は、消費即ち貨幣の増加であり、勞働に對する需要を増加せしめるとは云へないであらう。人口の増加は資本の増加ではないから。ホブソンは、資本についてどう考へてゐるのであらうか。彼は、「賣れる財貨の生産を助成するだけで充分の用途が見出せるのに、それ以上の資本を餘分に造る傾向ある所得分配に原因する所の、絶えず消費を超過しようとする生産傾向は、現下一般の經濟的機曾不

均等の不可避の報酬である。」(『近代資本主義發達史論』改造文庫下巻、三九八頁)と云ひ、「少額の所得より、多額の所得の方が、そのヨリ多くの割合が貯藏されるが故に、所得の不平等は貯藏にとつて好都合であるといふことは認められてゐる。それ故平等化の最初の結果は、所得總數の中、貯藏される割合が減じて消費される割合が増す事になるであらう。併しさうだからと言つて決して貯藏の量及び新資本の積立が、絶對的に減少する必要があるといふものでもなければ、又さういふ筈のものでもない。何故なら、消費割合の増大は、資本及び勞働の現存供給量を、ヨリ充分にしてヨリ規則的に使用することをその第一効果とするであらうから。資本に對するこのヨリ大なる需要は、資本の現存額が、以前よりは高くさへ貯藏率によつて強調される事を、必ず要求するであらう。」(『近代資本主義發達史論』改造文庫下巻、四〇〇頁)と述べる。即ち、彼によれば消費割合の増大は、資本及び勞働の現存供給量をより充分により規則的に使用することになるといふのであるが、このことは資本として單なる生活資料が考へられてゐて、資本としての生産手段といふものがないことにならないであらうか。原始的な産業社會に於ては、其等〔賃銀・利潤・地代〕は、生産物を盡くすかも知れないが、近代の條件のもとに於ては、〔三〕要素の協働は單なる維持に必要とせられるものを遙かに超過した生産物を生じる。この超過又は

「剰餘」は適當に割當てられた分配によつて産業制度の發達を育成するに用ひられる。或はそれをとるに十分の力ある何等かの要素の所有者に無駄な過剰支拂として入ることが出来る。」(J. A. Hobson, *The Science of Wealth*, 1911, P. 160)と述べてゐるのは、このことを證明するものであらう。これはスミス以來の生産費説であるが、彼はつひに販路の理論をとるものゝ如く思はれる。もし、生産力が消費者の増大する需要に適合する産業に分配されてゐさへすれば、内地市場へ商品を提供することに使用され得る資本と労働との量に、必然的な限度はないのである。(Hobson, *Imperialism. A Study*, New York, 1902, P. 32)「何物にせよ生産されてゐる物は、若くは、生産され得る物は消費され得るであらう、……生産される凡ゆる事物と共に消費力は生まれる。そこで、若し消費され得ない商品があるとすれば、また若しも、その生産物が消費され得ないために充分な使途を見出し得ないところの或る量の資本と勞力とがあるとすれば、この矛盾した事柄の唯一の可能な説明は、消費力の所有者が商品に對する有效な需要のうち、その消費力を使用することを拒むことである。」(Hobson, *Imperialism*, P. 87)かくて、資本の蓄積も必然性をもつたものではなくなる。機械は非難される。

ジェイ・エイ・ホブソンの斯かる見解は終始一貫せるところであつて、「あらゆる經濟上の證據

は、合理化が、雇傭の正味の減退、熟練労働者に對する大部分の不熟練労働者の代置、及び資本の比例的預け前を増し労働のそれを減する生産物の分配を伴ふのを示す」(P. 90)ことを説いた比較的最近の著述『合理化と失業』J. A. Hobson, *Rationalisation and Unemployment*, London, 1930. も、「もしあらゆる合理化された産業が高賃銀政策をとることに一致できたなら、生産者と消費者との均衡を償ひ、市場の一般的擴張を確保することを援助することによつて各が利得するであらう」(P. 88)と云つてゐるのである。*

* 斯かる見解は相當に多い。例へば「繁榮の眞の秘訣は、組織的な物價の低減と、住民の各層に於ける生活の向上によつて、内國市場を絶えず保護奨励してゐることにある」(「マネジメント社調査部産業合理化研究科、第二輯、一〇八頁、昭和五年」)の如き。だが、資本主義經濟に就て、價格の低下と大衆購買力の増大とは一致しうるであらうか。

また、例へば昭和八年九月二日の『東洋經濟新報』は、「機械の改良は生産の過剰と失業者とを増加する乎」といふ「寄書」を掲載してゐる。それは「機械の改良によつて生じた生産物の増加をして多々益々辨ぜしむると同時に、失業者を生ぜざしめるが爲めには、如何なる政策を探る可きである乎」と稱して三つの政策を教示してゐる。第一及び第二の政策は、要するに生産物を廉價にし一般購買力を増進せしめよと云ふことで、第三は労働時間を短縮しつゝ失業者を吸収するやうにせよと云ふことであつた。この論文には、次の如き説がなされてゐる。ホブソンの理論は斯かる形態で

再生する怖れがある。「現在の社會に在つては資本に利息がある結果として資本家に於て……生産上の餘裕を占有して勤勞者に分配せず、勤勞者をして昔ながらの長時間勤勞せしむるから、人力が機械の改良によつて節約せられた丈は失業者を増加せざるを得ぬのである。」「折角に機械の改良によつて生産が増加せられても、それが勤勞階級によつて所得せられずして資本階級によつて壟斷せらるゝのは、資本と勤勞とが結合して生産した生産物の分配に際して資本階級が強く、勤勞階級が弱いからである。而して何故に獨り、資本側のみが強いのかと云へば、資本側に於て獨占權を占有して居るからである。」「獨占權及び特權を生じたから……資本を獨占するに至つたのである。」「これは理論的には立派なタウトロギーではないか。こゝに生産と分配との絶對的切斷がある。」

§ レーデラーとブウニアチアン

歐洲大戰以後に於ける資本家社會の特征的な構造的變化、即ち、慢性的な不況と構成的失業は周知のことに屬する。このことについては既に多數の人によつて指摘されてゐる。「戦前失業は既にあらゆる資本主義國に知られてゐた。然し、失業者数は今日の標準から判斷すれば、全く小さかつた。失業は産業國に於て慢性的疾病であつたが、それは決して、慘な割合に達することはなかつた」(Wojtinsky, op. cit. P. 19)のである。

北米合衆國に於ける工業生産の發展 (一八九九—一〇〇〇)

年 號	雇 傭 人 員	生 産 量	一人當り生産高
一八九九年	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
一九〇〇年	一〇五〇〇	一〇一〇〇	九六・二
一九〇一年	一一〇〇〇	一一二〇〇	一〇一・八
一九〇二年	一一八〇〇	一二二〇〇	一〇三・四
一九〇三年	一二三〇〇	一二四〇〇	一〇〇・七
一九〇四年	一一七・五	一二二〇〇	一〇四・〇
一九〇五年	一二七〇〇	一四四〇〇	一一三・三
一九〇六年	一三五〇〇	一五四〇〇	一一四・〇
一九〇七年	一四一〇〇	一五三〇〇	一一〇・八・五
一九〇八年	一二七〇〇	一二九〇〇	一〇一・五
一九〇九年	一四五〇〇	一五九〇〇	一〇九・五
一九一〇年	一四九〇〇	一六二〇〇	一〇八・七
一九一一年	一五〇〇〇	一五五〇〇	一〇三・四
一九一二年	一五六〇〇	一七九〇〇	一一四・六

年 號	雇 傭 人 員	生 産 量	一 人 當 り 生 産 高
一九二三年	一〇〇・〇	一〇〇	一〇〇
一九二四年	九〇・三	九四	一〇四
一九二五年	九一・四	一〇五	一一五
一九二六年	九二・〇	一〇八	一一七
一九二七年	八八・七	一〇六	一二〇
一九二八年	八六・四	一一二	一二九
一九二九年	八九・八	一一九	一三三
一九三〇年	七八・〇	九五	一二二
一九三一年	六六・四	八〇	一二〇
一九三二年	五五・四	六三	一一三
一九三三年	五九・五	七六	一二八

(一九二三—二〇〇)

一九一三年	一五九・〇	一八五・〇	一一六・三
一九一四年	一五六・二	一六九・四	一〇八・五
一九一五年	一六〇・〇	一八八・〇	一一七・四
一九一六年	一八七・〇	二二三・〇	一一九・二
一九一七年	二〇四・〇	二二四・〇	一〇九・八
一九一八年	二一〇・〇	二二〇・〇	一〇四・七
一九一九年	二〇四・四	二一三・七	一〇四・五
一九二〇年	二〇五・五	二二一・四	一〇七・九
一九二一年	一五八・二	一六九・七	一〇七・三
一九二二年	一七二・九	二二二・二	一二八・五
一九二三年	一九六・七	二六〇・七	一三二・五
一九二四年	一八四・〇	二四四・七	一三三・〇
一九二五年	一八八・九	二七四・六	一四五・四
一九二六年	一九一・一	二八四・二	一四八・七
一九二七年	一八六・四	二七八・七	一四九・五

ウ・イチンスキーが示す合衆國に於ける工業生産の發展に關する右の表をみれば想半ばにす
るものがあらう。(Woytinsky, op. cit. P. 34. P. 41. P. 51.)

一九二三年から二七年への景氣上向の年に於てさへ、合衆國の労働市場は、機械化のために
工場、鑛山、鐵道に於て百二十萬、農業に於て百萬の過剰人口を生じた。同時に人口増加によ
る三百萬の新労働力が供給され、そのうち約二百十萬が「新産業」即ち勞務、商業、交通に採
用され約三百萬が一般的福祉のうちに構成的失業軍を構成したのであつた。(Vgl. H. B. Butler,
Probleme der Arbeitslosigkeit in den Vereinigten Staaten. Internationales Arbeitsamt, Studie und
Berichte. Reihe C. Nr. 17.) このことによつて合衆國で技術的失業に關する論争の起きたことは
ケラーに關して後に述べる如くであり、St. Chase, Men and Machines, 1929.; A. Dahl-
berg, Jobs, Machines, and Capitalism, 1932. の如き著書が續出した。かうした事柄は、多か
れ少かれ他の國にも見られるところで、——(例へば獨逸の事情の卑近な紹介は Kuczyński, Jürgen u.
Marguerite. Die Lage des deutschen Industrie = Arbeiters, 1931. 上述の「ネジメント社調査部」産業合
理化研究資料、第二輯、『労働階級から見た産業合理化』昭和五年等、Woytinsky, op. cit. S. 78ff.)——
英吉利に於いては一九三四年から三五年にかけて多くの著書が現れた。獨逸に於てこの問題を

まづ指摘したのは、一九二七年のバークのキールに於ける講演であると云はれてゐるが (Birk,
L. V. Technischer Fortschritt und Ueberproduktion. Kieler Vorträge. Jena, 1927.) あたかも百年以
前に於けると同じく、苟も事實を事實として認める學者の科學的良心をゆり動かさずには止ま
なかつた。

極めて大きつばに云つて、補償説には、機械によつて驅逐された労働者は機械の製造に於て
補償されることに力點をおくものと、生産物の低廉による貯蓄によつて補償されることに力點
をおくものと考へられるであらうが、この後者は、交易經濟に於て購買力の全量は破壊されえ
ない、過渡的な攪亂をもたらすかも知れないがそのときどきに購買力の推移があるのみで均衡
は再び回復されるといふのである。レーデラーは一九三一年かの「技術的進歩と失業」に於て
「この考へ方を私もこれまで正しいと考へてきた。それは本質上靜態の基礎觀念にもとづいて
ゐる。こゝではこの考へ方は全體過程を把握せず、そのうちに流通過程の全要素が顧慮されて
ゐないことが示されねばならぬ。」(S. 5.)ことを指摘し、一步の前進を示したのであつた。

* レーデラーはその著の序言でバートン、リカルド、マルクスを擧げて補償説批判の先驅的役割を認

め、「この研究は近代理論の問題設定から出發するものであり、これが初めて作つた思惟の補助手段を用ゐる」ものであることを述べてゐる。即ち彼は一般均衡理論の思惟方法のもとにこの問題を把握しようとする。Vgl. Marschak, Technischer Fortschritt und Arbeitslosigkeit, Gesellschaft, 1932. G. Grdlic, Rationalisierung, Arbeitslosigkeit und Arbeitszeitverkürzung. Berlin. 1935. S. 44—47) グルチックは云ふ、「レーデラーは合理化と失業の問題の光りに於てみる、この故に彼は、合理化が『靜態的』及び『動態的』といふ二つの根本的に異なる體系に於て如何に働くかを研究せんとする。」と。こゝに諸々のはかに片づけることのできない問題を生ずる。

レーデラーの説は要約すれば次の三つに歸着する。

一、ある生産部門に於ける技術的進歩は、他の生産部門からの資本の移動を必要とし、そのことは後者に於ける資本缺乏、従つて労働者の解放をもたらす。

二、技術的進歩によつてえられる生産者の利潤と消費者の貯蓄とが消費財の購買にむけられるなら、それは解雇された労働者の以前の需要にとつて代り、彼等を投げだしたまゝで再生産は行はれる。

三、技術的進歩による生産者の利潤と消費者の貯蓄とが生産財の生産にむけられるとき解雇労働者は再び吸収されるかの如くであるが、そのためには新生産財を生産する生産財が既に存在したまゝで行はれる。

在してゐなくてはならないのであつて、——このことは事實不可能である、——然らざる限り、従來雇傭労働者にむけられてゐた資本部分は新生産財の生産に必要な生産財にむけられ、こゝでも資本家及び消費者の需要は、解雇労働者の嘗ての需要にとつて代り、再生産は後者を投げだしたまゝで行はれる。

レーデラーは近代資本主義に相應する動態的體系の特色を合理化による過度に早い經濟生活の變革、それによる大なる資本破壊にみるのであつて、合理化による失業が一時的であるか否かといふことを技術的進歩の行はれるテンポにかゝはらしめるのであつた。このレーデラーの説に關聯して擧げられるのはヒンネタールの補償説論である。ヒンネタールは補償説の反對者ではないけれど、それが今日の、大戰後の獨占資本主義の構造に妥當するや否やを問題にする。即ち、彼によれば、技術に關して合理化は積極的な成果をもたなければ意味がない。「だが労働の供給と人間の仕事の可能性と云ふことについて同じかどうかは別の問題である。それはさうでありうるけれど、さうでなければならぬことはない。過去に於てさうであつたにせよ今日同じ程度にさうでないなら、矛盾は不斷に深まりゆく研究に基礎づけられた益々急速となりゆく進歩のテンポと、このテンポに同じ歩調でついてゆくことのできない意識的或は無意識的に

増大してゆく人間の不氣嫌と無能力との間にあるのである。」(H. Himmethal, Kompensationstheorie, Technik und Wirtschaft, Jahrg. 25, Heft 10, 1932.)かくて彼は、技術的進歩によつて、既存の資本が單に消耗によつて減價するのみならず、驚くべき短期間に廢棄消耗されることを指摘するのである。(Vgl. G. Grdlic, Rationalisierung, Arbeitslosigkeit u. Arbeitszeitverkürzung, 1935, S. 47—48.)

レーデラーの補償説批評に對しては、いまさらの如く多くの國民經濟學者によつてその反批評がなされた。

ニコラス・カルドアによれば、レーデラーの説はある種の技術的進歩が失業と不況をもたらしすことを指摘したにとゞまる。而もレーデラーはその結果を不可避的なものと信じてゐるかの如くである。レーデラーは技術的進歩のうち勞賃部分に基くものと然らざるものとを區別しえなかつたために、技術的進歩と失業といふ原因結果たることを必要としない二現象を理解できなかつた。この二つのものは、資本の側からにせよ勞働の側からにせよ、價格機構への獨占的干渉といふ第三の原因によつて起りうる。技術的進歩は暫定的な秩序違和をもたらしうる。それ故、技術的進歩が速かであればある程、價格機構はそれだけ適應性 Flexibility を以て均衡をたもつことができるやうになつてゐなければならぬ——と云ふのである。(N. Kaldor, A case

against technical progress, *Economica*, May, 1935.)

カルドアの如く、技術的進歩のうち勞賃部分に基くものと然らざるものとを區別せよと云ふことは、技術的進歩が勞賃部分を犠牲とすることなく、たゞ資本の負擔に於てのみ行はれることを認識せよと云ふことであり、それは、最早資本を資本として把握しないことになる。また失業を價格機構への獨占的干渉といふ第三の原因に求めることは、換言すれば、例へば勞働組合なる獨占的干渉が不當に勞賃を釣上げるために失業は生ずるといふことであり、あらゆる獨占的干渉を排して價格機構の適應性を説くことは、即ちかの經濟的自由主義の要求にほかならない。

ブウニアチアンのレーデラー批評は、現代に於ける典型的なる補償説である。

ブウニアチアンは、まづ、機械の採用によつて勞働者が節約されるにしても、彼等はその機械の製造と維持とに仕事を見出すことができるといふことを固執する。

機械が採用されて解放された勞働者がその機械の生産のために必要とされるといふ説は、機械製造工場が未だ全然分業に基いてゐて、機械を製造するために機械を用ひなかつた時代に相應するものであつて、かつ勞働を節約することがもともと技術的進歩の本質なのであるから、

機械の製造のために必要な労働者に對する需要は、解放された労働者に對する需要より小でなくてはならぬ。また、機械の製造に必要とされる労働者はその機械の採用によつて解放された労働者とは全然異なるものであらうことは言ふまでもない。

さてブウニアチアンによるも、労働の節約は技術的進歩の本質に屬するが、かく解放された労働者は、彼によれば再び吸収されねばならないのである。即ち、技術的進歩による労働生産力の増大は生産額の増大と價格の下落となつて新需要を喚起する。たちいつて云へば、生産額の増加價格の下落は解放された労働者に仕事を與へ、原料、補助原料に對する需要を喚起し、こゝにも補償が行はれる。増大した生産物の運送や配給に、労働力を必要とすることも忘れてはならぬと云ふのである。

機械生産物は云ふまでもなく、それが駆逐した同種類の手工生産物より低廉である。従つて生産額が同一の場合には労働節約が行はれるけれど、機械生産物の生産額は手工生産物の生産額より遙かに大である。それ故ブウニアチアンの云ふやうに、あの生産部門に於て機械が採用されれば、その生産部門に機械・原料・石炭等の生産手段を供給する生産部門に於ても生産が増進する。また機械組織の發達とともに、利潤及びそれを代表する生産物の分量が増大し、資本

家階級の奢侈が増進し、これに關聯する生産が増大する。その他瓦斯施設、鐵道運輸等の新労働部門が出現する。加ふるに技術的進歩が行はれても資本の總額にして十分増大するならば、一定の産業部門に於て勞賃に向けられる資本部分は同時に増大することができる。即ち雇傭労働者は増加しうるのである。このことは補償説が正しいからではなく、新追加資本の流入に原因するのである。機械による労働者の驅逐は追加資本によつて蔽はれるけれど、その作用は廢棄されることはないのである。

追加資本による労働力需要の増大と、機械による労働者の驅逐と、いづれの傾向が支配するかは、資本の發展段階と産業の如何によつて異なるのであり、これについて決して一般的な論斷を下しえない。

問題になるのは獨占資本主義の段階と農業とである、蓋し、資本の獨占的段階に於ては資本の集中が激しく行はれるが、それはそこに特徴的な信用と競争とによつて社會全體の資本の大きの積極的増大にかゝはらない。社會全體からみて、まさに富の固定化が行はれる。而も、集中は資本の有機的構成の高度化をもたらす。かくて獨占資本主義の時代には産業合理化が強化され、資本蓄積のテンポが技術的進歩のテンポに及ばず、構成的失業軍が存在するのである。

農業に於ては、機械の採用と同時に新たに開墾される地積が著しく増大する場合は別として、機械は工業に於けるが如く、單に労働者を相對的に過剰ならしむるのみならず絶對的に過剰ならしむる。即ち工業に於ては資本のうち生きた労働に向けられる部分に對する機械原料等に向けられる部分の相對的増大は、前者の絶對的増加を伴ひうるわけであるが、農業に於ては労働過程と土地との關聯の密接なために、土地面積の増加なき限り、労働者の使用に限界があり、農業への投資が耕作の集約的擴張を目的とする限り、原則として資本の勞賃部分の絶對的減少をもたらすのである。

さて、ブウニアチアンのレーデラー批評であるが、彼は、技術的進歩が行はれば資本は他の生産部門から吸収せられて、資本の缺乏を生ずるといふ説に對しては、それはあくまで私的經營の立場に立つ議論であつて、社會全體からみるならかゝる富の固定化はありえないと云ふのであるが、レーデラーの説はそれが上述したやうな資本の獨占的段階に於て説かれたこと故に極めて意義深きものであることが、ブウニアチアンには認識されてゐない。彼は結局、生産物の價格下落による消費者の貯蓄と技術的進歩による企業家の特別利潤とは、何れも他の種類の生産物への需要となるか、或は新生産手段への投資となるべく、それは勞働力に對する追

加需要たることを強調するのであるが、既述の如く、新生産手段即ち機械をつくる機械は無償で手にいれることはできないのだから、資本はそれだけ勞賃に向けられる部分から機械に向けられねばならず、また機械の價値が解雇された労働者の勞賃と一致しなくても、即ち前者が後者より小であつたにしても、「解放」される資本部分は、解雇された労働者に比すれば言ふに足りない少數の労働者の雇傭に宛てられるに過ぎず、而もその資本部分そのものがまた機械原料等に向けられる部分と労働者の雇傭に向けられる部分とに分たれねばならないのである。

ブウニアチアンはなほこの論文に於て、技術的進歩と過剰生産との關係の問題にふれてゐる。これは、こゝで取扱ふべき限りのことではないけれど、技術的進歩と失業との關係に於て單に肯定的側面しか理解しなかつた彼は、當然この問題に於ても同様の論理を以て、技術的進歩はひとへに生産費と販賣價格の低下を可能ならしむるもので、過剰生産をもたらすとはまさに正反對であることを論じてゐる。かくて技術的進歩は總消費の増加と經濟活動擴大のための重要な要素なのである。生産制限を以てする恐慌對策は彼の理論と正面に對立する。歴史は彼を否定するものと云はねばならない。

§ 現代獨逸經濟學の機械理論

我々は最近獨逸に於てグルヂックの『合理化、失業、労働時間短縮』Gojko Grdijic, Rationalisierung, Arbeitslosigkeit und Arbeitszeitverkürzung. Berlin. 1935. なる書をえた。グルヂックの書は、その標題も示す如く、獨逸に於て直接合理化の結果である八十萬から百萬に及ぶ失業者に對し、労働時間短縮即ち一週四拾時間労働制を以てその對策とする説——例へはライバルト(Die 40-Stunden-woche. hrsg. von Thodor Leipart. Berlin. 1931.)の如きが對象に考へられてゐる——に對し、抑々合理化は失業をもたらすかどうか、また労働時間短縮はその歸結たりうるか否かを、「純理論的に」(S. 18)明かならしめんとするものである。これは最新型の、そして相變らずの補償説の一つであるが、現代に於ける獨逸經濟學の一傾向として、上述し來つたところを補充する意味で、この書の内容を跡づけてみよう。

經濟は、欲求と充足 Bedarf u. Deckung の永續的調和の精神に於ける人間共同生活の形成である。人間共同生活は家計、企業、市場等の社會形象の構成に現れるが、それは國民經濟に於て結晶する。經濟活動は調和の精神を以てこの國民經濟のうちに行はれる。欲求は單なる欲望

ではなく、實際的能力の物財的條件に關する支配をえんとする實際的意欲より出發する要求であり、經濟は個々の形象より發する欲求を調和の状態におくやうに配慮する。經濟のうちに將來の欲求の間接的充足に對する現在の欲求の直接的充足に關する權能の操縱 Absteuerung der Fugmacht が行はれる。こゝに權能とは對象に關する具體的な處分權力について分量的に考へらる可能性であつて、私經濟的概念として營利目的に向けられた權能で、何等物財的對象ではない。(S. 13—15.)

我々は經濟がゴツトルにならつて、すぐれて調和として把促されてゐるのに注意せねばならぬ。以下グルヂック||ゴツトルによつて今日の經濟組織に於て人爲的に作りだすことができるといはれる權能の概念が如何なる役目を果すかを注視しよう。

さて欲求充足行爲の秩序としての經濟は、ひとしくこの行爲の完成に於ける秩序としての技術、技術は經濟のために存在するが經濟は技術を通すことによつて行はれると云つた仕方で自分のものにする。こゝにゴツトルの「經濟と技術との四段階的相互關係」が成立する。充足さるべき欲求の充溢と我々の能力の限界からして生の困難たる欲求と充足との矛盾が生じ、これを克服するのが技術の存在の目的であるなら、この矛盾を緩和すべく自然に對する我々の權

力を高めるのが技術的進歩の課題である。技術的進歩そのものは欲求と充足との矛盾を緩和する理論的可能性、手続きたるにとゞまる。問題はそれが經濟生活に適用されたときに起る。技術的進歩は理論であるが、合理化は實踐である。合理化は技術の領域に於て獲得されたものを生の領域に於て現實化する。(S. 16—18.)

合理化はたゞに生産のみならず市場の領域に於けるあらゆる改良をも包含するのであつて、それは國民經濟の生活力 *Lebenswucht* を強めるために行はれる。マカロックは機械の改良と労働者の熟練の向上とを等しいとみたが、あらゆる合理化は、經營力 *Ertragswucht* 所謂「生産性」の向上をもたらしものであり、労働力の解放といふことに關して、よりよき機械の採用であらうと労働力のよりよき使用であらうと異なるところはない。(S. 18—22.)

かくて合理化は各個の經營に於て行はれるゴットルの所謂技術的合理化として理解せられるとともに、それは同時に國民經濟的規模に擴大された。これは補償説成立の地盤である。かくて、この著者も認める如く、戦前の合理化は生産の物質的條件の收善に、戦後の合理化は人間労働力のよりよき消費に特色があるわけであり、そして後者の場合には補償説の理論家達がよつてもつて立つてゐた機械の建設のために労働者が必要であると云ふ前提があらはに缺けて來

るのであるが、この著者はマカロックをうけつぎつゝこれを「生産性」の増大といふことによつて一色に塗り潰す。彼の「生産性」の増大は市場に於て行はれる。我々の自然への働きかけは市場に於てなされるのであるか。

グルヂックによればザイトツーフは、技術的合理化の本質を流動資本の固定資本化、人間労働の機械道具装置による代置にみ、オート・パウエルもこれに同意見であるが、これはヘロ・メラーが費消と效果 *Aufwand u. Erfolg* との關係の改良に求めたに如かない、企業家は技術的合理化を収益的なりと思はれる限り、即ち經營力 *Ertragswucht* が収益力 *Ertragswucht* たる限り行ふのであつて、技術的合理化は取引的合理化に從屬する。後者が前者をふくむこと、企業の經營の生産に於けるが如くである。技術的理性と取引的理性とは經濟的理性に從屬するものであり、經濟的理性の支配のもとに國民經濟的合理化は行はれる。メラーやパウエルは、國民經濟的合理化の目的として所謂社會的生産物の増大を考へてゐるものゝ如くであるが、國民經濟は財貨の流れによつて結ばれてゐる私經濟の單なる總計ではなく、それは現實的なるものとしてもつと複雑で單なる大きな觀念はこゝには妥當しない。國民經濟に於て決定的なのは、全經濟生活をより合理的に形成するその生活力である。(S. 23—25.) さてグルヂックは次の如く説き續ける

のである。アルプレヒトによれば合理化は如何なる條件を充したとき「経済的に正しいか」といふに、それが技術的施設による人間力の合理化を意味する限り、新生産方法の適用によつて節約された貸銀額が合理化の実施のために必要とされた資本増加にとつての支出より大なるときであり、なほ合理化に基く既存生産装置の減價をこの際考慮せねばならぬといふのであるが、アルプレヒトは全く取引的合理化を考へてゐるのであつて、既存の經營設備がよりよきものによつて代置されるとき國民經濟の生活力がこれによつて向上したのであつて、資本の廢棄又は減價を云々することは國民經濟的に無意味である。個々の經營にとつて収益的でない合理化は國民經濟的に誤れるものであるが、然し單に個々の經營の立場からしてのみ有利な合理化は、その正當さに不可欠な國民經濟の利害が十分に考へられてゐない。この意味に於て「社會的な生産費計算の立場から」眞なる合理化と誤れる合理化とについて語つたオットー・パウエルは評價さるべきであるが、合理化の國民經濟性の判斷は計算問題ではない。合理化が正しいか誤れるかは企業家がとる政策が國民經濟に如何に働くかによるもので、誤れる合理化とは、國民經濟の生活に合致しない合理化政策を云ひ、これに主觀的と客觀的との區別がある。前者は方向に於て正しいが、經濟生活の發展についての見誤りから企業家の樂觀主義によつて過度の合理化が

行はれた場合であり、後者は程度と方向に於て抑々の發端から國民經濟的に基礎づけられてゐないものである。アドルフ・ウェーバーが補償説は經濟的な合理化を前提としてゐるのであつて、經濟的に缺陷ある合理化を前提とせぬと云つてゐるのは尤もなことであり、問題は國民經濟的に正しい合理化と失業との關係なのである。(S. 30—31.)

かく、「正しい」國民經濟的合理化といふ概念がもたらされることによつて補償説に對する第二段の準備工作がなされる。然しながら資本主義社會を前提にする限り取引的合理化を考へるのがあたりまへであつて、グルチックの排撃したアルプレヒトが正しく、かつ三つの合理化が相互に排除する關係にあることを指摘したレーマンの方がグルチックよりよく現實を認識してゐるのである。なほ彼の云ふところをきかう。

國民經濟の生活力の合理化は一般には人間労働力の節約と考へられてゐるが、それは合理化の只一つの場合であるに過ぎない。例へば材料節約、屑の利用、市場條件のより合理化な形成等。然しこゝでは偏へに人間労働力の節約を目指す合理化と失業との關係が問題なのである。(S. 33.)

合理化が一生産部門に於て行はれて労働者の解放が行はれると、この第一次の失業は、合理化が國民經濟に波動的に影響するために第二次の失業をもたらず。論争はその繼續と意義とに

關聯して起るのであつて、これは經濟學成立以來最も激しく争はれた問題である。ケラーはこの論争に關して、補償説の理論家が一時的な・そして地方的な解放を決して否定せぬやうに、解放説の理論家は解放された労働者の補償の可能性を決して否定せぬ。たゞ大なり小なりの時日の経過と資本の蓄積を要求すると解釋してゐる (Alfred Kühler, Die Theorie der Arbeiterfreisetzung durch die Maschine, Leipzig, 1933, S. 7, ff.) のであるが、この解釋は誤りであつて、マンシユテットの云ふやうに (Mannstaedt, op. cit. S. 79) 解放説は、失業の不斷の増加を説くのであると。云ふまでもなく、ケラーの解釋が正しいのであつて、グルヂックはこゝで解放説に對する不勉強を示してゐる。古來如何なる解放説が機械の採用による、時處を問はざる、決して吸収されない労働者の解放を説いたのであらうか。蓋し經濟學に於ては、かのヘンリーク・グロスマンが云つた、「技術的關係から生ずる」技術的進歩を表現するものであつて、かゝるものとしては如何なる生産方法にも、社會主義的計畫經濟にもなほ存在するであらう「改良機械の採用による労働者の遊離」が問題なのではないから。

グルヂックはかくて漸く補償説の具體的な論證にとりかゝる。彼の以上の如き前提から論證されるものは何か。

彼によれば欲求と充足との矛盾は、我々の能力と意欲との誤れる關係にもとづく。我々の能力が可能ならしめる限り欲求の充足は保證される。(Mannstaedt) こゝに欲求の争ひがあるわけであるが如何なる欲求が充足に値するかは國民經濟そのものにかゝる。生の困難のために自然を支配する途上に於けるあらゆる進歩は、我々の能力の向上と、同時にその充足の以前に不可能であつた我々の抑壓された欲求の部分的解放を意味する。かくて國民經濟は一方に於てその充足のための種々な欲求の生ける争ひの表現であるとともに、他方できるだけより多くの欲求の充足をみたすべく、充足手段の調達をより合理的にする人間理性の努力を示すものである。あらゆる國民經濟的合理化は、その充足を求める欲求の満足のための人間力の一部の解放として理解さるべく、それ故合理化による労働力の解放は、未だ充足されない充足手段の生産に對する豫備以外のものではない。これが合理化とそれに伴ふ失業の意味である。このことを解放理論家はもとより補償説の理論家も見落してゐるのであつて、彼等は合理化と失業との問題をひとへに資本の側から提起してゐる。その結果は、マンシユテットの如く、合理化は節約された手段によつてのみ行はれることを證明して補償説を救つたと信じたり、レーデラーの如く、合理化が資本の廢棄をもたらすことを證明して補償説を破つたと考へたりするに到るが、これらは誤れ

る資本概念に基くものであつて、既に權能 *Fugmacht* の創造の可能性——こゝで紙幣、銀行券の發行が考へられてゐる(*ibid.*)——があるといふことからして、謂はゆる資本の存在が解放された労働者の仕事のために不可缺の前提条件でないことを示してゐる。リーダーは追加的信用による合理化の實行の不可能を論じたが、それは彼の似たやうな前提のもとには正しい。こゝでは、資本の人爲的創造の可能性のうちに於て、合理化によつて解放された労働者の再吸收が問題となる。それは新しい價値の創造をなしうる。そして人爲的につくられた權能を正當化する一の力を表すのである。資本はつねに弾力性を有ち經濟の要求に適應しうる。而してその弾力性はそれがいつも經濟の要求に適應しうるからあるのである。「資本は經濟活動の基礎を構成する。そして資本によつて經濟活動におかれた限界は、緩かに考へなくてはならないが、而もそのうちに國民經濟の生活が行はねばならぬ枠をつくるものである。だから國民經濟的合理の仕事に關する作用は資本について解釋されねばならぬ。だがそれに對する途はそこですべての經濟的過程が行はれる國民經濟によるのである。このことを解放理論家は意識してゐなかつた。そして經營外部の全經濟過程を完全に忽せにした。」(*ibid.*)

こゝに於て、解放理論家によつて前提されてゐる資本の有機的構成の變化といふ考へ方が問

題にされるのであるが、ゴットルによる上述の資本概念からすれば、不變資本Ⅱ可變資本の區別も必要でなければ、賃銀基金といふものも成立しない。「リカルド及びマルクスによつて用ひられた表現は實際生活から借りて製造されたもので、科學としての經濟學に於ては使用するに堪へないものである。」(*ibid.*)企業家は生産の遂行のために、生産手段の間の一定の關係を必要とするが、これは信用の可能性によつて果され、極めて稀れにのみ資本の賃銀に向けられる部分が經營設備に向けられる。國民經濟的に労働人口を維持するためにむけられる手段の固定量を假定することはできない。國民經濟は生活が二三の欲求の他のものを犠牲としての充足を永續的には保證しないやうにできてゐる。過度の投資によつて所謂賃銀基金は、労働力が極めて稀少であり、それが他の生産の犠牲に於て生産手段の生産に置き換へられねばならないやうな場合にのみ何等か損はれるのであるが、かゝる場合はごく僅かの間しかありえず、かつ資本主義はかゝる労働力の稀少性を知らないのである。(5. 56.)

グルヂックはかくて労働力の存在は賃銀の存在であると云ふ論理とともに、自らの論證せんとするところとまさに正反對のものを論證して仕舞つた補償説の論理が如何にそれ自らの否定であるかを、ほかならぬグルヂックに教へられるのであるが、それはさらに、彼自らの説明に

よつて示されるのである。彼はマンシュテットを次の如く紹介し、次の如く批評する。

マンシュテットによれば、合理化のために必要な資本が悉く所謂賃銀基金から出ることにはない。(Mannstedt, op. cit. S. 42.) 機械は先づ生産されそれから持ち込まれる。機械の採用によつて労働者が解放されるにしても、機械の費用は、機械によつて節約された賃銀に等しいとは云へない。その十分な利用は年數を経て生ずるのであつて、機械は節約された賃銀よりより多くを費用すると云へる。いまそれが賃銀基金から支出されるなら、ひとは年々の賃銀への節約よりもより多くを機械に投じなくてはならぬのであつて、結局賃銀基金をなくしてしまふのであり、労働者に對する支拂の手段はないことになる。かくて企業家はすくなくとも合理化によつてうる賃銀の節約と機械の價格の差を貯蓄から支拂はねばならぬのであるが、現實に多くの場合に於て、企業家は機械の建設のために賃銀基金にふれずに節約された資本を使ふのであつてこの資本によつて労働市場に於ける需要が増大する。そして機械の購入者がその費用を賃銀基金から支出するなら、そこでは賃銀基金から見掛けの上での支出が行はれるにとゞまる。マルクスの説くやうに機械の建設が賃銀部分から支拂はれることは殆どないのであつて、彼の云ふやうに可變資本の不變資本化は行はれない。またさういふ可能性があつて、機械の費用が節約

された資本から支出されても、企業家の手には機械によつて排除された労働者の賃銀基金が残るといふ理由からそれを無視することができる。既にリカルドは、需要の缺きえぬ何ものかを提供すべくこの資本を再び有効に使用するのが企業家の利益であることを指摘した。この場合排除された労働者は直ちに補償される、——マンシュテットが斯くりカルドの「販路の理論」を利用して、補償説を證明し終つたとMannstedt, op. cit. S. 52.) グルチックはこれに直ちに續けて次の如く云ふのである、「だが賃銀基金が既に以前になくなつてゐるなら、この可能性は利用されないだらう。」「マンシュテットは、かくてリカルドとマルクスとの説を敢て彼等自らの武器を以て拒否せんとした。もとより、労働力の雇傭が合理化との關聯に於てこの側面から殆ど脅かされないといふことの證明は彼に於て成功してゐない。寔に彼自身が相手の思惟方法によつてゐるのだからそのことは彼の果しえないところであつた。」(ibid.) グルチックは労働價值説を以てするときは補償説の成立しえないことを保證した。補償説はつねにそれ自らの否定に到達する。

とまれグルチックは賃銀基金説の二つの主要缺陷として、私經濟的思惟方法を國民經濟的觀察に適用すること、及び合理化の資本への直接的短期的作用を一般化することの二つを指摘する。

この著者によればリカルドはもとよりマルクスもマンシュテットも同じ賃銀基金説の範疇にとちこめられる。

合理化と資本の廢棄といふことについて、レーデラーは、合理化されてゐない生産から合理化された生産への資本の誘致と、合理化によつて經濟生活に大なる轉位が起り、合理化のテンポによつて大小の資本が廢棄される眞實の資本破棄とを述べ、これによつて補償の不可能なことを説いたが、これに對しては、生産手段の創設は權能の一回的の結合を意味するものとはいへ、永久的にこの權能は固定するものではなく、機械は勞働を提供するが、その成果は、機械そのものによる權能の形成であるといふのが機械の性質である(B. 57)ことが力説される。機械が勞働する！「機械生産の増大は、同時に吸收力の擴大、即ち、仕事の程度の増大と、市場に於ける追加的購買力の出現を意味し、それ等はあらゆる他の生産に作用することができる。」(B. 58)斯く云ふときグルデックはマカロック・ブニアチアンより一步も前進してゐない。さて合理化された生産に誘致された資本はレーデラーの考へるより遙かに少額なのであつて、然らば同じ資本の大きさを前提として生産の集約化はどれ程の勞働者を解放するかといふ問題があるが、「マンシュテットは、生産された機械はその購買者にそのうちにある勞働以上を費用しえないことを

規定せんとする。……彼は機械の建設とその適用とを混同するが故に、一大誤謬を冒すものである。」とて、機械の生産にはその適用が排除するよりは、より少數の勞働者を必要とする、何故なら何の節約もなければ何の進歩もないであらうから、と云つたマンシュテットの敵役の方が正しい(B. 60)と説かれるのである。

グルデックが斯く云ふとき、誤解せられたるマンシュテットは誤解せられたるマルクス・レーデラーと對立せしめられ、軍配が後者にあげられる。我々はさきにエルガンクによつて支持されたるマンシュテットをみた。(本書二〇頁参照)哀れなるは今やその最も忠實なる後繼者に裏切られたるマンシュテットである。誤解は誤解を生み、後者が前者を批判する。この悲劇は投下勞働と支配勞働、結局利潤の問題がはつきりしてゐなかつたことに基因する。

「補償説の理論家は、屢々生産の集約化によつて示される勞働機會の減少は、生産費の低下の結果たる資本の解放によつて補充されると云ふが、もとよりこれは例外の場合、而も生産手段の生産が問題のときにかあてはまらない」(B. 59)完成生産物の場合には消費者の節約があるが、これは資本の節約ではない。それは資本の形成を可能ならしめるのみ。かくて、「資本を費用せる合理化は同時に資本の解放を伴はねばならぬことではない」(B. 61)のである。レーデラーへ

の批評にも拘らず遂に全生産構造の轉位と舊生産手段の減價とに關してレーデラーへの妥協がなされるの止むなきに到つてゐる。而も、欲求と充足との階調をよりよく保證する國民經濟が萬能の働きを以て現れるのであつて、改めてこゝにブウニアチアンの上述の説が「鋭い批判」(S. 62)として評價される。即ち、一の形象の立場から喪はれたとみられるものも全形像即ち國民經濟の立場からみるなら、「純利得」たりうるのであつて、合理化によつて一定の資本破壊がもたらされるにせよ、合理化のために國民經濟の力が増大する。生活力の増大は同時に資本形成の促進である」(S. 63)から、資本破壊は償はれて餘りあるのである。何と便利な國民經濟の生活力ではないか。

次に合理化のテンポと云ふことが問題にされるが、原理的には技術の發展は經濟のそれより急速に行はれると云へないのであつて、技術の發展が速かであればそれは經濟のより速かな發展の歸結なのである。(S. 63)——かくてこの著者には、テクノクラシーや、後述する英國の思想家にもみられる技術が經濟を追ひ越してゐるといふが如きことは考へえられぬことなのである。ところで彼は補償説の反對者が技術的進歩が突如としてある生産部門にもちこまれる場合を語ることに反對すべく、「この『突如』といふことについては、發明の思想と、それによる技

術的進歩の成果との間には長い困難な道程が存在することを補償説の反對者は忘れてゐる。發明の思想からその純技術學的な實現に到るまでには既に全く技術の領域に起るところの長い労働が費されてゐるのである。それからはじめてこの技術學的進歩の經濟生活の必然性への適應が起るのである。技術學的進歩があらゆる方面に生活能力をえて、技術的な、即ち經濟生活へ應用しうる進歩となるには、長い時間と多くの努力とともに大資本がまた必要なのである。(S. 64 傍點は原著者)と云ふのであるが、この技術的進歩が經濟生活に實現されるには大資本を必要とするといふことが、補償説に對して抑々好材料を提供するものであらうか。彼はこゝでも自己否定をしかしてゐない。

グルヂックは補償説の本質的な點として、それが自由競争に基く價格の低廉化を前提としてゐる旨を述べ、自由競争のなくなつた場合にこの説はどうなるかについて、ザイトツェフが「補償説に對するこの懷疑の證として」合理化が國民經濟に於て行はれるために擧げた五つの條件を紹介する。(Manuel Satzew, Eine lange Welle der Arbeitslosigkeit in der "Arbeitslosigkeit der Gegenwart." Schriften des Vereins für Sozialpolitik. Nr. 185. München-Leipzig. 1932.)

ザイトツェフによれば合理化がグルヂックの言ふ國民經濟的合理化たるためには、一、合理化

された經營の生産物が價格の低廉によつてそれだけ餘計に賣れなくてはならぬ。二、そのやうな需要の弾力性がない場合には、價格の低廉にもとづく消費者の支出豫算の解放がなされ、それだけ他の商品に對する需要が高まらなくてはならない。三、合理化された經營の労働者の實質賃銀が價格低下に應じて高められ、それが市場の需要を高めるやうに働かねばならぬ。四、賃銀をそのままにしておいて、労働者の解放がないやうに、節約に相當した労働時間の短縮がなされねばならぬ。五、失業者の維持の金融のために、それに十分なだけの企業家利得の増大がなくてはならぬ。これだけの條件がなくてはならないのである。グルチックによればこれは一週四十時間労働制の主張に等しいのであるが、戦後の合理化にこれ等の條件の存在しないことは明かである。彼もこのことを承認する。然らば戦後の合理化は誤れる合理化であり、國民經濟的な合理化でないと云はれねばならないであらうか。

グルチックによればさうではない。彼によるとそれ自體取引的合理化の一種であるカルテルそのものが正しい合理化であるか、誤れる合理化であるか問題となるのであつて、「國民經濟的に正しいカルテル化は、假令期待された價格の低下を妨げるにしても、補償を妨げない。」(S. 67)のである。彼はまた云ふ、「國民經濟的に正しくないカルテルが補償を困難ならしめることは争

はれない。」(S. 68)然し乍ら、こゝまで來れば問題は明かである。彼の教へるところは正しいものは間違ひがないと云ふ同義反覆であつて、彼によると價格が高まつたまゝで賣買が行はれないにも拘らず(一)、補償が行はれる。カルテルによつて國民經濟の支配に委ねられた資本は寧ろ他の生産に向けられる。それはある欲求を他の欲求のために抑壓することに等しい。だが失業の立場からはこの欲求充足も以前のもののやうに労働を要求するから問題ではない。(S. 68)彼は彼の云ふ國民經濟が全く組織されたものであることを論證した。彼によると經濟に於てすべてのものは欲求充足のために生産されるが、「今日の經濟組織に於ては、それに相當する購買力をもつた欲求が充足される。」(S. 68)「購買力は……國民經濟に於ける所得によつて規定される」けれど、リカルドやその他のものが所得の分配に特殊な購買力を形成する機能を與へようとしたなら、そのことはそのまま認めることはできない。「合理化によつて獲得された利益が生産に於て企業家の『懷中に』入るか労働者の『懷中に』入るかは純分量的に購買力によつてどうでもよい。」(S. 69)彼は「全體の欲求のよりよき充足」(S. 69)傍點は原著者)を語り、「それ故、我々の問題を取扱ふにあつて、合理化が『労働者階級』にとつて『恵みか禍ひか』を問題にしたときすべて上述の著者達は根本的な誤りをしてゐるのである。」(S. 69)と述べ、機械の採用は労働者

階級の利益を屢々阻害するにも拘らず、なほ機械は全體のために必要であると考へたりカルドを以て「全く以て奇怪」(p. 88)と批判するのである。然し乍ら、「全く以て奇怪」なのは、「所得構造のあらゆる變化は欲求充足に働きかけねばならぬ。所得の一般的構造の變化のかゝる典型的な場合は合理化とその影響である。」(p. 70)と云ひ、「正しい合理化によつて解放された労働力の再吸収に於ける主要困難は、従來の理論の意味の資本の缺乏のうちにはなく、大衆の購買力の減少の橋渡しのうちにある。」(p. 71. 傍點は原著者)と述べ乍ら、而も「補償を妨げない」「國民經濟的に正しいカルテル化」を語るグルチックその人ではないか。蓋し、彼によるも「購買力の減少の結果その充足が取り残されねばならなかつた一系列の欲求と……合理化とその結果惹き起された他の一系列の欲求とがその充足を待つてゐる。他方に、生産者とその生産物の販路の保證を與へる購買力がつくられなくては其等を充足する手段の生産は始まらない。個々の國民經濟の資本家的發展の發端に於てはこの問題は殆ど提出されなかつた。」(p. 70-71)のであるから。資本家的發展が成熟をとげて、カルテル・トラストが組織された今日グルチックは抑々何の必要があつてかゝる議論をするのであるか。

「我々の問題の觀察に於て、新技術的進歩は、この進歩に基く生産の建設以前に行はれた合

理化に對する補償的要因として意識的に編み込まれた。だから上述の合理化と、それが合理化によつて解放された労働力によつて完成された限りに於て結びついてゐる經濟生活の過程が問題なのである。蓋しこの進歩は何等労働力の解放をよび起さないのみならず、よつてもつて生活にもたらされる追加的労働力をまで要求するのである。その際たゞに飛行機、ラヂオ、電信電話のやうな新生産を結果にもつ全新發明が考へられるのみならず、人間力以外の何等か他の費用部分を引き下げる種々な合理化の無数の種類が考へられてゐるのである。すべてこれらの進歩の實施は、以前には農村から都市への人口移動によつてより多く與へられたが、今日高度に工業化された諸國に於ては合理化によつて解放された労働力からのみ出て來る解放された人間力の存在がなければ考へえられないであらう。(p. 79-80.)

これがグルチックが補償説に關する議論に與へた結論であつた。

彼は失業のでない合理化を前提にする、そのうへで合理化は失業を生まないと論證するのである。この限りに於て問題はない。問題は、彼が、人間力以外の何等か他の費用部分を引き下げるいろいろな合理化の無数の種類の實施には、謂はゆる産業豫備軍を前提にすると述べてゐることであり、高度に工業化された國に於ては合理化によつて労働力が解放されることを認め

てゐることである。

グルヂックによれば、多くの合理化政策、とりわけ一九二四年から獨逸に於て行はれた合理化は、殆ど餘すところなく好都合に經濟生活に於て作用したのであつて、而もそれが多くの缺陷ある事態をもたらしたのは、それが主觀的に誤れる合理化だつたからである。かくて彼も云はざるをえない、「戦後の誤れる合理化の根據は疑ひなく經濟そのものうちにある。」(p. 81—82) この經濟そのもの、分析に經濟學者としての手腕はあるわけであるが、彼は戦後の獨逸經濟について次の四つを指摘する、第一は、戦争直後の經濟生活は極めて未組織であり、多くの勞働力を要求した經濟の建直しは一時的なものに過ぎなかつた。第二、外國との競争の必要上、亞米利加の合理化政策を鵜呑みにして資本の缺乏を甚しくした。第三、勞働組合、企業家團體等よりの干渉主義、第四、國民經濟の構造の變化による市場の狹隘化、これである。(p. 85—87) 即ち彼も亦、獨逸の國民經濟が資本主義經濟であることを論證したのである。

彼は主觀的には正しい合理化政策が客觀的には誤れるものとして、萬能の力をもつた筈の國民經濟に於て、未曾有の失業軍をもたらしたことを認める。そして勞働時間短縮はその救濟手段であるかといふ設問のもとに、一週四十時間勞働制の反駁を展開するのであり、こゝに、グ

ルヂックの本來の意圖もあるのであるが、もともと機械の採用は失業を生むかといふ補償説を廻る問題を、本來の主題とした本書に於て、これ以上彼の跡をおふ必要はないであらう。ただ彼の行途を突きとめておくことは徒爾ならずと考へられる。彼は勞働賃銀をそのまゝに勞働時間を短縮することの國民經濟に及ぼす影響を、だいたいファン・ツウ・ヂェネック・ジューデンホルスト (Beiträge zur Erklärung der strukturellen Arbeitslosigkeit. Vierteljahrshefte zur Konjunkturforschung, Berlin, 1927) によつて、それが賃銀騰貴として働き、大衆消費財に關する限り國民一般によつて負擔されねばならず、奢侈品に關する限り需要の減退生産の低下を來し、前者の場合には購買力の偏倚をもたらすことを指摘する。而して、長期をとつてみれば、勞働時間をそのまゝに解放された勞働力を再び經濟過程に吸収せんとするのは事柄を逆にするもので、稀少性が支配する場合それを克服することをせず、過剩にあるもの——勞働力を稀少なものと等置せんがために浪費することになるのである。資本缺乏の側から問題を提起することの誤謬を説いた當のグルヂックは、結局、資本形成を問題にせねばならなくなつた。こゝに於て、彼は「資本の形成と解放された勞働者の吸収」(p. 92ff.) を論じ、専ら、シュムペーター・レサールの信用の創設によつて資本缺乏を補ふ説を紹介するのであるが、彼はゴットルによつて、資本形成には

單に權能の創造が必要たるにとゞまらず、この權能が現存の欲求の充足から發し營利に仕へることを要求し、シムムベーターは資本の概念を財貨の流れから區別する功績を有つたけれど資本と信用とを充分區別できなかつたと述べる。シムムベーターにたちいるのは今はそのところではない。たゞグルチックが「人爲的に創設せられた權能が一般に資本となるためには、それが經濟的に正しく使用せられ、現在の欲求の充足から發せられねばならぬ。」(S. 96. 傍點は原著者)と云ふとき、こゝでも彼はたゞ神の如き働きをする資本をみるのではないか。かゝるものを前提とするとき、抑々何の故の經濟學なのであらうか。

彼は資本に萬能の力を見るけれど、事實の力は彼をして、信用創設による資本形成の促進は「全經濟生活にとつて危険の可能性ある冒險的な經濟政策」(S. 97.)であると云はしめる。蓋し權能の人爲的創造は特殊の條件のもとにのみ資本形成となるのであつて、その特殊の條件と云ふのは企業家自體がその人爲的な創造を強ひられないやうな「上向期にある經濟」(S. 97.)なのである。

然らば補償説の支配のもとにグルチックによれば如何なる失業對策が考へられたであらうか。彼は「誤れる合理化の結果に對する救済手段としての國民經濟的に正しい合理化」(S. 97.)を説

くのであるが、こゝでやはり上述のツウ・ディネック・ジューデンホルストによつて議論する。ツウ・ディネックによれば、失業を減らすと云ふことは經濟の流れをより活潑に運動せしめることにはかならず、このことは正常な關係のもとに於ては、諸生産要素の挿入の向上によつて起る。經濟の調和的發展を期するには發展は生産要素の協働が最もよくそのときの資本市場、労働市場、土地市場の状態に相應してゐる經濟領域に於てなされねばならず、資本過剰の場合には建設は資本を集約的ならしめる經濟部門に、労働市場が過剰の場合には、労働を集約的ならしめる經濟部門に、と云ふやうに展開されねばならぬといふのである。このツウ・ディネックの見解は、グルチックによれば、ある程度まで正しいのであつて、労働力の吸収が行はれるのであるが、これには次の三つの缺陷がある。第一、この生産の擴大のために事實上の欲求が成立してゐなくてはならぬ。第二、かゝる經濟の發展は何等か一面的であり、短期間しか存続しない。第三、これまで吸収されてゐた労働力は過程の終りには解放される。云ふに足りない資本の形成しかもたらされないのである。然しこれが經濟の上昇となり信用の創造による資本形成が促進されることは疑ひないが、このことが現れるかどうかは事情による。——こゝまでくれば彼は補償説を否定したも同然である。さて次にツウ・ディネックがより僅かの分量に存在する生

産手段の増加の方向に發展が行はれた場合を説くことについては、ツウ・ディ・ネックは資本に稀少性のある場合、利子の騰貴によつて資本の形成が促される經濟機構を前提としてゐるが、それは從來規則的にさうであつたにせよ、今日、全經濟生活が緩漫化してをり資本に對する需要が減退して仕舞つたとき、利子は資本の稀少性に拘らず反應せぬことが注意されねばならないと云ふ。(p. 97-98)——こゝでも事實上補償説の否定がされてゐるのである。

然し乍ら、グルチックはむげにツウ・ディ・ネックを退けるものではない。「資本の稀少性は節約を高めることによつてのみならず資本節約によつて闘はれねばならぬ。即ち何か十分用ひられないときには、唯一の逃れ路はそれを節約して取扱ふといふことにある。かくて我々は、週四十時間労働制の擁護者がなしたとは正反對の結論にくる。」(p. 98 傍點は原著者)

資本を節約して用ひるといふことは、彼によれば、生産に於てそれをできるだけ合理的に用ひることに他ならない。「このために、より僅かの資本でできるだけ多くの労働力を働かせることが出来るやうに生産をできるだけ合理的に形成するであらうやうな多くの合理化政策が必要である。」(p. 98 傍點は原著者) 合理化政策——それは「資本と現存労働力との關係の改良を目的とする」ものであるが、「この關係の改良は資本形成に等置さるべきである。ひとが合理化によつ

て招致しうる資本節約は、これまで試みられたものとは反對に經濟にとつて最も危險のすくない資本形成への途を同時に示すものである。かくて、我々は、合理化の缺陷は再び合理化によつて改良されるのを見る。だがこゝでは從來述べられた労働者を解放する合理化とは違つて、現存の労働力の他の生産要素——とりわけ資本——への關係を改良せねばならぬ労働を供給する合理化が問題なのである。」(p. 99) かくてグルチックはこの書を終るに當つて云ふ、「資本稀少性の克服にとつて合目的であるあらゆる可能な合理化政策に立ち入ることはこの勞作の課題ではない。それは技師に委ねられねばならぬ。……生はつねに困難の克服に對する新しい源泉を見出すのであり、そのために何よりも經濟指導家の大きな努力を必要とする。經濟生活が陥つたところの袋小路から逃路を見出すか否かは、彼等の能力如何によるのであつて、何等か死んだ經濟財に依存するのではない。」(p. 99) 云々。

これはまことに技師の經濟學と云はれねばならない。

企業家は既存の經營設備が償却されてゐないにも拘らず、合理化の必然性の抑壓のもとに設備を更新することを強要せられるから、これによつて經營設備の規則的更新より以上に労働が必要となるといふレーデラーへの反對説——これは相變らず機械を製作するに労働が必要

であるといふ説にはかならないが——を批評するにあつて、これは何かを再建設せねばならぬから破壊してもよいといふ考へ方に基いてゐるもので、ひとを納得せしめるものではないと云つてゐる(25, 26)が、このひとを納得せしめるにたらぬことが行はれるのが、現實なのではないか。そして何故にさうしたことが行はれるかを分析することが學問なのではないか。彼によれば、企業家はたゞに彼の企業にとつてのみならず國民經濟の生活力への影響を考慮にいれ、「全體への見透しをつけて」合理化を實施するといふのであるが(27, 28)國民經濟がかゝる構造を有つとき、何故に彼の説く如く、過度の投資に基く價格の低廉によつて収益力 *Earnings-wucht* の收縮が生じる(29, 30)と云つたやうなことが存在するのであらうか。

グルチックによれば獨逸に於ける戦後の合理化は主觀的に誤れる合理化であつた。然るに彼は別のところで戦後獨逸の企業家は労働組合による高賃銀のために企業を廢棄するか、生産費を低下するかを迫られたとき、賃銀をさげることができないために失業者をつくつたが、これは國民經濟的に正しい合理化であつたと云つてゐる。(31, 32)に到つて、彼の論理的からくりは明かである。あるものはすべてよし。合理化によつて合理化のもたらしたものを克服せんとする彼の提案はもしそれが意味があるとすれば、一週四十時間労働制に對する反對であるところにある。

§ 現代英國に於ける機械問題

一九三四年から一九三五年にかけて、我々は英吉利に於て、機械に關する次の如き著書をもつた。^{*}最近の英吉利に於ける機械論をみるといふ意味に於て、こゝにその内容を紹介するならば次の如くである。

^{*} 藤林敬三、機械と労働者、三田學會雜誌、第三十卷第一號、昭和十一年一月、參照。

其の一はブラウン「機械と労働者」A. Barratt Brown, *The Machine and the Worker*. London. 1934. である。

著者は Ruskin College に屬し、本書は大學擴張講座 University Extension Library の一つとして發行せられたものである。著者はその序に於て云ふ、「購買力と仕事に費される時間のより公平な分配が確保されるなら萬事巧くゆくたうといふことが一般に云はれてゐるが、これは明かに望ましい目的である。そしてそれを實現することは、疑ひもなく、我々の經濟問題の最も重要なものを解いたことになるだらう。然し乍ら我々はなほ心理的問題と倫理的問題

を取扱はねばならぬ。蓋し我々は生産された富に寄與することに於て今より成功するかも知れないが、生産者に對しなほ耐へられない人間的犠牲に於てさうするかも知れない。新經濟秩序又は計劃社會に對する提案を試みるものは、機械の地位の問題及びその労働者の生活への影響の問題に殆ど注意を拂つてゐない。私は經濟學者ではないが、この心理學と經濟學の境界線への行論が、問題の部面に對してよりよき權利をもつものによつて、退けられないことを希ふものである」と。

機械文明を論じ、機械の得失を問題とするこの書は、この序文からも察せられるやうに、本來の經濟學のものではなく、寧ろ文明批評乃至産業心理學のものである。従つて労働時間の短縮の問題を取扱ふにしても、それは「閑暇の問題」としてとりあげられてゐるのであるが、著者は、なほ本書のなかで「科學的經營と労働」「合理化と失業」を論じ、補償説の問題にふれてゐる。

ブラウンによれば、合理化とは生産及び分配を最も經濟的かつ能率的に組織する目的を以て無秩序を廢して、企業結合の諸形態、機械化、科學的管理法、能率増進法の増大の諸傾向を慎重にそして組織的に獎勵することであり、彼はその傾向の一つとしてフォードの經營方法をと

りあげ、單調にして不熟練な作業を廢止するといふフォードの主張にも拘らず、スピード・アップによる神經的緊張が労働者を疲勞せしむるといふ非難を免れえないことを指摘する。然し乍ら、合理化政策についてより問題となるのは、過剰生産と失業とである。ブラウンによれば、周知の如く一時的な技術學的失業は不可避免的であるが、永久的に等しくそれが不可避免的なりや否やは問題である。失業は、全労働力の減少か又は婦人労働の男子労働への代置かによつておこる。(P. 168)例へばマンチェスターに於けるハンス・レノルド製作所に於ては、一九一三年より一九二七年の間に婦人の男子に對する割合は、三一%から一〇〇%に上昇した。機械化された産業からの労働者の排除は、これに關聯してさらに他の労働者の排除をもたらすものであり、失業は波及する。それが窮極に於て就業するにしても、それまでの期間は相當長く、かつ獲得する賃銀は以前に比して低いのが一般である。

然し乍らブラウンによれば、技術學的失業に對しては、労働に對する新需要が、建設及び準備産業部門に對するところの明かな刺戟とは全く別箇に生じるのであつて、次の如きサアチエント・フロレンス教授の説をひいてゐる。——因みにこの説は、従業員數がその会社に於て機械化による排除にも拘らず増大したことを、その生産品は會社の外に於て内に於けるに比し十倍

乃至廿倍の人員を就業せしめたことを主張するファードの説に要約される。――

「若干の製造業に於て、機械は人間に代替されたものゝ如くであるが、このことは一般の産業及び商業にあてはまるものではない。而して經濟的進歩によつて代替された人間は報酬としての仕事を見出しえぬといふことは正しくない。一九二四年から一九二九年に到る間に、實際の雇傭人員數は、製造業に於ては人口に比例して増大したのであるが、建築、運輸、分配及び給付の諸産業に於ける雇傭人員數は、三、五四九、〇〇〇から四、一四八、〇〇〇に増大した。これは人口増加を十分に超過してゐる。明かに、機械化の結果として製造業からの生産高が大なる程、その増大した生産高を販賣給付するに必要な人員數は大である。蓋し後者は通例機械によつては果されないから。」(P. 166)

かくてブラウンは云ふ、「この國に於ては、機械化に基く勞働の一般的排除に關して何等の證明もない、而して失業は技術學的排除のある場合よりもない場合に於てより著しいやうに思はれる。他の要因、とりわけ世界恐慌、大戰後の戰債賠償の問題、信用の崩壊に結びつけられた要因によつて實際には惹き起された失業を機械化に歸する傾向がある。」(P. 166)而して、彼によれば、補償の役目をする二つの要因があるのであるが、それは、合理化の結果の現實の費用

の低下と、生産物の低廉化乃至高賃銀政策の結果の購買力の増加とである。(P. 167)かく彼は補償説を信じ、次の如く樂觀する。

「我々は合理化政策そのものが世界的規模に於て合理化されねばならぬ點に達しつゝある。これ以上の發展が、世界の民衆の購買力を擴大するやうに生活標準を高め、餘暇をつくりといふ目的を常に眼前においてなされるなら、我々は未來に對して恐れる必要はない。」(P. 169)然し乍ら、彼による補償の行はれることを妨げるいくつかの障礙がある。それには、經濟的國家主義と高率關稅政策、生産高の制限と價格の人為的維持、無統制なる通貨及び信用政策の混亂、需要の弾力性と動きに關する知識の缺乏が數へられる。「これらの障礙が、國際貿易の自由のための國際的方策、生産の科學的統制、通貨及び信用の統制、需要の世界的動きに關する知識の供給によつてのみとりのけられることは明かである。現在に於ては、これらの方向への進歩の希望は殆どない。」(P. 167)

「この國に於ては機械化に基く勞働の一般的排除に關して何等の證明もない」とブラウンは云ふ。然し乍ら、後述する如く、ウィリアムス編纂の書に收められた、勞働者及び勞働組合側の報告は何を物語るのであらうか。

英吉利に於ける製造業の發展 (一九二四—一〇〇)

年 號	工 業 生 産	雇 傭 勞 働 者 數	個 人 當 り 生 産 高
一九二四年	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
一九二五年	—	(九七・七)	—
一九二六年	—	(九三・四)	—
一九二七年	一〇六・八	九三・九	一一三・五
一九二八年	一〇一・九	九三・四	一〇九・三
一九二九年	一一一・三	九七・三	一一四・四
一九三〇年	一〇一・三	八八・三	一一四・七
一九三一年	九〇・七	八〇・四	一一二・八
一九三二年	九〇・八	七九・六	一四一・一
一九三三年	九〇・五	八四・七	一一三・九
一九三四年	一〇四・五	八八・三	一一八・四

「性急な結論を避ける」(Wladimir Woytinsky, 'Three Sources of Unemployment. Geneva. 1935. P. 56. P. 75.) 統計學者ウ・イチンスキーが、英吉利の工業生産について作製した次の表は、一の否定すべからざる事實を示してゐる。ウオイチンスキーは、「この國の經濟的困難はその根柢を鑛山業及び製造業にもつてゐた」(P. 69)ことを指摘し、「剩餘」労働者を工業から非工業の職業に移すことによつて何か労働市場の均衡を回復しようと試みることは殆ど成功の見込みがない。商業と運輸業とはこれまで英吉利に於て人口過剰の職業ではなかつたかも知れぬが、然し分配の機構が合理化されねばならぬときが早晩来る。」(P. 78)ことを注意してゐる。

我々は次に、ワトソンの「機械と人間」W. F. Watson, *Machines and Men, An Autobiography of an Itinerant Mechanic.* London. 1935. をめぐらしてみる。

これは副題も示す如く、巡廻機械工の自叙傳であり、一八九六年の夏にはじまる著者の生活體験の記録である。従つてこの書の提供するところは經濟理論ではなく、この時期の英國産業の側面史であるが、その最後の一章は「機械とその目的」と題され、労働者が如何なる見解をもつものであるかをうかがはしめる。

「私は、産業労働者が一般に機械によつて奴隷化されぬこと、そして失業とそれに伴ふ災害

を恐れるために彼等はあるがまゝの事物に従順ならしめられるかの如くみえるが、彼等は機械以前の時代の労働者を特徴づけたと同じ個性、同じ闘争本能、同じ創造的衝動をもつてゐること、而して置々たる大量生産工場の最中であつて、彼等が自己を表現せんとして叫んでゐるのをきくことができることを示さうと試みてきた。工場労働者はロボットではない。また彼等は自動人形に發展しさうにもない。彼等はまことに他の階級の如くに、進歩の眞の推進力に屬してゐる。他方我々は、その力、運動量、推進力に力を挫かれ、その萬能に眩惑され、昔の異教徒の信仰のやうな狂信的な神祕主義を以て機械をとりまいた。その直接の効果とたゞかふ緊急な仕事にとりかゝることをせず、その眞實の目的を理解することをせず、我々は機械の前に拜跪する。而してこの盲目的崇拜によつて、我々人類は必然に機械に隷屬せねばならぬと云ふ觀念の奴隸となつた。我々は、世界は機械の線に沿ふて計劃されねばならぬこと、機械は人間生活と幸福に對する犠牲の如何を問はず支持されねばならぬこと、而して機械自體がかゝる可能性を排除するといふことを理解せず、近代史は人間的ロボットによつて奉仕されると考へるやうにみえる。

我々は、機械の力は、ロボットが恐らく存在しえない新しい驚異に充ちた文明に對する堅實

な土臺であるといふ事實に直面せねばならぬ。そして我々がそれに達するまでには恐らく多くの困難を経ねばならぬとはいへ、機械は堅實にかゝる文明の實現に向つてはたらいいてゐるのである。」(P. 224.)

「機械は、爾來進歩した。そして技師や科學者の夢を遙に後において益々人間の生産性を増加しつゝ進歩を續けることであらう。我々は繰返して問ふものである。如何なる目的のために？ 何百萬の人間が失業し、世界中貧困が忍び寄つてゐるとき、世界の政治家をして、生産を増加し、賃銀を低下し、生活標準をさげることの必要、關稅の賦課、經濟、労働者にその受ける賃銀に對しより以上の労働又は給付をなさしめる必要を論ずべく會議を開催させるためであるか。確かにそれは人間の機械による仕事の目的ではない。唯一の理解できる目的は、萬人に對して經濟的保證を與へることだ。あらゆるものに、婦人や兒童により富む可能性の十分にありより幸福な生活を與へることである。それが機械の眞の目的である。」(P. 225—226.)

我々は次にステューアートの『鑛山、機械及び人間』W. D. Stewart, *Mines, Machines and Men*, London, 1935. を擧げることがである。

著者は、序言に於て、「この書は、炭抗業の經濟學に關する網羅的な研究を以て任ずるものではない。それは寧ろ主として炭抗夫の見地よりする事態の叙述であり、かねて炭抗の條件が何故過去二十五年間に於て労働者にとつても産業一般にとつても悪化して來たかについて、すくなくも若干の理由を示すことを目的とせるものである。」と述べてゐる。著者は労働者教育協會 Workers Educational Association の經濟學の講師であり、本書はその意圖するところをよく果してゐる。

著者は、機械制度の採用とともに賃銀から固定資本に移された巨額の費用について語り、機械が炭抗業に於て熟練労働の大部分に代替され、仕事の危険と疲労とが増大し、一人あたりの仕事の量が増加し、結果として、労働者の地位が失はれることゝなつたことを指摘する。これは彼によれば、「この（機械化の）制度の採用によつて起る最も重大な缺陷の一つ」(P. 47)であるが、さらに不熟練労働の支配的となつたことにより、賃銀の一般的水準の下落を來し、その將來の高騰を妨げるのである。なほ著者によれば英吉利の炭抗業に機械が導入されて來たのはこの世紀に入つてからのことであるが、それが労働条件を悪化したことは、十九世紀に於て炭抗夫が他の産業に於けるが如く機械に對して敵對的たることはなく、廿世紀に入つてもさう

ではなかつたに拘らず、最近に於て機械に對する反對が著しいといふ事態にもうかゞはれるのであつて、(P. 282)一九二四年から一九二九年にかけての炭抗夫の傷害事件は、雇傭人員一、〇〇〇につき一五六から一八一に上り、一般の事故は、交代労働時間一〇〇、〇〇〇につき、一九二三—二五年に於て、七六・二、一九二七—二九年に於て、八三・九、一九三〇—三二年に於て八二・一といふ状態である。(P. 6.)

補償説に關して、ステュアートは、技術的條件が英吉利に比して恵まれてゐる亞米利加に於てさへ、ストッキング教授は「機械化は炭抗主の問題を解決しなかつた。それは失業の問題を重大化した。」と云つてゐると述べ、さらにレーデラーの説を援用してゐる。(P. 33—35)然し乍ら、ステュアートが、機械の採用に基く労働条件の悪化は窮極に於て補償されると云ふ「古典派經濟學者の議論」(P. 39)を紹介し、「この理論は、云ふまでもなく、市場が擴大しつゝあり、労働が新過程によつて直ちに吸収されることができた時代には全く論理的だつた。然しかゝることは、今日乃至豫想された將來の事態ではない。」(P. 40)と云ふとき、彼は補償説に對する原理的の讓歩をしてゐないであらうか。蓋し、補償説は、彼が説明してゐる如く、その行論に於て、「労働者が彼の産業の生産品の直接的消費者たる」ことを前提にするのであるが、資本主義

生産が利潤生産であることは大戦前後に於て異なるところはなく、大戦が補償説の論理そのものを變化せしめたわけでもないから。

さて第四に擧げられるのは、ウィリアムスの編纂にかゝる『人間と機械』 *Man and the Machine*, ed. by Hubert Williams, London, 1935. である。

この書は、直接間接産業にいろ／＼な立場からかゝるものの機械に関する意見を集めたもので、第一部は、「機械を統制するもの」と題して企業家側の意見を、第二部は「機械によつて統制されるもの」と題して労働者側の意見を、第三部は「観察者」と題して經濟學者や労働組合側の意見を輯録してゐる。ひとは本書を「全體として科學的勞作としての價値は僅かである」と評價することはできない。

本書に序言を與へてゐるジェイ・ビー・プリーストリーによれば、機械はそれが如何に大きく複雑であらうとも道具たるに過ぎない。機械は今日に到るまで數千年間存在を續けてきたものである。而も彼は云ふ、「我々の時代の紛擾の半は我々の發明家や技師達が我々の經濟學者や政治家達を何年か追ひ越してゐるといふ事實によつて惹起されてゐる。」あきらかに誤つてゐるのは機械ではない、愚圖々々と時代に後れてゐるのは經濟制度である。「大規模な機械制度の採用は

到る處計劃經濟を、そして恐らくは凡ての重要産業の社會化を要求してゐるやうに思はれる。」(P. 10)と。而してプリーストリーは、なほ餘暇の問題の存することを告げるのを忘れてゐない。

編纂者ウィリアムスは、消費者の立場からすれば機械化は生活の向上をもたらししたが、生産者とりわけ労働者の立場に立つとき機械は失業と熟練の不必要とをもたらしたことを述べ、「もしさうであるなら、そして多數のものがさう考へてゐることは確かであるが、それは機械及び機械を支配しつゝあると正直に考へてゐるものに對する恐るべき告發である」(P. 8)ことを指摘する。第一部には、自轉車製造業のハロルド・ポウデン卿、印刷業のラルフ・スティー・ハツェル、炭坑業のリチャード・エイ・エス・レッドメイン卿の三人の意見を收めてゐる。

ハロルド・ポウデンは「餘暇の將來」と題して、彼の社會哲學を述べてゐる。こゝではその間にみえる彼の經濟學の見解が問題である。彼によれば現在英吉利に於て約二百萬の人間が仕事をする意志があり乍ら彼等の力を越えた事情のために仕事をすることができず、その爲めに仕事をしないで支拂を受けてゐる。「これらの人達は、私の考へるところでは、主として機械力が人間力によつて代つたために、部分的に強制された閑暇の生活を送つてゐるのである。こゝで若干の經濟學者は機械が人間にとつてかはることを一時的にしか認めないことを述べておくの

は不公平なことではない。彼等は機械生産は価格を低廉ならしめることによつて需要を増加すること、また需要は無制限であるからして、排除されたものは不可避免的に産業に復歸することを主張する。然し乍ら、私見によれば生産する機械の力は人間の消費する力を追越さねばならぬのであつて、時間の経過につれて人間の必要を充たすに必要な人間(労働)時間数は次第に減少する。(P. 13)と彼は云ふのである。即ち、補償説はひとまづ否定されたのであつて、彼は機械以前の時代に於ては賃銀俸給として支拂はれる部分は、生産される新しい富にほゞ比例してゐたが、今日に於ては、機械が人間にとつて代ることにより、生産高が二倍になり賃銀が半分になることは十分考へられることであり、生産費が低下して生産物の貨幣價值が下つても、それが流通過程から機械に固定した購買力の減少を補償しないことを指摘してゐる。(P. 30)

ラルフ・スィー・ハツェルによれば、印刷業は外部的事情に妨げられることなく正常な発展をとげた産業で、機械化の問題を研究するに極めてよい領域であるが、そこでは、機械の導入は生産費を低下してより大なる需要をもたらし、多くの労働人口を吸収した。機械の發展は、賃銀、時間、労働条件を次第に改良した。機械化はまた熟練労働者を排除しなかつた。(P. 43-44)——これがハツェルの結論であり、彼は補償説を完全に支持するのである。(P. 41)然し乍ら、

彼も、例へば前世紀の終りに植字鑄造機、自動鑄字機の出現により、以前の植字工、植字機が排除されたといつたやうな事例はこれを認めてゐる。(P. 37)また、機械化が不可避免的に若干の技倆の喪失、單調な労働の反覆等の労働条件をもたらした事實を承認してゐる。

リチャード・エイ・エス・レッドメインは、「炭抗業の機械化」を論じてゐるが、彼の報告によれば、一九〇八年から一九三三年の間に、生産費は七七%の増加、賃銀は七一%の増加、利潤は七八%の減退である。(P. 45)労働時間の短縮が機械化による失業を補償し、英吉利炭抗業がギルド社會主義の説くやうな發展過程にあることを述べるが、その間はずきりした理論的見解があるわけではない。

第二部は労働者側の意見であるが、エイ・バーレーは炭抗夫として、機械の採用によつて炭抗が決してより安全な場所にもならず、労働時間も短縮されず、——「現在では傾向は極めてはつきりと反對の方向にある」——賃銀もあがらず、家庭や仕事場により多くの幸福がもたらされたかどうかとも疑はしいと報告してゐる。(P. 72)

技師ダブリュー・フェリーは、合衆國に於て一九一九年から一九二七年に、全工業生産は三〇・五%増加したに拘らず、製造業に於ける労働者数は九五〇、〇〇〇の減退をみたことを報じ、

さらに英吉利に於ける自動車製造業の合理化に例をとり、一九二三年と一九三三年とを比較するに、その生産高は二〇一%の増加あるに比し、發動機部分に於ける人員は二三%しか増加してゐない。また一九二九年には、二二七、七九六名が二三九、九二三臺の生産にあつてゐたのに對し、一九三三年に於ては、二二七、五五二名が二八六、二八三臺の生産に當つてゐる状態であると云ふ。(P. 75) フェリーはかく合理化が労働の強化であることを實證し、「我々は科學が人類の大部分を廢棄しないうちに科學を廢棄すべきだらうか。若しかゝる態度をとるなら、反動であり愚であり、ラダイトとして特徴づけられるに値する。」(P. 83)と論斷する。

次に鋼鐵労働者ウィリアム・グレゴリーも職工一人あたりの生産高が機械その他の新生産方法の採用により増大したことを實證し、「職工はたゞに機械と競争せねばならぬのみならず、少年少女との競争に出會はねばならぬ。」(P. 83)と云ふ。生産高が大戦以來増加したにも拘らず、それに伴ふ従業員増加はなかつたのであつて、このことは機械工業に於て最も甚しい。一九一三年には、二・四%の失業があつたのが、これは一九二六年、二・五八%、一九三〇年、一九・〇五%、一九三二年、二四・二五%に増加した。一九三三年には一六・〇三%であつた。賃銀は熟練工に對して週三磅、多數の半熟練工に對してはもつと低い。(P. 95)「これまで私は機械工の地

位を述べることに勉めてきた。科學の發展によつて、如何に彼は産業の貴族から彼の力倆に相當しない水準にまで引下げられてきたことだらう。然るに他方に彼を使用してゐる會社は巨額の利潤をえてゐるのである。彼に直面する事態は「薔薇色のもの」ではない。蓋し、發展の傾向はより多くの失業を生みだすことにあり、機械工のすくないことによる彼の賃銀の増加の機會は可能に思はれないからである。(P. 96)彼はシ・フィールド附近について失業の矛盾を描寫する。「労働組合指導者や若干の傭主は、労働時間の短縮がない限り、産業に労働者を吸収する希望はないと考へてゐる。一九三〇年六月廿一日のスタティストは「各労働者の生産性の増加は失業者数の増大と平行した」ことを證明した。私には「スピードと能率」を「崇拜」することとは馬鹿らしく思はれる。」(P. 97-98)

木綿工ジム・ワードはランカシャーの衰頹を描寫して遺憾ない。「工場の經營を維持する努力として無数の試みがなされたが、お得意の方法は再三再四の賃銀の切下げであつた。」「他の方法は、織工一人當りの織機の臺數を増加することで、織布の種類により傳來の四臺は五臺六臺、或は八臺になつた。」(P. 109)「高度の熟練をもつた幾千の職工が、むなしく職を求めて街を歩いてゐる。」(P. 110)と云ふのである。

第三部には、まづアーノルド・ウィルソン卿の「人間と機械」と云ふのを収めてゐるが、これによれば、貨幣、賃銀、生活費の指數から推して、ひとへに機械化の進歩が生産高、従つてまた賃銀をして以前の十年に比して高い水準を保たしめたのであり、我々は機械化に高度の文化を負ふてゐるのである。(P. 138—139) 而して「機械化は、破局的に急激であつて單一の産業に於ける男女の大多数に影響を與へるとき、恐らく、そしてまた事實、失業の原因である。それは、全都市又は全地域の大多数の住民がそれにたよつてゐる地方化された産業に影響するとき最も危険である。」(P. 139.)

次に労働組合の意見を代表するものとして、ウィル・シェアウッドは、現在世界に約三千万、英吉利に約二百五十萬の失業人口のあることから説き起して、英吉利に於ける、炭坑、鋼鐵、機械、造船、建築、織維、鐵道、農業の各産業について、技術的進歩が、熟練労働の排除、一人當り生産高の増大、従業員の減少をもたらしたことを實證する。例へば、農業については刈取、打穀に使用するコンバインの作用を述べ、收穫が三週間以上も短縮し幾千の農業労働者が仕事を失つたこと、一九三四年の調査によれば生産高の増加にも拘らず、二一、〇〇〇の農業労働者の減少があり、過去十年間に九〇、〇〇〇の減少をみたことを報じてゐる。(P. 154) 「科

學と發明とは、人間労働を不必要ならしめつゝあるにもかゝらず、機械によつて代置された労働者に對する新しい雇傭の機會は現れない。(P. 154) これがその結論であり、科學的改良の目的が人類をして不必要な労働を免れさすにある以上、賃銀を切下げずに週四十時間労働制の採用といふのが、シェアウッドによれば、生産性増大の論理的歸結である。(P. 157.)

次にイー・エフ・エム・ダービンが經濟學者としての「權威」を以て機械を論じてゐる。彼はまづ、機械に對して現在二つの非難——機械が労働を排除し、失業の原因となり、賃銀をひきさげること、機械の採用が労働に單調と疲労と危険とをもたらす労働條件を悪化すること——があることを紹介し、これに對する二つの對策をとりあげる。第一の對策といふのは、これ以上の災害をもたらさないために技術的進歩を現状にとゞめようといふのであるが、これはダービンによれば、「最初の機械破壊者もつた破壊的絶望の、近代的なそして合法的な形態に於ける再發」(P. 165.)である。國民經濟が外國貿易に依存してゐる以上、この方策は現在以上の經濟的困窮をもたらすことを覺悟しないでは採用されないであつて、さしあたり問題とならない。問題は、新機械の採用は「社會的必要」に應じて「科學的に統制されて」ゐなくてはならぬといふ第二の方策であり、それは現在労働時間を短縮し賃銀をひきさげずに機械の生産性の増大

を迎へようといふ提案となつて現れてゐる。「この政策は機械の問題の解決であると同時に生活條件の急速なそしてみるべき改良の可能性を開くやうに思はれる。」(P. 168)この方策を検討することがダービンの課題である。

ダービンはまづ「機械の基本的性質」として、機械が全近代文明の一般的にして必然的な基礎をなすものであり、「より高い生活水準とより大なる生産性の唯一の希望はなほ機械生産のより大なる發展である。」(P. 178)旨を述べ、「機械の機能」なる項目に於て、何故さうであるかの分析にとりかゝる。

ダービンによれば、全社會の生活水準は、終局に於て完成生産品を生産する力に依存してゐるのであつて、英國の人口は一八五〇年から一九〇〇年に到る間に消費を二倍にすることができたが、これは機械の賜物である。原始的な生産者は、機械の使用によつて——我々はこゝでダービンによつて簡単な小刀や鋤が機械として扱はれてゐるのに注意しなくてはならぬ。(P. 176)——生産性の増大を來したときには、次の三つのいづれかの態度に出る。第一、從來の生産を増加して生活水準をたかめるか、第二、從來の生産に於て節約しえた時間を以て他の生産にあたるか、第三、餘暇として物質的生産以外に利用する。ダービンはこの論理をそのまゝ社會にも

たらずのである。即ち、第一は需要の弾力性のある場合であり、第二は、労働の移轉を件ふ場合である。第三の場合について彼は云ふ、「もとよりある發明を生産高を増加し時間を部分的に減少せしめるために用ひることはできることである。然し二つの目的は一般に、また量に於て、相互に全く相排除するものである。」(P. 179)と。ロビンソンの經濟をそのまゝ資本家的機械生産にもたらした矛盾はこの第三の場合の説明にダービン自身最もよく説明してゐる。蓋し、彼の云ふ「生産者でもあるところの社會に於ける消費者の團體」(P. 178)が統制する經濟に於て、機械の採用は、労働時間を減らすとともに生産高を増大することを相排除することなく果すであらうから。

上述の如き論理のもとに、ダービンが引き出した結論は、まづ第一に補償説の正しいといふことであつた。即ち、彼によれば、短期と長期とを區別し、一産業と全産業とを區別して考へれば機械の採用による補償は自明のことなのである。(P. 179)蓋し、彼によれば、第一に、機械が採用されればその生産部門に於ける生産費の低下となり、生産は増大する。賃銀は結局そこから支拂はれるから賃銀の増大となり、労働に對する需要をます。——ダービンは労働者は自分の労働してゐる資本家の商品を買ふものと考へてゐる。——第二に、ある生産部門に於て費用

expenditure が低下するとき、全社會の總貨幣所得が減ると考へる理由はないから長期をとれば他の生産部門で費用が高まり、そこで労働に對する需要が出てくる——ダービンが費用を特に賃銀として全く相對的に考へてゐること、相變らず資本を單なる生活資料と考へてゐることが明かである。長期をとれば他の生産部門でも費用が下がらねばならない。然るに彼によるとそれが上つてゐる。利潤がどこかへ消えてしまつてゐる。機械を論じながら機械がないのだ。

——第三に、長期をとつてみれば、労働は以上の如く到る處吸収せられ、労働時間は若干短縮されてくる。(P. 180—181.)

ダービンが抽出した第二の結論は、労働賃銀を切下げずにとつておいて、労働時間を労働生産性の増大しただけ短縮するといふ方策は、生産物も利潤も賃銀も従前のまゝといふ事態をもたらず。それはよしとするも労働時間の短縮なければ低下したであらうほど生産者の費用 *producers' costs* が低下しないと云ふことであつた。云ふところの生産者の費用とはダービンに於て、賃銀以外のものではない。彼は労働時間を短縮すれば賃銀が上るといふことに苦情を云つてゐるのであるが、彼はこのことから、かく生産費が低下しない以上は、國民經濟なるものが外國貿易に依存してゐる限り、上述の方策は行はれえず、若し行はれるとするなら、それ

は國際的に協定してのみ行はれるのであり、假令それが國際的に行はれても生活水準は餘暇を生じるのみで向上しない。特別餘暇はある犠牲を含むもので、それは生産的能率を高めるために必要であることを力説するのである。(P. 182—184.)

「機械の問題の解決であると同時に生活條件の急速な、そして見るべき改良の可能性を聞くやうに思はれた」ところの方策の眞價は經濟學者ダービンによれば斯くの如きものであつた。然し乍ら、彼の論理は自己否定的にのみその結論をひきだしてゐるのである。即ち、機械を採用してその効果だけ労働時間を短縮すれば彼の云ふ如く生産物の分量はそのまゝだらう。そのとき賃銀と利潤はそのまゝであるだらうか。資本家的交易經濟を前提にすれば、機械は賃銀節約のかぎり採用される。そのまゝと云ふことはない。假りに賃銀も利潤もそのまゝといふことにしようなら、その場合生産費の低下しないのは當り前である。

ところで、形式的に一方の生産費が高まれば他方は低下するといふ彼の論法を使用すれば、國民經濟全體としては生産費はもともとで、別に賃銀をそのまゝに労働時間を短縮するからとて外國との競争に負ける心配はないのである。若しそれ國民經濟全體として彼の云ふ生産者の費用即ち賃銀が上ることになつたら、それこそ生活水準の向上ではないか。